法一躰にして別異なることを得ず、この故に人を謗ずるは則ち法なり、法を毀るは則ち人なり、人を謗し法を謗すれば定めて阿鼻獄に墮せん更に出づる期なし、世人この義を知らずして舌に任せて輙く談じて深害を顧りみず、寧ろ日夜に十惡五逆を作るべくも一言一語も人法を謗すべからず、殺盜を行ずるものは現に衣食の利を得、人法を謗ずるもの我に於いて何の益かあらん。公子が曰く謹んで示南を承はんぬ、今より以後敢て違犯せじ。公子が曰く既に人法を謗すべからざることを承はんぬ、然れども未だ委しうせず人法に幾種かある、爲當深淺ありや。師の曰く大にこれを論ずるに二種あり、一には顯敎の法、二には密敎の法なり。顯敎の中に又二つ、言く一乘三乘別なるが故に一乘とは如來の他受用身、十地より初地に至るまで現じ給ふ所の報身所說の一乘の法これなり、三乘とは應化の釋迦、二乘及び地前の菩薩等の爲に說き給ふ所の經これなり。密敎とは自性法身大毗盧遮那如來と自眷屬と自受法樂の故に說き給ふ所の法これなり、所謂眞言乘とはこれなり。かくの如く諸の經法はその機根に契當して並に皆妙藥なり、その經敎に隨つて菩薩論を造り、人師疏を作る、末代の弟子この經論に依て讀誦し修行す、これ乃ち人法の差別なり、淺深福罰は十住心論の如し。公子が曰く、今師の

說を聞くに已に人法の別なることを知んぬ、然るを今諸の論疏を造るもの皆他を破して自を立つ、謗法と成らずや。師の曰く、菩薩の用心は皆慈悲を以て本となし利他を以て先と爲す、能くこの心に住し淺執を破して深敎に入るゝは利益尤も廣し、若し名利の心を挾んで淺敎を執して深法を破せばこの尤を免れず。公子が曰く既に提撕を蒙つて心霧忽に消えぬ、然れども猶心中に未だ決せざるものあり、何となれば既に得道のもの無しと雖もその道絕つべからず、戒慧を具せるものは辱の如く味の若しと承んぬ、然るを今世間を見るに逃役のもの衆く、奸盜のもの多し、代を御むる聖皇、時を佐くる賢臣、この獼猴を見て默し忍ぶこと能はず、佛敎と王法と相和すること如何ん。師の曰くこれに二種あり、一には悲門、二には智門、大悲の門には開して遮することなし、大智の門には制して開することなし、制門は涅槃薩遮等の經の如し、悲門は十輪等の經の如し、相和に與奪あり坐贓をも斷はるまく而已。又人王の法律と法帝の禁戒と事異にして義融せり、法に任せて控馭すれば利益甚だ多し、法を枉げて心に隨へば罪報極めて重し、世人この義を知らず王法を細しくせず、佛法を訪らはず、愛憎に隨つて浮沈し貴賤に任せて輕重す、これを以て代を馭む、後報何ぞ免れん、愼ますんばあるべから

ず、慎まずんばあるべからず。又公子が先に談ずる所の旱澇疫癘天下の版盪僧人の招ぐ所なりとは、これ亦然らず、子未だ大道を見ずして妄りに斯の言を吐く、今當に秦鏡を攬て子が面に臨むべし、若し灾は非法の僧尼に由るといはば堯の代九年の水、湯の時の七載の旱かくの如くの旱澇誰れの僧に由てか興りし、彼の時に僧無し、何ぞ必ずしも僧に由らん、夏の運顛覆し、殷の祚夷滅し、周の末、絶廢し、秦の嗣早く亡せしこと、並に皆禍三女より起り、運天命に隨ふ、その日僧無かりき、豈に佛法に預けんや、それ灾禍の興りに略して三種あり、一には時の運、二には天の罰、三には業感なり、時の運とは所謂陽九百六なり、堯の水、湯の旱これに當れり。この故に聖帝宸に出でゝ機を見て逆備せり、減劫五濁亦これなり、天の罰とは敎令理に乖くに由て天卽ち之を罰す、孝子雨をふらさつし誅忠臣霜を降すの囚、かくの如くの類これなり、業感とは惡業の衆生同く惡時に生じて業感の故にかくの如くの灾を招ぐ、かくの如きの論は具には歷代の五行志等及び守護國經王法正論經等の如し、子曾つて斯の義を知らずして横に狂言を吐く、理當るべからず。師の曰く有益無益は後に當に陳答すべしとは、それ病無きときは則ち藥無し、障りある時は則ち敎あり、妙藥は病を悲んで興り、佛法は障りを愍んで顯る、この故に聖人の世に出づること必ず慈悲に由る、大慈は樂を與へ、大悲は苦を拔く、拔苦與樂の本源を防がんには如かず、源を防ぐの基敎にあらずんば得ず、疾に輕重有れば藥則ち强弱あり障に厚薄あれば敎則ち淺深なり、增劫には病輕ければ輪王人を御し、減劫には障厚ければ如來敎を垂れ給ふ、五濁惡世の衆生は病重く三毒鬱に興つて八苦身を迫め福德薄少にして貧病極めて多し、これ卽ち前世惡因の報感なり、遂に乃ち味を嗜むものは生命を殺して腹に塡て財を貪るものは他物を奪つて衣食す、色に耽ける飛蛾は炎を拂て身を滅ぼし、酒を好む猩猩は瓮の邊に縛せらる、かくの如くの邪見の行勝げて計ふべからず、此の生に惡業を作て後に當に三途に墜つべし、三途の苦は劫を經ても免れ難し、如來の慈父この極苦を見て其の因果を說き給ふ、惡の因果を說きて其の極苦を拔き、善の因果を示して、その極果を授く、その敎を修するものに略して二種あり、一には出家二には在家なり、出家とは頭を剃り衣を染むる比丘、比丘尼等これなり、在家とは冠を戴き纓を絡へる優婆塞、優婆夷等これなり、上天子に達し下凡庶に及ぶまで五戒十善等を持つて佛法に歸依するもの皆これなり、菩薩といへば、かくの如きの在家の人十善戒を持つて六度の行を修するものこれなり、出

家して大心を發すものも亦是れなり、惡を斷ずるが故に苦を離れ、善を修するが故に樂を得、下人天より上佛果に至るまで皆これ斷惡修善の感得するところなり、斯の兩趣を示さんが爲に大聖敎を設け給ふ、佛敎既に存せり、弘行人にあり、この故に法を知るものは出家して燈を傳へ、道を仰ぐものは道に入て形を改む。經に云く、若し國王父母あつて人民男女等に放して出家入道せしむる所得の功德無量無邊なりと、僧尼あるが故に佛法絕えず、佛法存するが故に人皆眼を開く、眼明にして正道を行ず、正路に遊ぶが故に涅槃に至る、加以ず、經法のある所諸佛護念し諸天守衞す、かくの如くの利益勝て計ふべからず。公子が云く、知法弘道のものは利益灼然なり、非法非經のもの何ぞ其れ國に充つるや。師の曰く大山德廣ければ禽獸爭ひ歸し藥毒雜り生ず、深海道大なれば魚鼈集り泳ぎ龍鬼並び住む、寶珠の邊には必ず惡鬼あつて圍繞す、寶藏の側には定めて盜賊あつて窺窬す、美女は招かざれども好醜の男爭ひ逐ひ、醫門は召さゞれども疾病の人投歸す、腥肉には蟻集り、屍には蠅聚る、聖王もの給はざれども萬國競つて王に歸し、巨壑思はざれども千流各朝宗す、富人は呼ばざれども貧人集り、智者はこれを默せども童朦聚る、明鏡瑩きて淨ければ妍蚩の像これに現じ、清水澄み湛ふれば

大小の相これに影る、大虛心なけれども萬有これに容る、大地念ひなけれども百草これより出づ、堯の子は不肖なりしかども父は聖なりき、舜の父は殺さんと欲せしかども子は孝なりき、孔子の門徒はその數三千なれども達者は則ち七十その餘は則ち註るさず、釋尊の弟子は無量無數なりしかども六群天授善星比丘は濫行極めて多し、如來の在し日すら純善なることを得ず、何に況や末代の裔をや、然れども猶如來の慈悲は三界に父たり賢愚善惡何ぞ喝喝せざらん、物の理かくの如し、何ぞ怪しむに足んや、然りと雖も毒を變じて藥と爲し鐵を化して金と爲す、堯戶封ずべく、栗民誅すべし、これ乃ち時の運のいたす所、皇風の染むる所なり、迦葉如來明に所由を說き給ふ、事具に守護國經に見えたり、文煩しければ抄せず、要覽の者閱かんのみ。頌に曰く、

建立と無淨と深しと雖も未だ煩を斷ぜず、空しく內外の我を談じて生死の樊に輪轉す、大聖羊乘を開き給へり、修觀すれば涅槃を得、五停四念處、六十三生に觀ず、二百五十の戒、これを持すれば八難を離る、人空無漏の火、智を滅して身心を殫ず、儻如來の警めに遇ひぬれば菩薩の寬に迴心す。

問ふ、この心は亦何れの經論に依てか建立する。答、大日經菩提心論なり。彼の

經論に何か說く。經に云く、謂くかくの如く唯蘊無我を說き、根境界に淹留修行す。又云く聲聞衆は有緣地に住して生滅を識り二邊を除いて極觀察智を以て不隨順修行の因を得、これを聲聞の三味道と名く。又云く若し聲聞所說の眞言は一一の句安布せり、菩提心論の證文は下の文と心雜へ擧たり、故に別に抄せず行相下に臨んで知んぬべし。

第五拔業因種心

拔業因種心とは、麟角の所證部行の所行なり、因緣を十二に觀じ生死を四五に厭ふ、彼の華葉を見て四相の無常を覺りこの林落に住して三味を無言に證す、業惱の株杌これに猶て拔き、無明の種子これに因て斷ず、爪犢遙に望めども近づかず建聲何ぞ窺窬することを得ん、湛寂の潭に游泳し、無爲の宮に優遊す、自然の尸羅授かることなうして具し、無師の智慧自我にして獲、三十七品は他に由らずして悟り、蘊處界善は藍を待たずして色あり、身通を以て人を度して言語を用ひず、大悲闕けて無れば方便具せず、但し自ら苦を盡して寂滅を證得す、故に經に云く業煩惱の株杌無明の種子の十二因緣を生ずるを拔くと、又云くこの中に辟支佛は復少しきの差別あり、謂く三昧分異にして業生を淨除すと、釋して云く、謂く十二因緣とは、守護國經に云く。復次に善男子、如來は一切の靜慮解脫等持等至に於いて煩惱を伏滅し生起する因緣皆實の如く知り給へり、佛云何か知り給ふ、謂く衆生の煩惱の生起することは何の因を以て生じ、何の緣を以て生ず、惑を滅して淸淨なること何の因を以て能く滅し何の緣を以て能く滅すと知り給へり、この中に煩惱の生ずる因緣とは謂く不正思惟なり、これを以て其の因と爲し、無明を緣と爲す、無明を因と爲し行を緣と爲す、行を因と爲し識を緣と爲す、識を因となし、名色を緣となす、名色を因となし六處を緣と爲す、六處を因と爲し觸を緣と爲す、觸を因と爲し受を緣と爲す、受を因となし愛を緣と爲す、愛を因と爲し取を緣となす、取を因と爲し有を緣と爲す、有を因と爲し生を緣となす、生を因となし老死を緣となす、煩惱を因と爲し業を緣と爲す、隨眠煩惱を因となし現行煩惱を緣と爲す、これは是れ煩惱の生起する因緣なり、云何か衆生の諸の煩惱を滅する所有の因緣とならば、二種の因あり二種の緣あり、云何か二とする、一には他に從つて種々の隨順の法聲を聞き、二には內心に正念を起すなり、復次に二種の因あり、二種の緣あり、能く衆生をして淸淨に解脫せしむ、謂く奢摩他心一境の故に毗鉢舍那能善巧の故に、復次に二種の因

あり二種の緣あり、不來智の故に、復次に二種の因緣あり、微細に無生の理を觀察するが故に、復次に二種の因緣あり、具足行の故に智慧解脫現在前の故に、解脫に近きが故に、復次に二種の因緣あり謂く盡智の故に、無生智の故に、復二種の因緣あり隨順して眞諦の理を覺悟するが故に、隨順して眞諦の智を獲得するが故に、此れはこれ衆生の煩惱を除滅する淸淨の因緣なり、如來悉く知り給へり、復次に善男子煩惱の因緣數量あることなければ解脫の因緣も亦數量あること無し、或は煩惱有て能く解脫の與に以て因緣と爲る實躰を觀ずるが故に、或は解脫あつて能く煩惱の與に以て因緣と爲る執著を生するが故に、頌に曰く、緣覺の鹿車は言說無し、部行と麟角と類不同なり、因緣の十二深く觀念し、百劫に修習して神通を具す、業と煩惱と及び種子とを拔き、灰身滅智して虛空の如し、湛然として久しく三昧に醉臥せり、警めを蒙つて一如の宮に廻心す。

問ふ、この住心は亦何れの經論に依てか說く。答、大日經、菩提心論なり、彼の經論に何か說く、經に云く、緣覺は業煩惱の株杌無明の種子の十二因緣を生ずるを拔く、建立宗等を離れたり、かくの如くの湛寂は一切外道の知ること能はざる所なり、先佛宣說し給へり、一切の過を離れたりと。又言く緣覺は深く因果を觀察し無言說の法に住して轉せずして言說なし、一切の法に於いて極滅語言三昧を證す、これを緣覺の三昧道と爲す。又云く祕密主若し緣覺聲聞所說の眞言に住すれば諸過を摧害すと。又云く聲聞所說の眞言は一一の句安布せり、この中に辟支佛はまた小しきの差別あり、謂く三昧分異にして業生を淨除すと、龍猛菩薩の菩提心論に云く、又二乘の人、聲聞は四諦の法を執し、緣覺は十二因緣を執す、四大五陰畢竟磨滅すと知て深く厭離を起して衆生執を破す、本法を勤修して、その果を尅證し本涅槃に趣くを究竟と已爲へり、眞言行者當に觀ずべし、二乘の人は人執を破すと雖も猶し法執あり、但し意識を淨めて其の他を知らず久久に果位を成じ、灰身滅智を以てその涅槃に趣くこと大虛空の如くして湛然常寂なり、定性あるものは發生すべきこと難し、要ず劫限等の滿を待つて方に乃ち發生す、若し不定性のものは劫限を論ずることなし、緣に遇へば便ち廻心向大す、化城より起つて方便を以て遂に大心を發す、乃し初め十信より下遍く諸位を歷て三無數劫を經、難行苦行して然して成佛することを得、既に知んぬ聲聞緣覺は智慧狹劣なり、亦樂ふべからず、十住論に云く、若は聲聞地及び辟支佛地に墮す、若し爾ら

ばこれ大なる衰患なり、助道法の中に説くが如し。

若し聲聞地及び辟支佛地に墮するをばこれを菩薩の死と名く則ち一切の利を失す、若し地獄に墮するは是の如くの畏を生ぜず、若し二乘地に墮するをば卽ち大怖畏と爲す、地獄の中に墮するは畢竟して佛に至ることを得べし、若し二乘地に墮すれば畢竟じて佛道を遮す、佛自ら經の中に於いて是の如くの事を解説し給へり、人の壽を貪するものは首を斬るを大なる畏とするが如く、菩薩も亦かくの如し、若し聲聞地及び辟支佛地に於いて大怖畏を生ずべし。

秘藏寶鑰卷中和譯終

秘藏寶鑰卷下和譯

第六他緣大乘心

粤に大士の法あり、樹て他緣乘と號す、建爪を越えて高く昇り聲緣を超えて廣く運ぶ、二空三性、自執の塵を洗ひ、四量四攝、他利の行を齊ふ、陁那の深細を思惟し、幻焰の似心に專注す、於是芥城竭きて還つて滿ち、巨石磷いて復生ず、三種の練磨は初心の退せんと欲するを策まし、四弘願行は後身の勝果を仰ぐ、等持の城を築いて唯識の將を安し、魔旬の仗陣を征して煩惱の賊帥を伐つ、八正の軍士を整て縛るに同事の繩を以てし　六通の精騎を走せて殺すに智慧の劒を以てす、勞績を封するに五等の爵を以てし、心王を冊くに四德の都を以てす、勝義勝義、太平の化を致し、廢詮談旨無事の風を煽ぐ、一眞の臺に垂拱し、法界の殿に無爲たり、三大僧祇の庸、於是帝と稱せられ、四智法王の號本無くして今得たり、爾れは乃ち藏海しは七轉の波を息め、蘊落には六賊の害を斷つ無分の正智は眞常の函に等しく後得の權悲は諸趣の類に遍す、三藏の法令を製つて三根の有情を化し、十善の格式を造つて六趣の衆生を導く、乘を言へば卽ち三つ、識を談す

れば唯し八つなり、五性に成不あり、三身は卽ち常と滅となり、百億の應化は同く六舟を汎べ、千葉の牟尼は等しく三駕を授く、法界の有情を緣するが故に他緣なり、聲獨の羊鹿に簡ぶが故に大の名あり、自他を圓性に運ぶが故に乘と曰ふ、此れ乃ち君子の行業菩薩の用心なり、此れ北宗の大綱蓋し此くの如し。頌に曰く

心海湛然として波浪なし、識風皷動して去來を爲す、凡夫は幻の男女に眩着し外道は屋の樓臺に狂執す、自心の天獄たることを知らず、豈に唯心の禍災を除くことを悟らんや、六度萬行三劫に習ひ、五十二位一心に開く、煩惱所知已に斷じて淨ければ、菩提涅槃これ吾が財なり、四三點の德今具足す、覺らずして外に求むる甚だ悠なるかな、言亡慮絕して法界に遍せり、沈萍の一子尤も哀むべし。七韻

問ふ、この住心は亦何れの經論に依てか建立する。答ふ、大日經菩提心論等なり彼の經等に何か說く。答ふ、大日經に云く祕密主大乘の行あり、無緣乘の心を發して法に我性なし、何を以ての故に彼れ往昔にかくの如く修行せしものゝ如きは蘊の阿賴耶を觀察して自性は幻陽燄影響旋火輪乾闥婆城の如しと知る。龍猛菩薩の菩提心論に云く、又衆生あつて大乘の心を發して菩薩の行を行ず、諸の法門に於いて遍修せざること無し、復三阿僧祇劫を經て六度萬行を修し、皆悉く具足して然して佛果を證す、久遠にして成ずることは斯れ所習の法敎致次第あるに由てなりと。問ふ、二障を斷じ四德を證す、かくの如くの沒駄は究竟とやせん、かくの如くの行處は未だ本源に到らず、何を以てか知ることを得る、龍猛菩薩の說かく、一切の行者一切の惡を斷じ、一切の善を修して十地を超え、無上地に到て三身を圓滿し四德を具足す、かくの如くの行者は無明の分位にして明の分位にあらずと。今この證文に依らば此の住心の佛は未だ心原に到らず、但し心外の迷ひを遮して祕藏の寶を開くことなし。

第七覺心不生心

夫れ大虛寥廓として萬象を一氣に含み、巨壑泓澄として千品を一水に孕む、誠に知んぬ一は百千が母たり、空は卽ち假有の根、假有は有に非ざれども有有として森羅たり、絕空は空に非ざれども空空として不住なり、色は空に異ならざれば諸法を建て丶宛然として空なり、空は色に異ならざれば諸相を泯じて宛然として有なり、この故に色卽ちこれ空、空卽ちこれ色なり。諸法も亦爾なり、何物か然らざらん水波の不離に似たり、金莊の不異に同じ、不一不二の號立ち、二諦四中の稱

顯る、空性を無得に觀じ、戯論を八不に越え、時に四魔戰はざるに面縛し、三毒殺さゞるに自降す、生死卽涅槃なれば更に階級無し、煩惱卽ち菩提なれば斷證を勞すること莫し、然りと雖も無階の階級なれば五十二位を壞せず、階級の無階なれば一念の成覺を碍へず、一念の念に三大を經て自行を勤め、一道の乘に三駕を馳せて化他を勞す、唯蘊の無性に迷へるを悲み、他緣の境智を阻てたるを歎く、心王自在にして本性の水を得、心數の客塵、動濁の波を息む、權實二智は圓覺を一如に證し、眞俗兩諦は敎理を絕中に得、心性の不生を悟り、境智の不異を知る

これ乃ち南宗の綱領なり、故に大日尊、祕密主に告げて言はく、祕密主、彼れかくの如く無我を捨てゝ心主自在にして自心の本不生を覺る、何を以ての故に祕密主、心は前後際不可得なるが故にと。釋して曰く、心主とは卽ち心王なり、有無に滯らざるを以ての故に、心に罣碍なうして所爲の妙業、意に隨つて能く成ず、故に心主自在といふ、心王自在とは卽ちこれ淨菩提心の更に一轉の開明を作して前劫に倍勝することを明すなり、心王は猶し池水の性の本より淸淨なるが如く、心數の淨除は猶し客塵の淸淨なるが如し、この故に此の淸淨を證する時卽ち能く自ら心の本不生を覺る、何を以ての故に心は前後際俱に不可得なるが故に。譬へば

大海の波浪は緣より起するを以ての故に卽ちこれ先にも無く後にも無し、而も水性は爾らず、波浪の緣より起する時、水性はこれ先に無きにも非ず、波浪の因緣盡くる時水性はこれ後に無きにも非るが如く、心王も亦復かくの如し、前後際無し、前後際斷するを以ての故に復境界の風に遇うて緣に隨つて起滅すと雖も而も心性は常に生滅無し、この心の本不生を覺るは、これ漸く阿字門に入るなり、かくの如くの無爲生死の緣因生壞等の義は勝鬘經寶性佛性論等の中に廣く明すが如し、謂く本不生とは兼ねて不生不滅不斷不常不一不異不去不來等を明す、三論家にはこの八不を擧げて以て究極の中道と爲す、故に吉藏法師の二諦方言佛性等の章に盛りにこの義を談ず。頌に曰く、五韻

因緣生の法は本より無性なり、空假中道都べて不生なり、波浪の滅生は但しこれ水なり、一心は本より湛然として澄めり、色空不壞にして智能く達す、眞俗宛然として理分明なり、八不の利刀戯論を斷つ、五邊面縛し自降して平かなり

心通無碍にして佛道に入る、此の初門より心亭に移る。

經に云く、秘密主彼れかくの如く無我を捨てゝ心主自在にして自心の本不生を覺る何を以ての故に秘密主、心は前後際不可得なるが故にかくの如く自心の性を知

るはこれ二劫を超越する瑜祇の行なりと。菩提心論に云く、當に知るべし一切の法は空なり、已に法の本無生を悟んぬれば心體自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失無からしむ、妄心若し起らば知つて隨ふこと勿れ、妄若し息む時は心源空寂なりと。問ふ、諸の戲論を絶つて寂靜無爲なり、かくの如くの住心は極底に到るや不や、那伽羅樹那菩薩の說かく、淸淨本覺は無始より來た修行を觀たず、他力を得るにあらず、性德圓滿し本智具足せり、亦四句を出でゝ亦五邊を離れたり、自然の言も自然なること能はず、淸淨の心も淸淨なること能はず、絶離絶離せり、かくの如くの本處は無明の邊域にして明の分位に非ず。

第八　一道無爲心（又は如實知自心と名け又は空性無境心と名く）

若し夫れ孔宣震旦に出でゝ、五常を九州に述べ、百會華胥に誕れて一乘を三草に開く、於是狂醉の黎元は住まつて進まず、癡闇の黔首は往いて歸らず、七十の達者は頗るその堂に昇り、萬千の羅漢は乃ち金口を信ず、度內の五常は方圓合はず、界外の一車は大小入らず、この故に三七に樹を觀じ、四十に機を待つ、初には四諦方等を轉じて人法の垢穢を洗ひ、後には一雨の圓音を灑いで草木の芽葉を霑ほす、蓮華三昧に入つて性德の不染を觀じ白毫の一光を放つて修成の遍照を表するが如くに至つては、會三飯一して佛智の深多を讃し、指本遮末して成覺の久遠を談じ、寶塔騰踊して二佛同座し、娑界震裂して四唱一處なり、髻珠を賜ひ、瓔珞を献ず、利智の鷲子は吾が佛の魔に變せるかと疑ひ、等覺の彌勒は子の年の父に過ぎたることを怪しむ、一實の理、本懷をこの時に吐き、無二の道、滿足を今日に得、爾れば乃ち羊鹿斃れて露牛疾し、龍女出でゝ象王迎ふ、二種の行處は身心の室宅に宿り、十箇の如是は止觀の宮殿に安す、寂光の如來は境智を融じて心性を知見し、應化の諸尊は行願を顧みて分身、相に隨ふ、寂にして能く照なり、照にして常に寂なり、澄水の能く鑒るに似たり、瑩金の影像の如し、濕金卽ち照影照影卽ち金水なり、卽ち知んぬ境卽ち般若、般若卽ち境なり、故に無境界といふ、卽ちこれ實の如く自心を知るを名づけて菩提と爲す、故に大日尊、秘密主に告げて云く、密密主、云何が菩提とならば謂く實の如く自心を知るなり、秘密主この阿耨多羅三藐三菩提は乃至彼の法として少分も得べきことある無し、何を以ての故に虛空の相はこれ菩提なり、知解のものも無く亦開曉のものも無し、何を以ての故に、菩提は無相なるが故に秘密主、諸法は無相なり、謂く虛空の相なり、爾

の時に金剛手復佛に白して言く、世尊誰れか一切智を尋求する、誰れか菩提の爲に正覺を成ずる者、誰れか彼の一切智々を發起する。佛の言く、秘密主自心に菩提及び一切智を尋求す、何を以ての故に本性清淨なるが故に、心は内にあらず、外にあらず、及び兩中間にも心不可得なり。秘密主、如來應正等覺は青に非ず、黄に非ず、赤に非ず、白に非ず、紅に非ず、紫に非ず、水精色に非ず、長に非ず、短に非ず。圓に非ず、方に非ず、明に非ず、暗に非ず、男に非ず、女に非ず、不男女に非ず。秘密主、心は欲界と同性に非ず、色界と同性に非ず、無色界と同性に非ず、天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人趣と同性に非ず。秘密主、心は眼界に住せず、耳鼻舌身意界に住せず、見に非ず、顯現に非ず。何を以ての故に虛空相の心は諸の分別と無分別とを離れたり。所以何となれば、性、虛空に同なれば卽ち心に同なり。性、心に同なれば卽ち菩提に同なり。かくの如く秘密主、心と虛空界と菩提との三種は無二なり、これ等は悲を根本と爲して方便波羅蜜滿足す、この故に秘密主、我れ諸法を說くこと是のごとし、彼の諸の菩薩衆をして菩提心淨にして其の心を知識せしめんとなり、秘密主、若し族姓の男、族姓の女、菩提を識知せんと欲はゞ當にかくの如く自心を識知すべし、秘密主、云何か自心を知るとならば、謂く若しは分段、或は顯色、或は形色、或は境界、若しは色、若しは受想行識、若しは我、若しは我所、若しは能執、若しは所執、若しは清淨、若しは界、若しは處乃至一切の分段の中に求むるに不可得なり、秘密主、この菩薩の淨菩提心門を初法明道と名く。釋して曰く、謂く無相虛空相及非青非黄等の言は並にこれ法身眞如一道無爲の眞理を明す、佛これを說いて初法明道と名け給ふ。智度には入佛道の初門と名く、佛道と言つぱ金剛界宮大日曼荼羅の佛を指す、諸の顯敎に於いてはこれ究竟の理智法身なれども眞言門に望むればこれ則ち初門なり、大日世尊及び龍猛菩薩並に皆明に說き給へり、疑惑すべからず、又下の文に云く、所謂空性は根境を離れて相も無く境界もなし、諸の戲論を越えて虛空に等同なり、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離るとは亦これ理法身を明す。無畏三藏の說かく、行者この心に住する時卽ち釋迦牟尼の淨土毀せずと知り、佛の壽量長遠、本地の身と上行等の從地涌出の諸の菩薩と一處に同會すと見る、對治道を修するものは迹補處に隣ると雖も然れども一人をも識らず、是の故にこの事を秘密と名く、此の理を證する佛を亦常寂光土の毗盧遮那と名く、大隋の天台山國清寺の智者禪師

この門に依つて止觀を修し法華三昧を得て卽ち法華中論智度を以て所依と爲して一家の義を構ふ、この乘の趣き大體かくの如し。頌に曰く、四韻

前劫の菩薩は戲論と作る、この心の正覺も亦眞に非ず、無爲無相にして一道淨く、非有非無にして不二を陳せり、心境絕泯して常寂の土なり、語言道斷して遮那の賓なり、身心也滅して大虛に等し、隨類影現して變化の仁あり。

問ふ、かくの如くの一法界一道眞如の理をば究竟の佛とや爲ん。龍猛菩薩の說かく、一法界心は百非にあらず千是を背けり、中にあらず中にあらざれば天を背けり、天を背きぬれば、演水の談足斷つて止り、審慮の量手亡じて住す、かくの如くの一心は無明の邊域にして明の分位にあらず。

第九極無自性住心

極無自性心といつぱ、今この心を釋するに二種の趣きあり、一には顯略趣、二には祕密趣なり、顯略趣とは、それ甚深なるは麽嚧、峻高なるは蘇迷、廣大なるは虛空、久遠なるは芥石然りと雖も芥石も竭き磷ぎ、虛空も量りつべし、蘇迷は十六萬、麽嚧は八億那なり、近うして見難きは我が心、細にして空に遍ずるは我が佛なり、我が佛思議し難し、我が心廣にして亦大なり、巧藝心迷つて竿を擲ち離律眼盲うして見ることを休む、禹が名舌斷え、夸が步み足刪る、聲緣の識も識らず、薩埵の智も知らず、奇哉の奇、絕中の絕なるは其れ只自心の佛か、自心に迷ふが故に六道の波皷動し、心原を悟るが故に一大の水澄靜なり、澄靜の水影萬像を落し、一心の佛諸法を鑒知す、衆生この理に迷つて輪轉絕ゆる能はず、蒼生太だ狂醉して自心を覺ること能はず、大覺の慈父その歸路を指し示し給ふ、歸路は五百由旬この心は則ち都亭なり、都亭は常の舍にあらず、緣に隨つて忽に遷移す、遷移定れる處なし、この故に自性無し、諸法自性なきが故に卑を去け尊を取る、故に眞如受熏の極唱、勝義無性の祕告あり、一道を彈指に驚かし、無爲を未極に覺す、等空の心こゝに於て始めて起り、寂滅の果、果還つて因と爲る、この因この心前の顯敎に望むれば極果なり、後の祕心に於いては初心なり、初發心の時に、便ち正覺を成ずること宜しく其れ然るべし、初心の佛その德不思議なり萬德始めて顯れ、一心稍現ず、此の心を證する時、三種世間は卽ち我が身なりと知れり、十箇の量等は亦我が心なりと知れり、盧遮那佛、始め成道の時、第二七日に普賢等の諸大菩薩等と廣くこの義を談じ給へり、これ卽ち所謂華嚴經なり、爾れば乃ち華藏を苞ねて以て家と爲し、法界を籠めて國とす、七處に座を莊り、

八會に經を開く、この海印定に入て法性の圓融を觀じ、彼の山王の機を照して心佛の不異を示す、九世を刹那に攝し、一念を多劫に舒ぶ、一多相入し、理事相通す、帝網をその重重に譬へ、錠光をその隱隱に喩ふ、遂んじて覺母に就いて以て發心し、普賢に歸して證果す、三生に練行し百城に友を訪ふ、一行に一切を行じ一斷に一切を斷ず、初心に覺を成じ十信に道圓なりと云ふと雖も、因果異ならずして五位を經て車を馳せ、相性殊ならずして十身を渾げて同歸す、これ卽ち華嚴三昧の大意なり。故に大日如來秘密主に告げてのたまはく、所謂空性は根境を離れて相も無く境界も無し、諸の戲論を越えて虛空に等同なり、有爲無爲界を離れ諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生ずと。善無畏三藏の說かく、この極無自性心の一句に悉く華嚴敎を攝し盡すと、所以何となれば華嚴の大意は始を原ね終りを要むるに眞如法界不守自性隨緣の義を明す、杜順和上はこの法門に依つて五敎華嚴三昧法界觀等を造り、弟子の智儼相繼し、智儼の弟子法藏法師又五敎を廣して旨歸綱目及び疏を作れり、卽ちこれ華嚴宗の法門一一の義章なり。頌に曰く、六韻

風水龍王は一法界、眞如生滅この岑に歸す、輪華能く體大等を出す、器衆正覺極めて甚深なり、緣起の十玄は互に主伴たり、五敎を呑流するは海印の音なり、重重無礙にして帝網に喩ふ、隱々たる圓融は錠光の心なり、華嚴三昧は一切の行なり、果界の十尊は諸刹に臨めり、この宮に入ると雖も初發の佛なり、五相成身迫うて尋ぬべし。

經に云く、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生ず、等虛空無邊の一切の佛法これに依つて相續して生ず、秘密主かくの如くの初心をば佛成佛の因と說き給ふ、業煩惱に於いて解脫すれども而も業煩惱の具依たりと。金剛頂經に說かく、薄伽梵大菩提心普賢大菩薩、一切如來の心に住し給ふ、時に如來この佛世界に滿ち給ふこと猶し胡麻の如し、爾の時に一切如來雲集し、一切義成就菩薩摩訶薩の菩提場に坐し給ひるに於いて往詣して受用身を示現し咸くこの言を作したまふ、善男子云何が無上正等覺菩提を證する、一切如來の眞實を知らずして、諸の苦行を忍ぶや、時に一切義成就菩薩、一切如來の警覺に由て卽ち阿娑婆那伽三麽地より起つて一切如來を禮して白して言さく、世尊如來我れに敎示し給ひ、云何か修行せん、云何かこれ眞實なる、かくの如く說き已つて、一切如來異口同音に彼の菩薩に告げて言はく、善男子當に觀察自心三

摩地に住して自性成就の眞言を以て自ら恣に誦ずべしと、守護國經に云く、その時に釋迦牟尼佛の言はく秘密主、我れ無量無數劫の中に於いて是の如くの波羅蜜多を修集して最後身に至つて六年苦行せしかども阿耨多羅三藐三菩提を得て大毘盧遮那とならざりき、道場に坐せし時、無量の化佛猶し油麻の如く虛空に遍滿し給ふ、諸佛同聲にして我れに告げて言はく、善男子云何か成等正覺を求むる。我れ佛に白して言さく、我れはこれ凡夫なり、未だ求處を知らず、唯し願はくば慈悲して我が爲に解說し給ひ。この時に佛同く我に告げて言はく、善男子諦に聽け當に汝が爲に說くべし、汝今宜しく應當に鼻端に於いて月輪を想ひ、月輪の中に於いて唵字の觀を作すべし、この觀を作し已つて後夜分に於いて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり、善男子十方世界の如恒河沙の三世の諸佛、月輪に於いて唵字の觀を作さずして成佛することを得といはゞ是の處あること無し、何を以ての故に、唵字は卽ちこれ一切の法門なり、亦この八萬四千の法門の寶炬關鑰なり、唵字は卽ちこれ一切陀羅尼の母なり、これより能く一切如來を生ず、如來より一切菩薩を生ず、菩薩より一切衆生を生ず、乃至少分所有の善根を生ずといふ此れなり。龍猛の菩提心論に云く夫れ迷途の法は妄想より生ず、乃至展轉して無量無邊の煩惱を成じて六趣に輪廻す若し覺悟し已んぬれば妄想止除して種々の法滅す、故に自性あること無し。復次に諸佛の慈悲は眞より用を起して衆生を救攝し給ふ、病に應じて藥を與へ、諸の法門を施してその煩惱に隨つて迷津を對治す、栰に遇うて彼岸に達しぬれば法已に捨つべし、自性無きが故に、乃至妄若し息む時んば心源空寂なり、萬德こゝに具し、妙用無窮なり、『但具自心性』(五字衍文)この心を具するもの能く法輪を轉じて自他俱に利す。又云く性淨本覺は三世間の中に皆悉く離れずして彼の三つを熏習して一覺と爲して一大法身の果を莊嚴す、この故に名けて因熏習鏡と爲す。云何が名けて三種世間とする、一には衆生世間、二には器世間、三には智正覺世間なり、衆生世間とは謂く異生性界なり、器世間とは謂く所依止の土なり、智正覺世間とは謂く佛菩薩なり、これを名けて三と爲す、此の中の鏡とは謂く輪多梨華鏡なり、輪多梨華を取つて一處に安置して周く諸物を集むるに此の華の熏に由て一切の諸物皆悉く明淨なり、又明淨の物華の中に現前して皆悉く餘無く、一切の諸物の中に彼の華現前して亦復餘無きが如く、因熏習鏡も亦復かくの如し一切の法を熏じて淸淨覺として悉く平等ならしむ。問ふ、是の如くの一心の本法

は至極の住心か。龍猛菩薩の説かく、三自一心の法は、一も一なること能はず。能入の一を假る、心も心なること能はず。能入の心を假る、實に我の名に非れども我に目く。亦自の唱へに非れども自に契へり、我の如く名を立つれども實の我に非ず、自の如く唱へを得れども實の自に非ず、玄玄の又の玄、遠遠の又の遠なりかくの如くの勝處は無明の邊域にして明の分位にあらず。

第十秘密莊嚴心　六韻

九種の住心は自性無し、轉深轉妙にして皆これ因なり、眞言密教は法身の説、秘密金剛は最勝の眞なり、五相五智法界躰、四曼四印この心に陳ず、刹塵の渤駄は吾が心の佛なり、海滴の金蓮は亦我が身なり、一一の字門萬像を含み一一の刀金皆神を現ず、萬德の自性輪圓して足れり、一生に莊嚴の仁を證することを得べし。

經に云く復次に秘密主、眞言門に菩薩の行を修行する諸の菩薩は無量無數百千俱胝那庾多劫に積集せる無量の功德智慧と具さに諸行を修する無量の智慧方便とを皆悉く成就すと、解して云く此れは初めて眞言に入る菩薩の功德を歎ず、又云く、爾の時に毗盧遮那世尊、一切如來一躰速疾力三昧に入つて自證の法界體性三昧を說いて言ひ給はく、我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脫することを得、因緣を遠離し、空は虛空に等しと知つて、如實相の智生ず、已に一切の暗を離れぬれば、第一實無垢なりと、解して云く、此の頌は文約にして義廣く言浮んで心深し、面にあらずんば說き難し、又百字輪十二字等の眞言觀法三摩地門、及び金剛界三十七尊四智印の三摩地あり、卽ちこれ大日如來の極秘の三昧なり、文廣くして具さに述ぶること能はず。又龍猛菩薩の菩提心論に云く第三に三摩地と言へば眞言行人かくの如く觀じ已つて云何か能く無上菩提を證する、當に知るべし、法爾に應に普賢大菩提心に住すべし、一切衆生は本有の薩埵なれども貪瞋癡の煩惱の爲に縛せらるゝが故に、諸佛の大悲、善巧智を以て此の甚深秘密瑜伽を說いて修行者をして內心の中に於いて日月輪を觀ぜしむ、此の觀を作すに由て本心を照見するに湛然淸淨なること猶し滿月の光、虛空に遍して分別する所無きが如し、亦は無覺了と名け、亦は淨法界と名け、亦は實相般若波羅蜜海と名く、能く種々無量の珍寶三摩地を含すること猶し滿月の潔白分明なるが如し何となれば爲く一切有情は悉く普賢の心を含せり、我れ自心を見るに形月輪の如し、何が故にか月輪を以て喩と爲すとならば、爲く滿月圓明の體は則ち菩提心

と相類せり、凡そ月輪に一十六分あり、瑜伽の中の金剛薩埵より金剛拳に至るまで十六大菩薩者あるに喩ふ、三十七尊の中に於いて五方の佛位に各一智を表す。東方の阿閦佛は、大圓鏡智を成ずるに由る亦金剛智と名く、南方の寶生佛は、平等性智を成ずるに由る、亦灌頂智と名く、西方の阿彌陀佛は、妙觀察智を成ずるに由る亦蓮華智と名け亦轉法輪智と名く。北方の不空成就佛は成所作智を成ずるに由る、亦羯磨智と名く。中方の毗盧遮那佛は法界智を成ずるに由て本と爲す已上の四佛智より四波羅蜜菩薩を出生す、四菩薩は卽ち金寶法業なり、三世一切の諸の聖賢生成養育の母なり、於是印成せる法界體性の中より四佛を流出す、四方の如來に各四菩薩を攝す、東方の阿閦佛に四菩薩を攝す、金剛薩埵、金剛王金剛愛、金剛善哉を四菩薩と爲す。南方の寶生佛に四菩薩を攝す金剛寶金剛光金剛幢金剛笑を四菩薩と爲す。西方の阿彌陀佛に四菩薩を攝す金剛法金剛利金剛因金剛語を四菩薩と爲す。北方の不空成就佛に四菩薩を攝す金剛業金剛護金剛牙金剛拳を四菩薩と爲す。四方の佛の各の四菩薩を十六大菩薩と爲す。三十七尊の中に於いて五佛四波羅蜜及び後の四攝八供養を除いて、但し十六大菩薩の四方の佛の所攝たるを取るなり。又摩訶般若經の中に內空より無性自性空に至るまで亦十六の義あり、一切有情は心質の中に於いて一分の淨性あり、衆行皆備れり、その體極微妙にして皎然明白なり、乃至六趣に輪廻すれども亦變易せず、月の十六分の一の如し、凡そ月の其の一分の明性、若し合宿の際に當んぬれば、但し日光の爲に其の明相を奪はる、所以に現せず、後ち起つ月の初より日日漸く加して十五日に至つて圓滿無礙なり、所以に觀行者初に阿字を以て本心の中の分の明を發起して只し漸く潔白分明ならしめて無生智を證す、夫れ阿字しは一切諸法本不生の義なり。

毗盧遮那經の疏に准せば、阿字を釋するに具に五義あり、一には阿字短聲これ菩提心なり、二には阿字引聲これ菩提行なり、三には暗字短聲これ證菩提の義なり、四には惡字短聲これ般涅槃の義なり、五には惡字引聲これ具足方便智の義なり、又阿字を將て法華經の中の開示悟入の四字に配解す開の字とは佛知見を開く卽ち雙て菩提心を開く初の阿字の如しこれ菩提心の義なり、示の字とは佛知見を示す第二の阿字の如し是れ菩提行の義なり悟の字とは佛知見を悟る第三の暗字の如し、これ證菩提の義なり、入の字とは佛知見に入る第四の惡字の如し、これ般涅槃の義なり、總じて之を言

へば具足成就の第五の惡字なり、これ方便善巧智圓滿の義なり。

卽ち阿字これ菩提心の義なることを讃する頌に曰く、

八葉の白蓮一肘の間に、阿字素光の色を炳現す、禪智俱に金剛縛に入れて、如來寂靜智を召入す。

扶れ阿字に會ふものは皆これ決定して之を觀ずべし、當に圓明の淨識を觀ずべし若し纔に見るをば則ち眞勝義諦を見ると名け、若し常に見れば則ち菩薩の初地に入る、若し轉漸く增長すれば則ち廓、法界に周く、量、虛空に等し、卷舒自在にして當に一切智を具すべし、凡そ瑜伽觀行を修習する人は當に須く具に三密の行を修して五相成身の義を證悟すべし、所言の三密とは一に身密とは契印を結んで聖衆を召請するが如きこれなり、二に語密とは密に眞言を誦じて、文句をして了了分明ならしめて謬誤無きが如きなり、三に意密とは瑜伽に住して白淨月の圓滿に相應し菩提心を觀ずるが如きなり。次に五相成身を明さば一にはこれ通達心二にはこれ成菩提心、三にはこれ金剛心、四にはこれ金剛身、五にはこれ無上菩提を證して金剛堅固の身を獲るなり、然も此の五相具さに備ふれば方に本尊の身と成る、その圓明は則ち普賢の身なり、亦これ普賢の心なり、十方の諸佛と之れ同じ、亦乃ち三世の修行證に前後あれども達悟に及び已んぬれば去來今なし凡人の心は合蓮華の如く佛心は滿月の如し、此の觀若し成ずれば十方國土の若しは淨、若しは穢、六道の含識三乘の行位、及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別、菩薩の因地の行相、三世の諸佛悉く中に於いて現じ本尊の身を證して普賢の一切の行願を滿足す、故に大毗盧遮那經に云く、是の如くの眞實心は故佛の宣說し給ふ所なりと。問ふ前に二乘の人は法執あるが故に成佛することを得ずと言ふ、今復菩提心を修せしむる三摩地とは云何か差別なる。答、二乘の人は法執あるが故に久久に理を證し沈空滯寂にして限るに劫數を以てし、然して大心を發し、又散善門の中に乘じて無數劫を經、この故に厭離すべきに足れり、依止すべからず。今眞言行人は、既に人法の上執を破して能く正しく眞實を見るの智なりと雖も或は無始の間隔の爲に未だ如來の一切智智を證すること能はず、故に妙道を欲求し次第を修持して凡より佛位に入るものなり、卽ちこの三摩地とは能く諸佛の自性に達し、諸佛の法身を悟り、法界體性智を證して大毗盧遮那佛の自性身、受用身變化身、等流身を成ず、爲く行人未だ證せざるが故に理宜しくこれを修すべし、故に大毗盧遮那經に云く悉地は心より生ずと、金剛頂瑜伽經に說くが如し、一切

義成就菩薩初めて金剛座に坐し、無上道を取證し遂に諸佛のこの心地を授くることを蒙つて然して能く果を證す、凡そ今の人若し心決定して教の如く修行すれば座を起たずして三摩地現前し、於是本尊の身を成就すべし。故に大毗盧遮那經供養次第法に云く、若し勢力の廣く增益する無くば法に住して但し菩提心を觀ずべし、佛この中に萬行を具して淨白純淨の法を滿足すと說き給ふ、此の菩提心は能く一切諸佛の功德の法を包藏するが故に、若し修證し出現すれば則ち一切の導師と爲る、若し本に歸すれば則ちこれ密嚴國土なり、座を起たずして能く一切の佛事を成ず、菩提心を讚して曰く、

若し人佛慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺の位を證す。

問ふ、已に頌の詞を聞きつ、請ふその義を說け。答、眞言敎法は一一の聲字一一の言名、一一の句義、一一の成立、各無邊の義を具せり、劫を歷とも窮盡し難し又一一の字に三義を具せり、所謂聲字實相なり、又二義を具す字相字義これなり又一一の句等に淺略深秘の二義を具す、帥爾に談じ難し、若し實の如く說かば小機は疑を致し謗を生じて、定めて一闡提無間の人と爲らん、この故に應化の如來は秘して談ぜず、傳法の菩薩は置いて論ぜず、意これにありや、故に金剛頂經に說かく、この毗盧遮那三摩地の法は未灌頂のものに向つて一字をも說くことを得ざれ、若し本尊の儀軌眞言は縱令同法の行者なりと雖も輒く說くことを得ざれ若し說かば現前には天に中り殃を招き、後には無間獄に墮せんと云云。謹んで勸誡を承はんぬ、敢て違越せず、重ねて請ふ初の頌の文を示說し給へ、九種住心無自性、轉深轉妙皆是因と云へば、この二句は前の所說の九種の心は皆至極の佛果に非ずと遮す、九種と言へば異生羝羊心乃至極無自性心これなり、中に就いて初の一は凡夫の一向行惡行不修微少善を擧ぐ、次の一は人乘を顯し、次の一は天乘を表す、卽ちこれ外道なり、下下界を厭ひ上生天を欣つて解脫を願樂すれども遂に地獄に墮す、已上の三心は皆これ世間の心なり未だ出世と名けず、第四の唯蘊已後は聖果を得と名く、出世の心の中に唯蘊拔業はこれ小乘敎、他緣以後は大乘の心なり、大乘に於いて前の二は菩薩乘、後の二は佛乘なり、かくの如くの乘乘自乘に佛の名を得れども後に望むれば戲論と作る、前前は皆不住なり、故に無自性と名く、後後は悉く果にあらず、故に皆これ因といふ、轉轉相望するに各各に深妙なり、所以に深妙といふ、眞言密敎法身說とは此の一句は眞言の敎主を顯す、極無自性以外の七敎は皆これ他受用應化佛の說く所なり、眞言密敎兩部の秘

藏はこれ法身大毗盧遮那如來と自眷屬の四種法身と金剛法界宮及び眞言宮殿等に住して自受法樂の故に演說し給ふ所なり、十八會の指歸等にその文分明なれば更に成證を引かず、秘密金剛最勝眞とは、此の一句は眞言乘敎の諸乘に超えて究竟眞實なることを示す。

秘藏寶鑰卷下終

般若心經祕鍵序幷せたり

遍照金剛撰

文殊の利劍は諸戲を絕つ、覺母の梵文は調御の師なり、(卍)の眞言を種子とす、諸敎を含藏せる陀羅尼なり、無邊の生死をば何んが能く斷つ、唯禪那と正思惟とのみあつてす、尊者の三摩は仁讓らず、我れ今讃述す哀悲を垂れたまへ。

夫れ佛法は遙にあらず、心中にして卽ち近し、眞如外にあらず、身を棄てゝ何んか求めん、迷悟我れに在れば發心すれば卽ち到る、明暗他にあらざれば信修すれば忽に證す、哀れなるかな、哀れなるかな、長眠の子苦しいかな、痛いかな、狂醉の人痛狂は醉はざるを笑ひ、酷睡は覺者を嘲ける、曾つて醫王の藥を訪らはずんば、何れの時にか大日の光を見ん　至若翳障に輕重あれば覺悟に遲速あり、機根不同なれば性欲も卽ち異なり、遂んじて二敎轍を殊んじて手を金蓮の場に分ち五乘鏕を並べて蹄を幻影の埒に跪がつ、其の解毒に隨つて藥を得ること卽ち別なり、慈父導子の方大綱此れに在りや。

大般若波羅蜜多心經といへば卽ちこれ大般若菩薩の大心眞言三摩地法門なり、文

は一紙に缺けて行は則ち十四なり、謂ふべし、簡にして要なり、約にして深し、五藏の般若は一句に嗛んで飽かず、七宗の行果は一行に鰲んで足らず、觀在薩埵は則ち諸乘の行人を擧げ、度苦涅槃は則ち諸敎の得樂を褰ぐ、五蘊は横に迷境を指し、三佛は竪に悟心を示す、色空と言へば則ち普賢願を圓融の義に解き、不生と談ずれば則ち文殊顏を絶戲の觀に破る、之を色界に說けば簡持手を拍ち之を境智に泥ずれば、歸一心を快くす、十二因緣は生滅を麟角に指し、四諦の法輪は苦空を羊車に驚かす、況んや復た𑖭𑖲の二字は諸藏の行果を呑み𑖭𑖲の兩言は顯密の法敎を孕めり、一一の聲字は歷劫の談にも盡きず、一一の名實は塵滴の佛も極めたまふことなし、是の故に誦持講供すれば則ち拔苦與樂し、修習思惟すれば則ち得道起通す、甚深の稱誠に宜しく然るべし、余童を敎ふるの次いでに聊か綱要を撮つて彼の五分を釋す、釋家多しと雖も未だ此の幽を釣らず、翻譯の同異顯密の差別並に後に釋するが如し。或人問うて云く般若は第二未了の敎なり、何ぞ能く三顯の經を呑まん、如來の說法は一字に五乘の義を含み、一念に三藏の法を說く、何に況んや一部一品に何ぞ置しく何ぞ無からん龜卦爻蓍萬象を含んで盡ることなく、帝網聲論諸義を呑んで窮らず、難者の曰く若し然らば前來の法匠何ぞ斯の言を吐かざる。答、聖人の藥を投ぐること機の深淺に隨ひ、賢者の說默は時を待ち人を待つ、吾未だ知らず、蓋し言ふべきを言はざるか、言ふまじければ言はざるか。言ふまじきを之を言へらん、失が智人斷りたまひまくのみ。

佛說摩訶般若波羅蜜多心經とは、此の題額に就いて二つの別あり、梵漢別なるが故に、今佛說摩訶般若波羅蜜多心經といへば胡漢雜へ擧げたり。說心經の三字は漢名なり、餘の九字は胡號なり、若し具なる梵名ならば𑖭𑖲𑖭と曰ふべし、初の二字は圓滿覺者の名。次の二字は密藏を開悟し、甘露を施すの稱なり。次の二字は大多勝に就いて義を立つ。次の二字は定慧に約して名を樹つ。次の三つは所作已辯に就いて號と爲す。次の二つは處中に據つて義を表す。次の二つは貫線攝持等を以て字を顯す、若し總の義を以て說かば皆人法喩を具す、斯れ則ち大般若波羅蜜多菩薩の名なり。卽ち是れ人なり、此の菩薩に法曼荼羅眞言三摩地門を具す、一一の字は則ち法なり、此の一一の名は皆世間の淺名を以て法性の深號を表す卽ち是れ喩なり、此の三摩地門は佛鷲峰山に在して鷲子等の爲に之を說きたまへり、此の經に數多の翻譯あり、第一に羅什三藏の譯、今の所說の本これなり、次に唐の遍覺三藏の翻には題に佛說摩訶の四字なし、五蘊

の下に等の字を加へ、遠離の下に一切の字を除く、陀羅尼の後に功能無し、次に大周の義淨三藏の本には題に摩訶の字を省き、眞言の後に功能を加へたり、又法月及び般若兩三藏の翻には並に序分流通あり、又陀羅尼集經の第三の卷に此の眞言法を說けり、經の題羅什と同じ、般若心と言へば此の菩薩に身心等の陀羅尼有り、是の經の眞言は卽ち大心呪なり、此の心眞言に依て般若心の名を得、或が云く大般若經の心要を略出するが故に心と名く、是れ別會の說にあらずと云云。所謂龍に虵の鱗あるが如し、此の經に總じて五分あり第一に人法總通分觀自在といふより度一切苦厄に至るまで是れなり。第二に分別諸乘分色不異空といふより無所得故に至るまで是れなり、第三に行人得益分菩提薩埵といふより三藐三菩提に至るまで是れなり。第四に總歸持明分故知般若といふより眞實不虛に至るまで是れなり。第五に秘藏眞言分呵呵呵といふより揭揭に至るまで是れなり。第一の人法總通分に五つあり因行證入時これなり。觀自在と言へば能行の人卽ち此の人は本覺の菩提を因と爲す、深般若は能所觀の法卽ち是れ行なり、照空は則ち能證の智、度苦は則ち所得の果、果は卽ち入なり、彼の敎に依る人の智無量なり、智の差別に依つて時亦多し、三生三劫六十百妄執の差別これを時と名づく、頌に曰く、

觀人智慧を修して、深く五衆の空を照らす、歷劫修念の者は、煩を離れて一心に通ず。

第二の分別諸乘分に亦五つあり、建絕相二一是れなり、初めに建といへば所謂建立如來の三摩地門是れなり色不異空といふより亦復如是に至るまで是れなり。建立如來とは卽ち普賢菩薩の秘號なり、普賢の圓因は圓融の三法を以て宗と爲す、故に以て之に名づく、又是れ一切如來菩提心行願の身なり。頌に曰く

色空本より不二なり、事理元より來た同なり、無礙に三種を融ず、金水の喩其の宗なり。

二に絕といへば所謂無戲論如來の三摩地門これなり、是諸法空相といふより不增不減に至るまでこれなり、無戲論如來と言へば卽ち文殊菩薩の密號なり、文殊の利劍は能く八不を揮つて彼の妄執の心を絕つや是の故に以て名づく。頌に曰く、

八不に諸戲を絕つ、文殊はこれ彼の人なり、獨空畢竟の理、義用最も幽眞なり。三つに相といへば所謂摩訶梅多羅冒地薩怛縛の三摩地門これなり。是故空中無色といふより無意識界に至るまでこれなり。大慈三昧は與樂を以て宗と爲し因果を

示して誡と爲す相性別論し唯識境を遮す心たゞ此れに在りや、頌に曰く、

二我何れの時にか斷つ、三祇に法身を證す、阿陁は是れ識性なり、幻影は卽ち名賓なり。

四つに二といへば唯蘊無我拔業因種これなり、これ卽ち二乘の三摩地門なり、無々明といふより無老死盡に至るまで卽ち是れ因緣佛の三昧なり。頌に曰く、

風葉に因緣を知る、輪廻幾くの年にか覺る、露花に種子を除く、羊鹿の號相連れり。

無苦集滅道此れ是の一句五字は卽ち依聲得道の三昧なり。頌に曰く、

白骨に我何んか在る、青瘀に人本より無し、吾が師はこれ四念なり、羅漢亦何ぞ虞まん。

五つに一といへば阿哩也嚩路枳帝冒地薩怛嚩の三摩地門なり。無智といふより無所得故に至るまで是れなり、此の得自性清淨如來は一道清淨妙蓮不染を以て衆生に開示して其の苦厄を拔く、智は能達を擧げ得は所證に名づく、既に理智を泯ずれば强ちに一の名を以てす、法華涅槃等の攝末歸本の敎唯此の十字に含めり、諸乘の差別智者之を察せよ。頌に曰く、

蓮を觀じて自淨を知り、菓を見て心德を覺る、一道に能所を泯ずれば、三車卽ち歸默す。

第三の行人得益分に二つあり、人法是れなり、初の人に七つあり、前の六つ後の一つ乘の差別に隨つて薩埵に異あるが故に又た薩埵に四つあり愚識金智これなり次に又法に四つあり謂く因行證入なり、般若は卽ち能因能行無礙離障は卽ち入涅槃能證の覺、智は卽ち證果なり、文の如く思智せよ。頌に曰く、

行人の數は是れ七つ、重二彼の法なり、圓寂と菩提と正依何事が乏しからん。

第四の總歸持明分に又三つあり、名體用なり、四種の呪明は名を擧げ、眞實不虛は體を指し、能除諸苦は用を顯はす、名を擧ぐる中に初めの是大神呪は、聲聞の眞言。二つは緣覺の眞言。三つは大乘の眞言。四つは秘藏の眞言なり。若し通の義を以ていはば一一の眞言に皆四名を具す略して一隅を示す、圓智の人三卽歸一せよ頌に曰く、

總持に文義あり、忍呪悉く持明なり、聲字と人法と、實相とに此の名を具す。

第五の秘藏眞言分に五つあり、初めの𑖀𑖽は聲聞の行果を顯し、二の𑖀𑖽は緣覺の行果を擧げ、三の𑖀𑖽は諸大乘最勝の行果を指し、四の𑖀𑖽は眞言曼荼

羅具足輪圓の行果を明し、五の字は上の諸乘究竟菩提證入の義を說く、句義是の如し、若し字相義等に約して之を釋せば無量の人法等の義あり、劫を歷ても盡し難し、若し要聞のものは法に依て更に問へ。頌に曰く、

眞言は不思議なり、觀誦すれば無明を除く、一字に千理を含み、卽身に法如を證す、行々として圓寂に至り、去々として原初に入る、三界は客舍の如し、一心は是れ本居なり。

問ふ、陀羅尼は、これ如來の秘密語なり、所以に古の三藏諸の疏家皆口を閉ぢ筆を絕つ、今此の釋を作る深く聖旨に背けり、如來の說法に二種あり、一には顯、二には秘、顯機の爲には、多名の句を說き。秘根の爲には、總持の字を說く。是の故に如來自ら丑字ぎ字等の種々の義を說きたまへり、是れ則ち秘機の爲に此の說を作す、龍猛無畏廣智等も亦其の義を說けり能不の間敎機に在りまくのみ。之を說き之を默する並に佛意に契へり。問ふ顯密二敎その旨天に懸なり、今此の顯經の中に秘義を說く不可なり、醫王の目には途に觸れて皆藥なり、解寶の人は礦石を寶と見る、知ると知らざると何ぞ誰か罪過ぞ。又此の尊の眞言儀軌觀法は佛金剛頂の中に說きたまへり、此れ秘が中の極秘なり、應化の釋迦は給孤園に在して菩薩天人の爲に畫像壇法眞言手印等を說きたまふ、亦これ秘密なり、陀羅尼集經の第三の卷これなり。顯密は人に在り聲字は卽ち非なり、然も猶顯が中の秘、秘が中の極秘なり、淺深重々まくのみ。

我れ秘密眞言の義に依つて、略して心經五分の文を讃す、一字一文法界に遍じ無終無始にして我が心分なり、翳眼の衆生は盲ひて見えず、曼儒般若は能く紛を解く、斯の甘露を灑いで迷者を霑す、同く無明を斷じて魔軍を破せん、

般若心經秘鍵終

時に弘仁九年の春、天下大疫す、爰に帝皇自ら黃金を筆端に染め、紺紙を爪掌に握つて般若心經一卷を書寫し奉り給ふ。予講讀の選に範つて、經旨の宗を綴る、未だ結願の詞を吐かざるに蘇生の族途に亡む、夜變じて日光赫々たり。これ愚身が戒德に非ず、金輪御信力の爲す所なり、但し神舍に詣せん輩この秘鍵を誦じ奉るべし。昔予鷲峯說法の筵に陪つて親り是の深文を聞き、豈に其の義に達せざらんやまくのみ。

入唐沙門空海上表

金剛頂瑜伽の中に阿耨多羅三藐三菩提心を發す論

亦は瑜伽總持敎門に菩提心の觀行修持を說く義と名く。

龍猛菩薩造

大興善寺の三藏沙門大廣智不空詔を奉けて譯す、

大阿闍梨の云ひたまはく、若し上根上智の人有つて外道二乘の法を樂はず、大度量有つて勇銳にして惑なからんもの宜しく佛乘を修すべし。その時かくの如くの心を發すべし、我今阿耨多羅三藐三菩提を志求して餘果を求めじと誓心決定するが故に、魔宮震動し十方の諸佛皆悉く證知したまふ、常に人天に在つて勝快樂を受け、所生の處に憶持して忘れず、若し瑜伽の中の諸菩薩の身を成ぜんと願ふものを亦發菩提心と名く。何んとならば次いでたる諸尊皆大毗盧遮那佛身に同なり、人の名官を貪ずるものは名官を求むる心を發して名官を理むる行を修す。若し財寶を貪ずるものは財寶を求むる心を發して財物を經營する行を作すが如し。凡そ人の善と惡とを爲さんと欲するには皆先づ其の心を摽して而して後に其の志を成ず。所以に菩提を求むる者は菩提心を發して菩提の行を修す既に是の如くの心を發し已つて須く菩提心の行相を知るべし。其の行相とは三門を以て分別す、諸佛菩薩昔因地に在してこの心を發し已つて勝義行願三摩地を戒と爲す、乃し成佛に至る迄時として暫も忘るゝことなし。惟し眞言法の中にのみ卽身成佛するが故に是れ三摩地の法を說く、諸敎の中に於て闕して書るさず。一には行願、二には勝義、三には三摩地なり、初に行願とは爲く修習の人常に是の如くの心を懷くべし我れ當に無餘の有情界を利益し安樂すべしと十方の含識を觀ずること猶し己身の如し。言ふ所の利益とは爲く一切有情を勸發して悉く無上菩提に安住せしむ、終に二乘の法を以て得度せしめず、今眞言行人應に知るべし、一切有情は皆如來藏の性を含じて皆無上菩提に安住するに堪任せり、是の故に二乘の法を以て得度せしめず、故に華嚴經に云く一衆生として眞如智慧を具足せざるは無し、但し妄想顚倒執著を以て證得せず、若し妄想を離んぬれば一切智、自然智、無礙智則ち現前することを得、言ふ所の安樂とは謂く行人既に一切衆生畢竟成佛すと知るが故に敢て輕慢せず。又大悲門の中に於いて尤も宜しく拯救すべし、衆生の願に隨つて之を給付せよ、乃至身命をも悋惜せず、其れをして安存せしめて、悅樂せしめよ。既に親近し已んぬれば師の言を信任せん、其の相親

むに因んで亦教導すべし、衆生愚矇ならば強ひて度すべからず、眞言行者方便引進すべし。二に勝義とは一切の法は自性無しと觀ず、云何か自性無き謂く凡夫は名聞利養資生の具に執着して務むに安身を以てし、恣に三毒五欲を行ふ、眞言行人誠に厭患すべし、誠に棄捨すべし。又諸の外道等は其の身命を戀んで或は助くるに藥物を以てして仙宮の住壽を得、或は復た天に生ずるを究竟と以爲へり。眞言行人彼れ等を觀ずべし、業力若し盡きぬれば、未だ三界を離れず、煩惱尙存し宿殃未だ殄びず惡念旋起す、彼の時に當つて苦海に沈淪して出離すべきこと難し。當に知るべし外道の法は亦幻夢陽焰に同じ、又二乘の人聲聞は四諦の法を執し、緣覺は十二因緣を執す、四大五陰畢竟磨滅すと知つて深く厭離を起して衆生執を破して本法を勤修して其の果を剋證す、本涅槃に趣くを究竟と已爲へり、眞言行者當に觀ずべし二乘の人は人執を破すと雖も猶し法執あり、但し意識を淨めて其の他を知らず、久々に果位を成じ灰身滅智を以て其の涅槃に趣くこと大虛空の湛然常寂なるが如し、定性有るものは、發生すべきこと難し、要ず劫限等の滿を待つて方に乃ち發生す、若し不定性のものは劫限を論ずること無し、緣に遇へば卽ち廻心向大す、化城より起つて三界を超えたりと以爲へり。謂く宿佛を信せしが故に乃ち諸佛菩薩の加持力を蒙つて而も方便を以て遂に大心を發す、乃し初め十信より下遍く諸位を經て三無數劫を經、難行苦行して然して成佛することを得。既に知んぬ、聲聞緣覺は智慧狹劣なり、亦樂ふべからず。又衆生有て大乘の心を發して菩薩の行を行ず、諸の法門に於て遍修せざること無し。復た三阿僧祇劫を經て六度萬行を修し皆悉く具足して然して佛果を證す、久遠にして而して成することは、斯れ所習の法敎致むね次第あるに由てなり、今眞言行人前の如く觀じ已るべし。復た無餘の衆生界の一切衆生を利益し安樂する心を發すもの、大悲決定するを以つて永く外道二乘の境界を超えて復た瑜伽勝上の法を修する人は能く凡より佛位に入るものなり、亦十地の菩薩の境界を超えて又深く一切法は自性無しと知る、云何んが自性無き前には相說を以てし今は旨陳を以てす夫れ迷途の法は妄想より生ず、乃至展轉して無量無邊の煩惱を成じて六趣に輪廻す、若し覺悟し已んぬれば妄想止除して種々の法滅す、故に自性無し。復次に諸佛の慈悲は眞より用を起して衆生を救攝したまふ。病に應じて藥を與へ、諸の法門を施して其の煩惱に隨つて迷津を對治す、栰に遇うて彼岸に達すれば法已に捨つべし、自性無きが故に大毗盧遮那成佛經に云ふが如し、諸法無相なり爲く虛空の相なり

と是の觀を作し已るを勝義の菩提心と名く當に知るべし一切の法は空なり、已に法の本無生を悟んぬれば心體自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失無からしむ、妄心若し起らば知つて隨ふこと勿れ、妄若し息む時は心源空寂なり、萬德斯に具し妙用無窮なり所以に十方の諸佛勝義行願を以つて戒と爲す、但し此の心を具する者能く法輪を轉じて自他俱に利す、華嚴經に云ふが如し、悲を先として慧を主と爲し方便共に相應し信解淸淨の心如來無量の力あり、無礙智現前し自悟にして他に由らず具足して如來に同じて、此の最勝の心を發す、佛子始めて是の如くの妙寶の心を發生すれば則ち凡夫の位を超えて佛の所行の處に入り如來家に生在し、種族に瑕玷無く佛と共に平等なり、決めて無上覺を成すべし、纔に是の如くの心を生ずれば卽ち初地に入ることを得、心樂動すべからざること譬へば大山王の如し、又華嚴經に云ふに准せば初地より乃し十地に至るまで地位の中に於いて皆大悲を以て主と爲す無量壽觀經に云ふが如し、佛心とは大慈悲是れなり。大涅槃經に云く、南無純陀身は人身なりと雖も心は佛心に同じ。又云く世間を憐愍したまふ、大醫王の身及び智慧俱に寂靜なり、無我の法の中に眞我あり、是の故に無上尊を敬禮す、發心畢竟二つ別なること無し、是の如く

の二心は先心を難しとす、自ら未だ度を得ず先づ他を度す、是の故に我れ初發心を禮す、初發已に人天の師と爲て聲聞及緣覺に勝出せり、是の如くの發心は三界を過えたり。この故に最無上と名くることを得。大毗盧遮那經に云ふが如し、菩提を因と爲し大悲を根と爲し方便を究竟と爲す。第三に三摩地といふは眞言行人是の如く觀じ已つて云何が能く無上菩提を證する、當に知るべし、法爾に普賢大菩提心に住すべし、一切衆生は本有の薩埵なれども貪瞋痴の煩惱の爲に縛せらるゝが故に諸佛の大悲善巧智を以て此の甚深秘密瑜伽を說いて修行者をして內心の中に於いて日月輪を觀せしむ、此の觀を作すに由つて本心を照見するに湛然として淸淨なること猶し滿月の光の虛空に遍じて分別する所無きが如し。亦は無覺了と名け亦は淨法界と名け亦は實相般若波羅蜜海と名く、能く種々無量の珍寶三摩地を含すること、猶し滿月の潔白分明なるが如し、何んとなれば爲く一切有情は悉く普賢の心を含せり、我れ自心を見るに形月輪の如し。何が故にか月輪を以つて喩と爲るとならば爲く滿月圓明の體は則ち菩提心と相類せり、凡そ月輪に一十六分有り、瑜伽の中の金剛薩埵より金剛拳に至るまで十六大菩薩者有るに喩ふ。三十七尊の中に於いて五方の佛位に各一智を表す。東方の阿閦佛は大圓

鏡智を成ずるに由つて亦は金剛智と名く。南方の寶生佛は平等性智を成ずるに由つて亦は灌頂智と名く。西方の阿彌陀佛は妙觀察智を成ずるに由つて亦た蓮華智と名け亦は轉法輪智と名く。北方の不空成就佛は成所作智を成ずるに由つて亦は羯磨智と名く。中方の毗盧遮那佛は法界智を成ずるに由つて本と爲す。已上の四佛智より四波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩は卽ち金寶法業なり。三世一切の諸の聖賢生成養育の母なり。是に於いて印成せる法界體性の中より四佛を流出す、四方の如來に各四菩薩を攝す。東方の阿閦佛に四菩薩を攝す、金剛薩埵金剛王金剛愛金剛善哉を四菩薩と爲す。南方の寶生佛に四菩薩を攝す、金剛寶金剛光金剛幢金剛笑を四菩薩と爲す。西方の阿彌陀佛に四菩薩を攝す、金剛法金剛利金剛因金剛語を四菩薩と爲す。北方の不空成就佛に四菩薩を攝す金剛業金剛護金剛牙金剛拳を四菩薩と爲す。四方の佛の各の四菩薩を十六大菩薩と爲す。三十七尊の中に於いて五佛四波羅蜜及び後の四攝八供養を除いて但し十六大菩薩の四方の佛の所攝たるを取るなり。又摩訶般若經の中に內空より無自性空に至るまで亦十六の義あり一切の有情の心質の中に於いて一分の淨性有り、衆行皆備はれり、其の體極微妙にして皎然明白なり、乃至六趣に輪廻すれども亦變易せず、月の十六分の一の如し、凡そ月の其の一分の明相若し合宿の際に當んぬれば但し日光の爲に其の明性を奪はる、所以に現ぜず後起つ月の初めより日々に漸く加して十五日に至つて圓滿無礙なり、所以に觀行者初に阿字を以つて本心の中の分の明を發起して只漸く潔白分明ならしめて無生智を證す、夫れ阿字とは一切諸法本不生の義なり。

毗盧遮那經の疏に准ぜば、阿字を釋するに具さに五義あり、一には阿字短聲是れ菩提心なり、二には阿字引聲是れ菩提行の義なり、三には暗字短聲是れ證菩提の義なり、四には惡字短聲是れ般涅槃の義なり、五には惡字引聲これ具足方便智の義なり。又阿字を以つて法華經の中の開示悟入の四字に配解せば、開の字とは佛知見を開く、卽ち雙べて菩提心を開く初の阿字の如し、之れ菩提心の義なり。示の字とは佛知見を悟る第三の暗字の如し、これ般涅槃の義なり。總じて之を言はゞ具足成の字とは佛知見に入る第四の惡字の如し、これ證菩提の義なり。悟就の第五の惡字なり、是れ方便善巧智圓滿の義なり。

卽ち阿字は、これ菩提心の義なることを讃する頌に曰く、

八葉の白蓮一肘の間に。阿字素光の色を炳現す。禪智俱に金剛縛に入れて。如來寂靜の智を召入す。扶れ阿字に會ふものは、揩寔決定して之を觀ず、當に圓明の淨識を觀ずべし、若し纔に見るをば則ち眞勝義諦を見ると名け、若し常に見れば則ち菩薩の初地に入る、若し轉漸く增長すれば則ち廓法界に周ねく量虛空に等し、卷舒自在にして、當に一切智を具すべし、凡そ瑜伽觀行を修習する人は當に須らく具に三密の行を修して五相成身の義を證悟すべし。言ふ所の三密とは一には身密とは契印を結び て聖衆を召請するが如きこれなり。二には語密とは密に眞言を誦じて文句をして了々分明ならしめ謬誤無きが如し。三には意密とは瑜伽に住して白淨月の圓滿に相應し菩提心を觀ずるが如きなり。次に五相成身を明さば、一には是れ通達心、二には是れ菩提心、三にはこれ金剛心、四には是れ金剛身五には是れ無上菩提を證して金剛堅固の身を獲るなり、然も此の五相具さに備はれば方に本尊の身と成る、其の圓明は則ち普賢の身なり、亦これ普賢心なり、十方の諸佛と之れ同じ。亦乃ち三世の修行證に前後有れども達悟に及び已んぬれば去來今無し、凡人の心は合蓮華の如く佛心は滿月の如し、此の觀若し成ずれば十方國土の若しは淨、若しは穢、六道の含識三乘の行位及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別、菩薩の因地の行相、三世の諸佛悉く中に於いて現じ、本尊の身を證して普賢の一切の行願を滿足す。故に大毗盧遮那經に云く、是の如くの眞實心は故佛の宣說したまふ所なり。問ふ前に二乘の人は法執有るが故に成佛することを得ずと言ふと、今また菩提心を修せしむる三摩地とは云何んが差別なる。答、二乘の人は法執有るが故に久久に理を證し沈空滯寂して限るに劫數を以てし、然して大心を發し又散善門の中に乘じて無數劫を經、この故に厭離すべきに足れり、依止すべからず。今眞言行人は既に人法の上執を破して能く正く眞實を見るの智なりと雖も、或は無始の間隔の爲に未だ如來の一切智々を證することはざるが故に、妙道を欲求し次第を修持して凡より佛位に入るものなり、卽ちこの三摩地は能く諸佛の自性に達し、諸佛の法身を悟り法界體性智を證して大毗盧遮那佛の自性身、受用身、變化身、等流身を成ず。爲く行人未だ證せざるが故に理宜しく之を修すべし。故に大毗盧遮那經に云く、悉地は、心より生ず、金剛頂瑜伽經に說くが如し、一切義成就菩薩初めて金剛座に坐し、無上道を取證して遂に諸佛の此の心地を授くることを蒙つて然して能く果を證す、凡そ今の人若し心決定して敎の如く修行す

れば、座を起たずして三摩地現前し、こゝに本尊の身を成就す、故に大毗盧遮那經供養次第法に云く、若し勢力を廣く增益する無くんば法に住して但し菩提心を觀ずべし。佛此の中に萬行を具し淨白純淨の法を滿足すと說きたまふ。此の菩提心は能く一切諸佛の功德の法を包藏するが故に若し修證し出現すれば則ち一切の導師と爲る、若し本に歸すれば則ち是れ密嚴國土なり、座を起たずして能く一切の佛事を成ず、菩提心を讚して曰く、

若し人佛慧を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身に、速に大覺の位を證す

金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論なり。

大毗盧遮那成佛經疏卷第一　本

沙門一行阿闍梨記

入眞言門住心品第一

大毗盧遮那成佛神變加持とは、梵音の毗盧遮那とは是れ日の別名、卽ち除暗遍明の義なり、然るを世間の日は卽ち方分あり、若し其の外を照らすときは內に及ぶこと能はず、明、一邊に在つて一邊に至らず、又唯し晝のみあつて光夜を燭さず、如來智慧の日光は則ち是くの如くにあらず、一切處に遍じて大照明を作す、內外方所晝夜の別あること無し。復次に日、閻浮提を行くに一切の卉木叢林その性分に隨つて各增長することを得、世間の衆務これに因つて成ずることを得、如來の日光も遍く法界を照らして亦能く平等に無量の衆生の種種の善根を開發し、乃至世間出世間の殊勝の事業これに由つて成辨することを得ざるなし、又重陰昏蔽して日輪隱沒すれども亦壞滅するにあらず猛風雲を吹いて日光顯照すれども亦始めて生ずるに非るが如く、佛心の日も亦復是くの如し、無明煩惱戲論重雲の爲に覆障せらるゝと雖も而も滅ずる所なく、諸法の實相三昧を究竟じて圓明無際なれど

も而も增する所なし、是くの如き等の種々の因緣を以つて世間の日喩とすべからず、但し其の少分相似を取るが故に、加ふるに大の名を以つてして摩訶毗盧遮那といふなり。

成佛とは、具足の梵音には成三菩提といふべし是れ正覺正知の義なり謂く如實智を以つて過去未來現在の衆生數、非衆生數、有常無常等の一切の諸法を知る、皆了了に覺知するが故に名けて覺と爲す、而も佛といふは卽ち是れ覺者なり、故に文に就いて省みる但し成佛といふ。

神變加持とは、舊譯には或は神力所持といひ、或は佛所護念といふ、然も此の自證の三菩提は一切の心地を出過して現に諸法の本不生を覺る、この處は言語盡竟し心行亦寂なり、若し如來威神の力を離れぬれば、則ち十地の菩薩なりと雖も尙し其の境界にあらず、況んや餘の生死の中の人をや、爾の時に世尊往昔大悲願の故に而もこの念を作したまふ、若し我れ但し是くの如くの境界に住しては則ち諸〻の有情これを以つて益を蒙ること能はじ、この故に自在神力加持三昧に住して普く一切衆生の爲に種種の諸趣所憙見の身を示し、種種の性欲所宜聞の法を說き、種種の心行に隨つて觀照門を開く、然も此の應化は毗盧遮那の身、或は語或は意より生ずるにあらず、一切の時處に於いて起滅邊際俱に不可得なり、譬へば幻師の咒術力を以つて藥草を加持して能く種種未曾有の事を現じ五情の所對に衆心を悅可せしむ、若し加持を捨つるときは然して後に隱沒するが如く如來金剛の幻も亦復かくの如し、緣謝すれば則ち滅し、機興ずれば則ち生ず、事に卽して而も眞なり、終盡あることなし、故に神力加持經といふ、若し梵本に據らば具に題して大廣博經因陀羅王といふ、因陀羅王とは帝釋なり、言く此の經は是れ一切如來秘要の藏、大乘衆敎に於いて威德特尊なること猶し千目の釋天の主たるが如し、今經の題太だ廣きことを恐る、故に具に存せず。

入眞言門住心品とは、梵本に具に二の題あり、初には修眞言行品といひ、次には入眞言門住心品といふ、竊に入住の義を謂へば修行を兼ぬるを以つての故に煩文を離れて、但し其の一を著す、眞言といふは梵には漫怛攞といふ、卽ち是れ眞語如語不妄不異の音なり、龍樹の釋論には之を祕密號と謂ひ、舊譯には咒といふ、正翻にはあらず、此の品は經の大意を統論す、所謂衆生の自心品は卽ち是れ一切智智なり、實の如く了知するを名けて一切智者と爲す、是の故に此の敎の諸の菩薩は、眞語を門となして自心に菩提を發し、卽心に萬行を具し心の正等覺を見

心の大涅槃を證し、心の方便を發起し、心の佛國を嚴淨す、因より果に至るまで皆無所住にして而も其の心に住するを以つての故に入眞言門住心品と曰ふなり。入眞言門に略して三事あり、一には身密門、二には語密門、三には心密門なり、

この事は下に當に廣く說くべし、行者この三方便を以つて自ら三業を淨むるときは、卽ち如來の三密の爲に加持せられて乃至能く此の生に於いて地波羅蜜を滿足す、復劫數を經歷して備に諸の對治の行を修せず、故に大品に云く、或は菩薩初發心の時に卽ち菩薩の位に上つて不退轉を得るあり、或は初發心の時に卽ち無上菩提を得て便ち法輪を轉ずるあり、龍樹の以爲く如し人遠く行くに羊に乘じて去るものは久久にして乃ち到り、馬は則ち差速し、若し神通に乘ずる人は發意の頃に於いて便ち所詣に至る、發意の間に云何が到ることを得といふことを得じ、神通の相は爾なり、疑を生すべからず、則ち此の經の深旨なり。

經に如是我聞一時薄伽梵住如來加持法界宮といふは、經の初の五義は智度の中に廣く明すが如し、然も此の經の梵本に闕いて通序なし、阿闍梨の云はく、毗盧遮那の大本に十萬の偈あり、浩廣にして持し難きを以つての故に傳法の聖者その宗要を採るに凡そ三千餘頌あり、眞言行法は文義略周せり、大經の正本にあらざるを以つての故に通序を題せずと雖も、今例を以つて之を加ふるに、義に於いて傷ることなし。

薄伽梵とは、論師の所解に具に六義あり、今この宗の中には、薄伽梵といふは是れ能破の義なり、人の利器を執持して摧伏するところ多し、其れ本より未だ此の名あらざれども、世議つて其の事迹を觀るが故に號して能破者とするが如く、世尊も亦爾なり、大智の明を以つて一切識心の無明煩惱を破したまふ、此等は本より無生にして亦相貌もなし、然れども慧日出づるときに暗惑自ら除く是の故に義を以つて名けて破と爲す、釋論に亦云く、婆伽をば破と名づけ婆をば能と名づく、能く婬怒痴を破するが故に婆伽婆と名づく、二乘は三毒を破すと雖も亦了了に盡くさず、香を盛る器の餘氣故ほ在るが如し、又草木の薪火の力薄きを以つての故に灰炭盡きざるが如し、如來は劫燒火の一切都盡して烟もなく炭もなきが如し、故に婆伽婆と名づく。復次に帝釋の聲論には、女人を謂つて薄伽と爲す、これ欲求の因緣あれば能く煩惱を息むる義なり、又これ所從生の義なり、金剛頂宗には卽ち此の義を翻じて女人と謂ふは、卽ち是れ般若佛母なり、無礙知見の人皆ことごとく是れより生ず、其れ志求の因緣あつて與に相應することを得れば、煩

惱戲論皆ことゞく永く息む、世間の欲熱の小く止息すと雖も而も實に更に增すが如きにはあらず、密敎は直に宣ぶべからざるを以つての故に多く是くの如くの隱語あり、學者當に類に觸れて之を思ふべし、又薄伽梵とは卽ち有の聲を帶す、人多く資財を有するをば持資財者と名づけ、金を有するを以つての故に持金者と名づくるが如く、如來は殊勝の德を具するを以つての故に、持衆德者と名づく、釋論に亦云く婆伽をば德といひ、婆をば有といふ、是れを有德と名づく、婆伽をば名聲と名づけ、婆をば有といふ、これを有名聲と名づく、一切世間に有德名聲の佛のごとくなるもの無し、則ち其の義なり、經の中に多く譯して世尊と爲す是れ歎德の總稱なり、西方の語法言尊者に及ぶをば敢て直に其の名を斥さずして先づ其の功德を歎ず、大智舍利弗、神通目犍連、頭陀大迦葉、持律優波離等といふが如し、故に此の經の中に例して薄伽梵毗盧遮那といふ、今此の方の文勢に順じて或は世尊を以つて下に居くなり。

經に薄伽梵住如來加持といふは、薄伽梵は卽ち毗盧遮那本地法身なり、次に如來といふは是れ佛の加持身其れ所住の處なり、佛の受用身と名づく、卽ち此の身を以つて佛の加持住處と爲す、如來心王諸佛住にして而も其の中に住したまふ、既に遍一切處の加持力より生ず。卽ち無相法身と無二無別なり、而も自在神力を以つて一切衆生をして身密の色を見、語密の聲を聞き、意密の法を悟らしむ、其の根性に隨つて種々に不同なり、卽ち此の所住を加持處と名づく、次に又加持住處を釋歎するが故に廣大金剛法界宮といふ、大は謂く無邊際の故に、廣は謂く不可數量の故に、金剛といふは實相智に喩ふ、一切語言心行の道を過ぎたり、適に所依なし、諸法を示さず初中後なし、不盡不壞にして諸の過罪を離れたり、變易すべからず、破毀すべからず、故に金剛と名づく、世間の金剛寶に三事の最勝あるが如し、一には不可壞の故に、二には寶中の上の故に、三には戰具の中に勝れたるが故に此れ釋論の三種の金剛三昧の中の喩と意大に同なり、法界とは廣大金剛の智體なり、此の智體とは所謂如來の實相智身なり、加持を以つての故に卽ち是れ眞實の功德に莊嚴せらるゝ處の妙住の境、心王の所都なるが故に宮といふ、此の宮は是れ古佛成菩提の處、所謂摩醯首羅天宮なり。釋論に云く第四禪の五種は那含の住處なり、淨居天と名づく、是れを過ぎて以往に十住の菩薩の住處ありまた亦淨居と名づく、號して大自在天王と曰ふこれなり、今此の宗の明す義は自在加持神心の所宅なるを以つての故に名づけて自在天王宮と曰ふ、謂く如來有應の處に

に隨つて此の宮にあらざること無し、獨三界の表に在るにあらず。一切持金剛者皆悉集會といふは、次に妙眷屬を明すなり、如來この宮の中に在すとき獨處すとやせん、眷屬ありや、故に此の中に乃ち無邊の眷屬あつて常に集會する所なりといふ、所謂執金剛等なり、梵に伐折羅陁羅と云ふ、此の伐折羅は卽ち是れ金剛杵なり、陁羅は是れ執持の義なり、故に舊譯には執金剛といひ、今は持金剛と謂ふ兼ねて淺深二の釋を得たり、義に於いて勝れたりと爲す、故に文便に隨つて互に其の辭を爲す、若し世諦常途の所表ならば則ち生身の佛に常に五百の執金剛神ありて翊從侍衞すといふ、然も此の宗の密意は伐折羅は是れ如來の金剛智印なり、是くの如くの智印其の數無量なり、能く此れを持する者亦復無邊なり、然る所以は心王所住の處には必ず塵沙の心數ありて以つて眷屬たり、今心王の毗盧遮那、自然覺を成ず、爾の時に一切心數卽ち金剛界の中に入つて如來內證の功德差別智印と成らずといふこと無し、是くの如くの智印は唯し佛と佛とのみ乃し能く之を持したまへり、菩提義に約すれば卽ち無量無邊の金剛印あり、佛陀義に約すれば卽ち無量無邊の持金剛者あり、此の衆德は悉く皆一相一味にして實際に到るに由るが故に集會と名づく、若し少分も未だ等しからず一法も未だ滿せざるをば卽ち一切集會と名づけず、然も自在神力に加持せらるゝを以つての故に卽ち心王の毗盧遮那より加持尊特の身を現ず、爾の時に無量の法門眷屬一一に皆執金剛の身を現じて如來威猛の大勢を顯發したてまつる、譬へば帝釋の手に金剛を執つて修羅の軍を破するが如く、今此の諸執金剛も亦復是くの如し、各一門より大空の戰具を持して能く衆生無明の煩惱を壞す、故に以つて相況ふなり。

如來信解遊戲神變生大樓閣寶王高無中邊諸大妙寶王種々間飾菩薩之身爲師子座とは、大衆已に集んぬれば說法の處あるべし、故に次に所住の樓閣及び師子座を明すなり、信解とは始め眞正の發心より乃し成佛に至るまで是の中間に於いて通じて信解地と名づく、梵に微吒哩扼多といふは是れ踴躍の義、遊戲の義、神變の義なり、謂く初發心より以來深く善根を種ゑて種々の願行を起し、佛土を莊嚴し、衆生を成就して恒に殊に勝進して休息せざるが故に卽ち是れ超昇騰躍の義なり掉動鼓舞して能く善巧の三業を以つて普く衆心を悅ばしむるが如し、故に此の騰躍を卽ち遊戲と名づく、是くの如くの遊戲は卽ち是れ菩薩の自在神通なり、言は毗盧遮那もと菩薩の道を行ぜし時、一體速疾力三昧を以つて無量の善知識を供養し遍く無量の諸度門を行じ自利々他の法皆具足して能く是くの如くの如來智寶

の集成する所の秘密莊嚴法界樓觀を得たまへり、一切實報の所生に於いて最も第一たり、猶し眞陀摩尼に諸寶の王たるが如し、故に遊戯神變生大樓閣寶王といふ、それ高にして窮りなし當に知るべし廣にして亦無際なり、邊不可得なるを以つての故に、亦復中もなし此れは是れ遍一切處の身の所住の處なり、當に知るべし、是くの如くの樓觀も亦一切處に遍せり、次に樓觀莊嚴の相を明す、猶し人あつて種々の雜色の金剛を以つて金剛を嚴飾するに然も其の體性は差別あることなし無きが如く、今も亦是くの如し還つて如來種種の功德寶王を以つて樓閣寶王を間飾せり、何を以つての故に更に法として是くの如くの寶性を出るものあること無きが故に、然も此の第一寂滅の相は如來加持神力を以つて應度のものをして諸の法門の表像に隨つて若し見聞觸知すべきには卽ち此れを以つて門となして法界に入れしむ、善財童子の彌勒の宮殿に入つし因緣の如し、此の中に廣く明すべし菩薩之身爲師子座とは上に金剛法界宮と說く、卽ちこれ如來の身なり、次に大樓閣寶王といふ、亦卽ち是れ如來の身なり、今師子座といふ、當に知るべし亦爾なり、菩薩の身といふ所以は、謂く本菩薩の道を行ぜし時、次第に地波羅蜜を修行して乃し第十一地に至る、當に知るへし後地は卽ち前地を以つて基とするが故に、如來、菩薩の身を以つて師子座と爲すと云ふ、釋論に曰く譬へば師子の衆獸の中に於いて獨步無畏なるが如く佛も亦是くの如し、九十六種の外道の中に於いて一切降伏して無畏なるが故に人中師子と名づく、其の所坐の處若しは牀、若しは地皆師子座と名づく、今此の宗の明す義は師子といふは卽ち是れ勇健の菩提心なり、初發意より以來精進の大勢を得て怯弱あること無きこと猶し師子の執縛する所に隨つて必ず獲て遺ふことなきが如し、卽ち是れ自在度人無空過の義なり、若し淺略の釋ならば言く諸の菩薩深心に法を敬つて乃至身を以つて佛を荷戴するは師子座なり、故に菩薩之身爲師子座と曰ふ。

其金剛名曰虛空無垢執金剛乃至金剛手秘密主如是上首十佛刹微塵數等持金剛衆俱及普賢菩薩慈氏菩薩妙吉祥菩薩除一切蓋障菩薩等諸大菩薩前後圍繞而演說法とは次に同聞衆を明すなり。問うて曰く佛所說の經に何が故に先づ住處眷屬を明すや。答へて曰く、譬へば國王若し政令あるときは必ず先づ外朝に出居して制斷刑賞す、時の史、著記して某の時の王、某の處に在して某甲の大臣等と集議して是くの如くの敎令ありしといふことは境內をして信伏し之を行ふに疑はざらしめんと欲するが故なるが如く、法王も亦爾なり、將に大法を說かんとするには必ず大眷

屬の菩薩衆の中に於いて證明を作さしむ、是の因緣を以つて聞くもの信を生ず、信心に由るが故に能く是くの如くの法の中に入つて修行し得證して倍復信を生ず故に先づ衆を列ぬるなり。

虛空無垢執金剛とは卽ち是れ菩提心の體なり、一切の執諍戯論を離れて淨虛空の障翳あること無く無垢無染にして亦分別なきが如し、此くの如くの心は卽ち是れ金剛智印なり、能く此の印を持するを虛空無垢執金剛と名づく。復次に虛空遊步執金剛とは、遊步は是れ不住の義、勝進の義、神變の義なり、淨菩提心は一切の法に於いて、都て所住なきを以つて而も常に進んで萬行を修し大神通を起す、故に虛空遊步といふ。復次に虛空無垢執金剛といふは、卽ち阿字門平等の種子なり無住の行を修するは、譬へば種殖の方便をもて根牙漸く生ずるが如し、故に次に發行の金剛印を明すなり。

第三に虛空生執金剛とは、萠牙已に生じて四大時節を緣と爲し虛空礙へずして念念に滋長するが如く菩提心も亦復是くの如し、無所得を以つて方便として萬行を緣と爲して眞實生を得、眞實生とは所謂大空生なり、故に虛空生と名づく。

第四に被雜色衣執金剛とは、萠牙增長して莖葉花實漸次に滋繁なるが如く菩提心の樹王の萬德開敷することも亦復是くの如し、故に具種々色といふ、復次に種種の法界の色を以つて此の無垢の菩提心を染めて大悲漫荼羅を成ず、故に被雜色衣と名づく。

第五に善行步執金剛とは、此の善の字、梵には毗質多羅といふ、端嚴の義、種子の義あり、譬へば已に果實を得て復還つて種子となるが如し、善行步とは卽ち是れ諸佛の威儀なり、謂く善く時宜の可度不可度等の種々の通塞を知つて、身口意の方便を以つて群機に俯應し曲に規矩に中つて皆佛事を成ず、故に以つて名となすなり。

第六に住一切法平等執金剛とは、謂く一切の佛の平等の性に住するなり、謂く因果自他有爲無爲等の一切の諸法此の如實智の中に入りぬれば、究竟平等にして同一實際なり、能く此の智印を持す、故に以つて名と爲す、然も上來の五句は亦皆これ如來眞實の功德なり深淺の殊なけれども分別して解し易からしめんと欲ふが爲の故に次第の說を作すまくのみ。

第七に哀愍無量衆生界執金剛とは、この哀愍亦は救度と名づく、謂く已に平等の法性に住して自然に一切衆生に於いて同體悲愍の心を發す、諸の衆生界無量なる

が故に是くの如くの大悲も亦限量なし、此れは是れ如來の一の功德なり、故に能く持するものに因んで以つて名と爲す。

第八に那羅延力執金剛とは、已に哀愍の心を發して若し大勢を具するときは則ち能く救護す、故に次に明す、經の中に六十の象の力を挍量するに一の香象の力に如かず、乃至末後の那羅延の力最勝なり、佛の生身の一一の毛孔は皆那羅延の力に等し、故に以つて法界身を那羅延力に喩ふ。

第九に大那羅延力執金剛とは謂く秘密神通の力を持するなり、一闡提必死の疾、二乘實際作證已死の人の如きは、諸佛の醫王明に如來の性を見たまふが故に則ち能く必定師子吼して救療の因緣に於いて心怯弱せず、諸の菩薩は尙し爾ることを能はず、故に復不共一切の摩訶那羅延力を明す。

第十に妙執金剛とは妙をば更無等比、更無過上の義に名づく、猶し醍醐の融妙にして已に極めて復增すべからず、常に變易せず無間無雜なるが如く、如來も亦爾なり、一切の功德ことごとく皆無比無上なり、諸そ有らゆる所作亦唯し此の一事の因緣の爲なり、故に妙執金剛と名づく。

第十一に勝迅執金剛とは、勝は謂く大空なり、大空は卽ち是れ遍一切處なり、故に能く速疾神通を起す、此の乘に住するものは、初發心の時に卽ち正覺を成ず、生死を動ぜずして涅槃に至る、故に勝迅と名づく。

第十二に無垢執金剛とは卽ち是れ一切の障を離れたる菩提心なり、譬へば眞金の體性純淨にして若し種種に鍊冶し衆寶をもて磨瑩すれば倍復光明あるが如し、則ち知んぬ初質は尙し微垢と共住す、能く此の竟畢淨の金剛印を持すれば因んで以つて名と爲す。

十三に及迅執金剛とは、此の及の字、梵文には是れ忿中の忿、利中の利なり、義をもて翻ずれば猶し刀及の如し、此の金剛利智を持して一切の難斷の處悉く斷じ、難滅の處悉く滅す、故に以つて名と爲す。

十四に如來甲執金剛とは、如來甲は所謂大慈なり、此れに由つて身を嚴るが故に衆生を攝護し佛事を施作す、一切の煩惱の爲に傷けられず、能く降伏し殂壞するものなし、故に以つて名と爲す。

十五に如來句生執金剛とは、句をば住處に名づく卽ち大空生なり、諸佛自證の功德は如來の性より生ず、此の加持身は如來自證の功德より生ず、阿字門を離れざるを以つての故に如來句生と名づく。

十六に住無戯論執金剛とは、所謂大空の住する慧なり、謂く縁起の實相は無生無滅不斷不常亦去來一異にあらず、是の處は諸の戯論息んで法、涅槃の如しと觀す、是くの如くの智印を持するが故に以つて名とすることを得。

十七に如來十力生執金剛とは謂く佛の方便智なり、是くの如くの妙權は何れの處よりか生ずる、謂く如來の十智力より生ず、是くの如くの印を持するが故に以つて名となすことを得。

十八に無垢眼執金剛とは、卽ち如來の五眼なり、菩提心畢竟淨なるを以つての故に一切種を以つて一切の法を觀ずるに了了に見聞覺知して罣礙する所なし、能く是くの如くの金剛印を持す、故に以つて名と爲す。

十九に金剛手秘密主とは、梵に播尼といふ卽ちこれ手掌なり、掌に金剛を持すると手に執ると義同なり、故に經の中に二名互に出すなり、西方には夜叉を謂つて秘密となす、其の身口意速疾隱秘にして了知すべきこと難きを以つての故に舊翻には或は密迹といふ、若し淺略をもて義を明さば秘密主といふは卽ち是れ夜叉王なり、金剛杵を執つて常に佛を侍衞したてまつる、故に金剛手といふ、然も是の中の深義は夜叉といふは卽ち是れ如來の身語意密なり、唯し佛と佛とのみ乃し能く之を知りたまへり、乃至彌勒菩薩等も猶し是くの如くの秘密神通に於いては力及ばざる所なり、秘中の最秘なり、所謂心密の主なるが故に秘密主といふ、能く此の印を持す故に執金剛といふなり。

如是上首十佛刹微塵數等持金剛衆俱とは、若し具に梵本を存せば列名の下に於いて一一に皆多の聲あり、虛空無垢等虛空遊步等乃至秘密主等といふべし、然る所以は此れ等の上首の執金剛一一に皆無量の眷屬部類あり、大本には當に具に存すべしまくのみ、然も其の綱要を統れば則ち枝末これに隨ふ、宗通の用に於いて闕けたりとするに足らず、いふ所の十佛刹微塵數とは如來の差別智印その數無量なり、算數譬喩の能く知る所にあらず、且く如來の十種の智力を以つて各一佛刹微塵に對して以つて衆會の數を表す、世界海世界性及び一佛刹の義は釋論の中に廣く明すが如し、然も此の毗盧遮那內證の德、加持を以つての故に一一の智印より各執金剛の身を現ず、形色性類皆表象あり、各本緣性欲に隨つて衆生を引攝す、若し諸の行人慇懃に修習するときは能く三業をして本尊に同ぜしむ、この一門より法界に入ることを得つれば卽ち是れ普く一切法界門に入るなり。

次に菩薩衆を列ぬるに四聖者を以つて而も上首とす、前に明す諸執金剛は一向に

是れ如來の智印なり、今此の菩薩は義に定慧を兼ね、又慈悲を兼ねたり、故に別に名を受く、亦これ毗盧遮那内證の功德なり、執金剛に十佛刹微塵の衆あるが如く、當に知るべし諸菩薩も法門相對するに亦十佛刹微塵の衆あり、加持を以つての故に各法界の一門より現じて一善知識の身となることを得たり、又般若の釋論には生身の佛成道の時は阿難密迹力士等これを内眷屬と名づけ、舍利弗目犍連等の諸の聖人及び彌勒文殊の諸の阿毗跋致の一生補處の菩薩等これを大眷屬と名づく、今謂く佛の加持身も亦復是くの如し。諸執金剛の各如來の密印を持するを内眷屬と名づけ、諸菩薩の大悲方便普門をもて無量衆生を攝受し法王を輔佐して如來の事を行ずるを大眷屬と名づく、故に大品に云く、諸佛の内眷屬と爲らんと欲ひ、大眷屬を得んと欲はば當に般若波羅蜜を學すべし、普賢菩薩とは、普は是れ遍一切處の義、賢は是れ最妙善の義なり、謂く菩提心所起の願行及び身口意ことごく皆平等にして一切處に遍せり、純一妙善にして備に衆德を具す、故に以つて名と爲す。慈氏菩薩とは謂く佛の四無量心なり、今慈を以つて稱首と爲す、この慈は如來種姓の中より生じて能く一切世間をして佛家を斷ぜざらしむ、故に慈氏といふ、上に普賢といふ是れ自證の德なり本願已に滿じて衆生を化して此の道を得しめんと欲ふが故に次に之を明す、妙吉祥菩薩とは、妙は謂く佛の無上の慧なり猶し醍醐の純淨第一なるが如し、室利を翻じて吉祥と爲す、即ち是れ衆德を具する義なり、或は妙德といひ、亦は妙音といふ、言く大慈悲力を以つての故に妙法音を演べて一切をして聞かしむるが故に彌勒に次いで之を明す。除一切蓋障菩薩とは、謂く障をば衆生の種種の心垢と爲す、能く如來の淨眼を翳して開明すること能はず、若し無分別の法を以つし諸の戲論を滅するは、雲霧消除して日輪顯照するが如し、故に除蓋障といふ、如來の諸有所作ことごく皆此の一事の因緣の爲なり、故に妙音に次いで之を明す。復次に行人、般若波羅蜜を學すと雖も若し禪定なければ猶し盲者の日光に遇ふと雖も能く爲す所なきが如し、故に文殊の妙慧に次いで除蓋障三昧を明すなり、この四菩薩は即ち是れ佛身の四德なり、偏闕するところあれば則ち無上菩提を成ずること能はず、是の故に上首たるを列ねて以つて塵沙の衆德を統ぶるなり。諸大菩薩とは、具に梵文を出さば摩訶菩提薩埵といふべし、釋論に云く、菩提をば諸佛の道と名づけ、薩埵をば衆生と名づけ、或は勇心と名づく、是の人ことごく諸佛の功德を得んと欲つて其の心斷ずべからず破すべからず金剛山の如し、是れを薩埵と名づく。復次に此の人心能く

大事の爲に退せず轉せず大勇心あるが故に多くの衆生の中に大慈悲を起し大乘を成立し能く大道を行じて最大の處を得るが故に必ず能く說法して一切衆生の大邪見大愛大我の心等の諸の煩惱を破す、故に名づけて摩訶薩埵と爲す、阿闍梨の云ひたまはく具に正義に據らば、當に菩提索多といふべし、此の索多とは、是れ忍樂修行堅持不捨の義なり、然も聲明に是くの如くの法あり、若し文字を論ずれば其の義正しと雖も音韻或は流便ならざれば便を取つて之を安することを得、故に世の論師謂つて薩埵と爲す、傳習のもの其の辭に隨順せり、瑜伽宗に就いて云はば。薩埵に略して三種あり、一には愚童薩埵謂く六道の凡夫なり、實諦の因果を知らず、心に邪道を行じ苦因を修習し三界に戀著し堅執して捨てず故に以つて名と爲す、二には有識薩埵卽ち二乘なり纔に生死の過患を覺知して自ら出離を求め涅槃に至ることを得、化城に著保して滅度の想を興し、如來の功德に於いて未だ願樂の心を生ぜず、故に以つて名と爲す、三には菩提薩埵無上菩提は一切の臆度戲論種々の過失を出過せり、是れは一向純善白淨微妙にして譬類すべからざるの義なり、卽ち是れ衆生の本性不思議の心なり、能く是くの如くの成道の事を忍んで願樂し修行し堅固にして動せず、故に菩提索多と名づく、是くの如くの人の中に於いて功業最大にして一切衆生に轉授するに堪能なり、故に名づけて摩訶薩埵と爲す、これ等の大衆前後に大日世尊を圍繞して無量の身口意を以つて供養恭敬す、聽法の爲の故に次に群機嘉會の時に同じく聞く所の法を明して卽ち經に所謂越三時如來之日加持故身語意平等句法門といふ、然も此の經、閻浮提に流布するに略して十萬の偈あり、若し十佛刹微塵の大衆各各に廣く身口意の差別の法門を演べば卽ち限量なし、此の說法の時分復當に云何ん、故に結集者その時に佛日に住して而も演說すと云ふものなり、世間の時分の如きは則ち過去未來現在長短の劫量種種の不同あり、且く日四天下を行くに約せば一周の晝夜に各初中後分あり乃至卅時等刹那不住にして代謝相推す、淨眼を以つて之を觀ずるに三際の相了に不可得なり、無終無始にして亦去來なし卽ち此の實相の日は圓明常住にして湛なること虛空の若し時分修短の異あること無し、然も佛の神力を以つての故に瑜伽行者をして無量劫に於いて食頃の如く謂はしめて、或は食頃を演べて以つて無量劫と爲す、延促自在にして咸く衆機に適へり定相として得べきこと無し、故に如來日と云ふ、此くの如くの時の中に佛何の法をか說きたまふ、卽ちこれ身語意三平等句の法門なり、言く如來種種の三業は皆第一實際妙極の境に至れり、身

は語に等しく、語は心に等し、猶し大海の一切處に遍して同一鹹味なるが如し、故に平等といふなり、句とは梵には鉢曇といふ、正翻には足と爲す、聲論には是れ進行の義、住處の義なり、人の進歩するに足を擧げ足を下す其の迹の所住の處を之を鉢曇と謂ふが如く、言辭句逗の義も亦是くの如し、故に同一の名のみ、今此の宗に就かば謂く是くの如くの道迹を修し次第に進修して三平等の處に住することを得るが故に名づけて句と爲す、卽ち平等の身口意秘密加持を以つて所入門と爲す、謂く身平等の密卽語平等の眞言心平等の妙觀を以つて方便と爲るが故に加持受用身を逮見す、是くの如くの加持受用身は卽ち是れ毘盧遮那遍一切身なり、遍一切身とは、卽ち是れ行者平等の智身なり、是の故に此の乘に住するものは不行を以つて行じ、不到を以つて到る、而も名づけて平等句とすることは、一切衆生皆其の中に入りぬれば而も實に能入のものも無く、所入の處も無し、故に平等と名づく、平等の法門は則ち此の經の大意なり。

時彼菩薩普賢爲上首諸執金剛秘密主爲上首毗盧遮那如來加持故奮迅示現身無盡莊嚴藏乃至有情類業壽種除復有牙種生起とは、謂く將に此の平等の法門を說かんとするが故に、先づ自在加持を以つて大衆を感動して悉く普門の境界秘密莊嚴不可思議未曾有の事を現ず、彼の疑問に因つて之を演說したまへば則ち聞者信樂倍增して深く悟義に入る、法華序分從地涌出品の因緣の如し、此の中に當に廣く之を說くべし、復次に普賢秘密主等の上首の諸の仁者は卽ち是れ毗盧遮那の差別智身なり、是くの如くの境界に於いて久しく已に通達せり、然も此の諸の解脫門所現の諸の善知識各無量の當機衆を引いて同じく法界漫荼羅に入らしむ、此の初めて法門に入る實行の諸菩薩を饒益せんが爲の故に如來加持をもて大神通力を奮迅示現したまふ、師子王の將に震吼せんと欲するとき必ず先づ其の身を奮迅し材力を呈現して然して後に聲を發するが如く、如來も亦爾なり、將に必定師子吼して一切智門を宣說せんと欲ふが故に先づ無盡莊嚴藏を奮迅示現したまふ、所謂莊嚴とは、謂く一平等の身より普く一切の威儀を現ず是くの如くの威儀、密印にあらざること無し、一平等の語より普く一切の音聲を現ず、是くの如くの音聲、眞言にあらざること無し、一平等の心より普く一切の本尊を現ず、是くの如くの本尊三昧にあらざること無し、然も此の一一の三業差別の相皆邊際なし度量すべからず、故に無盡莊嚴と名づく、如來秘密慧經に云く、除蓋障菩薩、法會の中に於いて佛身の量を知らんと欲ふが故に大目犍連をして之を尋ねしむ、目連上梵宮に至

つて猶し如來を觀たてまつるに目の前に對するが若し、佛身の威儀說法の音聲、本と異なること無し、乃至その神力を盡くして他方の佛土に往詣するに亦梵宮に異ならず、爾の時に除蓋障菩薩、目連を以つてして測ること能はざるが故に卽ち自ら往いて觀察す十方各如恒河沙の世界を過ぎて皆如來を見たてまつるに座を起たずして法を演說したまふ、乃至周く十方を極め、其の神通勢力を盡せども亦復是くの如し、然して後に還歸て方に除疑天女を見るに佛を去ること遠からずして見に三昧に入る便ち是の念を作す我れ聞く此の天女は無量の三昧門を通達せりと我れ當に之を觀ずべし、今何の定にか住すると、又心力を盡して之を觀ずるに其の心の所行の處を測らず、無量の天鼓を聚集すること一一に皆須彌山王の如くして神力を以つて同時に聲を發して出定せしめんと欲すれども而も得ること能はず乃至佛の言はく、我れ未だ菩提心を發さゞりし時、この天女已に能く此の三昧に住せりと、卽ち是れ無邊際の義なり、是くの如く毗盧遮那普く十方一切の世界に於いて一一に皆佛の加持身を現じたまふ、是の一一の身に各十佛刹微塵數等の菩薩金剛の大衆あり、此の諸の大衆の諸根相好亦復無邊なり、胡麻油の如くして法界に遍滿し中に於いて空際の處なし又國王に大庫藏あり、若し須ひて人に示すときは則ち自在に開發して之を陳布するが如し、故に莊嚴藏と曰ふなり。復次に諸の大衆は、但し佛の威神力を以つての故に是くの如くの不思議の境界を見ることを得、如來若し加持を捨つるときは卽ち現前せず、其の自心の限量の能く及ぶ所にあらず、如し行者內に般舟三昧を修し外に神力護持を蒙るときは能く父母生身を以つて十方の佛を見ること晴夜の雲なきに仰いで衆星を觀るが如し、法音を聽聞することも了了無礙なり然も此の境界は行者の心淨に由るが故に生ずるか、佛の加被に由るが故に生ずるか、若し內心に由るといはゞ卽ち是れ自性より生ず、若し佛力に由るといはゞ卽ち是れ他性より生ず、ことゞくく皆外道の論義に異ならず、自他無なるを以つての故に和合も亦無なり、又復因緣無うして成就することを得るにあらず、何を以つての故に內因外緣隨つて闕する所あれば卽ち現前せず故に當に知るべし、是くの如くの莊嚴の相は顯るゝときも所從來なく、隱るゝときも亦所去なし、畢竟平等にして如を出でざるが故に、經に非從毗盧遮那佛身或語或意生一切處起滅邊際不可得而毗盧遮那一切身業一切語業一切意業一切處一切時於有情界宣說眞言道句法といふ、これは佛の莊嚴藏を轉釋するなり、無盡無邊際なる所以は、如來の遍一切處常住不滅の身に異ならざるを以つてなり、常に

起滅なしと雖も而も能く一切の三業を以つて普く十方三世の一切時處に於いて最實の道を說き、群生を敎化し其の心を軌匠し佛道に至らしむ。經に又現執金剛菩賢蓮華手菩薩等像貌普於十方宣說眞言道淸淨句法所謂初發心乃至十地次第此生滿足緣業生增長有情類業壽種除復有牙種生起といふは、又前の相を廣するなり。言く但し佛身を示現して十方一切の世界に充滿するのみにあらず、所現の金剛菩薩等の身も亦復一切處に遍せり、且十佛刹微塵數のもろ〳〵の執金剛菩薩等の身口心印差別不同なるが如く、是くの如く一一の本尊像類の眷屬も皆毗盧遮那の如く十方一切世界に充滿して因陀羅網の互に相妨げざるが如し、今略して三聖者を擧げて以つて稱首と爲す、執金剛は金剛智慧門に對する降伏の方便なり、菩賢は如如法身門に對する寂災の方便なり、觀音は蓮華三昧門に對する增益の方便なり此の三點を擧ぐれば則ち無量不思議の妙用皆已に其の中に攝在す、故に特に之を言ふ、云ふ所の等とは乃至諸天八部五通の神仙なり、外現の漫荼羅の表示する所を以つて例して知んぬべし。是くの如く等の種種の因緣無數の方便普門應現して群生を敎化す、深淺不同にして麁細異なることありと雖も、然も其の實事を究むれば秘密加持にあらざることなし、各能く如來の淸淨知見を開示す、若し是くの如くの實相印を離れぬれば、餘は皆愛見所生なり、天魔外道のために諸の營侶と作る、豈に名けて淸淨句義とすることを得んや。次に又釋して所謂といふ、淸淨句とは卽ち是れ頓覺成佛神通乘なり、餘乘の菩薩の如きは無上菩提を志求し種種に勤苦して身命を惜まず無數阿僧祇劫を經て或は成佛するあり或は成佛せざるものあり、今この眞言門の菩薩は若し能く法則を虧かずして方便修行するときは乃至此の生の中に於いて無盡莊嚴加持の境界を逮見す、但し現前するのみにあらず、若し佛地に超昇して卽ち大日如來に同せんと欲はば亦致しぬべし。復次に行者初發心のときに阿字門に入ることを得るときは卽ち是れ如來金剛の性より牙を生ず、當に知るべし此の牙一たび生じて運運增進して更に退の義なし、乃至菩提を成ずれば行として增すべきことなし、然して後に停息す、故に次第此生滿足といふ、此の中の次第とは梵音に不住の義、精進の義、遍行の義あり、謂く初發心に菩薩の位に入らんと欲ふが故に此の眞言法要に於いて方便修行して初地に至ることを得、爾の時に無所住を以つて進心息まず第二地を滿せんが爲の故に復眞言法要に依つて方便修行して第三地に至ることを得、爾の時に無所住を以つて進心息まず第四地を滿せんが爲の故に復眞言法要に依つて方便修行して五地に入るこ

とを得、是くの如く次第に乃至十地を滿足するまで唯し一行一道を以つて正覺を成ず、若し異の方便門に於いて密意を開顯すれば亦皆是くの如くの寶乘を離れざるなり、緣業生とは謂く有情癡愛の因緣の爲に身口意の種種の虛妄不淸淨の業を造つて是くの如くの業に乘じて六趣の身を生じ輪廻を增長して備に諸苦を受く、今平等の三業淸淨の慧門を修すれば、一切の蘊の阿賴耶の業壽の種子皆ことごとく焚滅して虛空無垢大菩提心に至ることを得、一切如來平等の種子悲藏の中より法性の牙を生じ乃至莖葉花果もろ〳〵の法界に遍滿して萬德開敷の菩提樹王を成ず、然も四不生の義を以つて之を觀ずるに都べて所起も無く亦起處も無し、當に知るべし此の生は卽ち是れ大空生なり、故に有情類業壽種除復有牙種生起といふ復次に如來所現の十佛刹微塵數等の諸の善知識及び法界門假令次第に觀聽せば則ち無量無邊阿僧祇劫にも周遍すべからず、佛日の加持を以つての故に會坐の頃に於いて皆悉く現前せり、卽ち是れ將に此の經を說かんとして不可思議の神通の瑞相を示す、文殊師利、白毫所照の萬八千土の諸の菩薩の種種の因緣は皆これ菩薩の道を行ずと觀見して卽ち諸佛將に開權顯實して法華經を說かんと欲すと知るが如く、當に知るべし金剛手等も亦復是くの如し、普く加持世界にして唯し平等の法門を說くを見て、卽ち如來將に遍一切乘自心成佛の敎を演べんとすと知る、故に下の文に問ふところ此れに乘じて生ずるなり。

爾時執金剛秘密主於彼衆會中坐白佛言世尊云何如來應供正遍知得一切智々乃至如是智慧以何爲因云何爲根云何究竟とは、如來自證の智は設ひ神力加持を以つても亦人に示すべからず、前に奮迅示現無盡莊嚴藏といふは皆外用の迹のみ、智者その條末を見て則ち其の宗本を喩ること象迹の衆群に超絶して其の踊踐するところ倍復深廣なるを觀て其の形を覩ずと雖も當に此の象の身力必ず大なりと知るべきが如く、又迅雷の雨を澍いで能く鳥獸をして震死せしめ、百川奔湧して山を懷ね陵に襄るとき其の本を測らずと雖も當に此の龍は威勢必ず大なりと知るべきが如く、今もろ〳〵の大衆も亦復是くの如し、如來無盡の身口意能く一時に普く法界の衆生に應じて妙に根宜に合ひ曲に佛事を成ずと觀るを以つて則ち知んぬ、如來の智力は必ず一念に於いて普く群機の本末の因緣を鑑み究竟して無礙なり、照俗の權すら尙し爾なり、其の契實の境界當に復云何ん、若し法然らざれば則ち微迹の尋ぬべきあらんや。我れ已に盡く〳〵觀る然るを是の法は何に從つて之を得と知らず、故に執金剛手衆會の疑心に因つて、佛に問うて言さく云何が如來應供正

遍知この一切智智を得たまへると、梵本に怛他揭多といふは怛他は是れ如の義なり、揭多は是れ來の義、知解の義、說の義、去の義なり、諸佛の如實の道に乘じて來つて正覺を成じたまふがごとく、今の佛も亦かくの如く來たまふが故に如來と名づく、一切の諸佛、法の實相の如く知解し知り已つて亦諸法の實相の如く衆生の爲に說きたまふ、今の佛も亦かくの如し、故に如實知者と名づけ、亦は如實說者と名づく、一切の諸佛かくの如くの安樂の性を得て直に涅槃の中に至れり、今の佛も亦かくの如く去りたまふ故に如去と名づく、釋論には具に四義を含めり然るを古譯には多く如來といひ、有部の戒本には如去といふ、阿闍梨の意は如去如說を存せり、今且く古きに順じて題するなり、梵本に阿羅訶といふは、阿羅は是れ煩惱なり、訶は是れ害の義、除の義なり、釋論には之を殺賊と謂ふ、佛は忍進の鎧甲を以つて持戒の馬に乘り、定の弓、慧の箭をもて外には魔王の軍を破し內には煩惱の賊を滅す、故に以つて名と爲す、又阿羅訶は無明の殼皮脫るるが故に、をば生と名づく、謂く佛心の種子後世田の中に生ぜず。復次に阿羅訶といふは是れ應受供養の義なり、是くの如くの功德あるを以つての故に天人最上の供養を受くべし、故に以つて名と爲すなり。梵本に三藐三佛陀といふは、三藐をば正と名づけ、三をば遍と名づけ、佛陀をば知と名づく故に正遍知と曰ふなり、釋論に云く若し人あつて何を以つての故にか、但し佛のみ如實說如來如去の故に最上の供養を受くべきやといはば、佛は正遍智慧を得るを以つての故なり、正をば諸法の不動不壞の相に名づけ、遍をば一法二法とするにあらざるに名づく、故に悉く一切の法を知つて餘なきを以つて是れを三藐三佛陀と名づく、然も此の宗の中には佛陀を覺と名づく、是れ開敷の義なり、謂く自然の智慧に由つて遍く一切の法を覺ること盛に開敷せる蓮華の點汗あること無きが如し、また能く一切衆生を開敷す、故に佛と名づく。

梵に薩婆若那といふは、卽ち是れ一切智智なり、釋論にいはく薩婆若多とは卽ち一切智なり、一切は謂く名色等の無量の法門に各一切の法を攝す、是くの如く、無量の三四五六等乃至阿僧祇の法門に一切の法を攝す、是の一切の法の中の一相異相、漏相、非漏相、作相、非作相等と一切の法の各各の相、各各の力、各各の因緣、各各の果報、各各の性、各各の得、各各の失とを一切智慧力の故に一切世の一切種をことゞく遍く知解す、これを薩婆若と名づく、今一切智智といふは卽ち是れ智中の智なり、但し一切種を以つて遍く一切の法を知るのみにあらず、

亦この法の究竟實際常不壞の相は不增不減にして猶し金剛の如しと知る、是くの如くの自證の境は說者も無言なり、觀者も無見なり、手中の菴摩勒果の他人に轉授すべきには同せざるなり、若し言語を以つて人に授くべくは、釋迦菩薩、定光の授決を蒙つしとき卽ち成佛すべし、何が故ぞ具に方便を修し要ず無師自覺を待つて方に佛と名づけんや、又目に世人を覩るに刀杖の爲に傷けらる、復その受苦を信じて疑惑すべきことなしと雖も然も種種に說かしむるに終に證知せず、若し自身に觸受するとき乃ち明了なることを得るが如しまくのみ。問の意の言く、云何が我等をして是くの如くの自覺の慧を逮得せしめん、云何が此の慧を得已つて能く無量の衆生の爲に廣演し分布して種々の趣、種々の性欲に隨つて、種種の方便道をもて一切智智を宣說せしむ、所謂無量乘を安立し、無量の身を示現し各各に彼の言音に同じ彼の威儀に住せん、而も此の一切智道は猶し同一味なり所謂如來の解脫味なり、此の妙方便は復云何が得んとなり、この中の種種趣とは、梵には娜衍といふ、亦は名づけて道と爲す、下に大乘道等といふ義同なり、毗婆沙には五道ありと說き、摩訶衍の人は多く六道を說く是くの如く廣く衍ぶれば乃至この世界の中に已に卅六俱胝の衆生趣あり、何に況んや十方の一切世界をや。性欲とは、欲をば信喜好樂に名づく、孫陀羅難陁は五欲を好み提婆達多は名聞を好む等との如く乃至もろ〳〵の得道の人に亦各好むところあり、大迦葉は頭陁を好み、舍利弗は智慧を好み、離波多は坐禪を好み、優婆離は毗尼を知らんと好み、阿難は多聞を好む等との如く當に廣く之を說くべし、性をば積習に名づく、相は性より生ず、欲は性に隨つて行を作す、或時には欲より性を爲す、欲を習つて性を成ず、性をば染心に名づく、染心、事を爲すに欲の名あり、緣に隨つて起る、この事は釋論の中に具に明せり、種種方便道とは、龍樹の云ひたまはく般若と方便と本體これ一なり、而も所用に異あり、譬へば金師の巧方便を以つての故に金を以つて種種の異物を作るに皆これ金なりと雖も而も各異名あるが如く、今毗盧遮那も亦復かくの如し、能く遍一切處の眞金の智體を以つて種種の乘を造りたまふ、復次に此の中の問の意は卽ち是れ大悲胎藏漫荼羅を發起するなり、薩婆若平等の心地に於いて諸佛菩薩乃至二乘八部等の四重法界圓壇を畫作す、この一一の本尊の身語心印は皆これ一種の差別乘なり、且く人あつて五通智道を志求するが如し、卽ち大悲胎藏より韋陁梵志の形を現じて爲に瞿曇仙等の眞言行法を說きたまふ、行者精勤すること久しからずして此の仙の身を

成じ更に方便を轉じて卽ち毗盧遮那の身と成る、是くの如く或は佛身を現じて種種の乘を說き乃至非人の身を現じて種種の乘を說く隨類の形聲ことゞく是れ眞言密印なり、或は久、或は近、毒鼓の因緣にあらずといふこと無し、故に經に皆同一味所謂如來解脫味といふ、然る所以は一切衆生の色心の實相は本際より已來常に是れ毗盧遮那の平等智身なり、是れ菩提を得るとき强に諸法を空じて法界と成さしむるにあらず、佛、平等の心地より無盡莊嚴藏大漫荼羅を開發し已つて還つて用つて衆生平等の心地の無盡莊嚴藏大漫荼羅を開發したまふ妙感妙應皆阿字門を出でず、當に知るべし感應の因緣所生の方便も亦復阿字門を出でず、譬へば大海の中の波濤の相激して迭に能所たれども然も亦同一味なるが如し、所謂鹹味なり。

復次に執金剛、佛の神力を承けて大悲胎藏の秘密方便を發起せんと欲ふが爲の故に、復五種の譬喩を說く所謂虛空地水火風なり、初の句に譬如虛空界離一切分別無分別無無分別如是一切智智離一切分別無分別無無分別如是一切智智離一切分別無分別卽ち是れ毗婆沙の義なり、虛空は過も無く德も無し、今如來の智身は一切の過を離れて萬德成就す、云何が相喩することを得るや、但し其の少分相似を取つて以つて大空に況すまくのみ、此の中の相況に三義あり、一には虛空は畢竟淨の故、二には無邊際の故、三には無分別の故なり、一切智心の性も亦かくの如し、故に世間易解の空を以つて難解の空に譬ふるなり、初に離一切分別といふは、梵には劫跛といふ、次に無分別といふは、梵には劫跛夜帝といふ、重ねて言ふ所以は、是れ分別の上に更に分別を生ずる義なり、例せば尋伺の略觀の時をば尋と名づけ、諦察をば伺と名づくるが如く、又眼識の生ずるときは麁分別あり、次に意識生ずれば是れ細分別あるが如し、舊譯に或は云く劫跛を以つて妄執と爲す、喩の意の云く猶し虛空は妄執分別なきを以つての故に分別も無く亦無分別も無きが如し、又虛空は種種の顯形色の相を離れて造作するところ無けれども而も能く萬像を含容す、一切の草木これに因つて生長し有情の事業これに依つて成ずることを得るが如く佛智の虛空も亦復是くの如し、一切の相を離れて常に分別起作なしと雖も而も無量の度門種種の妙業皆成辦することを得、故に以つて喩と爲す、第二の句に譬如大地一切衆生依如是一切智智天人阿修羅依といふは、世間の百穀衆藥卉木叢林その性分に隨つて無量に差別なれども皆大地に從つて而も根牙を生じ乃至莖葉花果次第に成就し一切衆生の爲に依止處と作り之を養育すれども亦是の念を作

さず、我れ今一切世間を荷負すと、恩德を念せず、勞倦あること無く、これを增すれども喜ばず、これを減ずれども憂へず深廣にして測り難く傾動すべからざるが如く、一切智地も亦復かくの如し大悲漫荼羅の一切の種子の出生する所なり、卽ち此れ諸乘の無量の事業の所依止の處なり、生死涅槃に於いて其の心平等なり世間の八風も動搖すること能はず、是くの如く等の少分相似を以つての故に以つて喩と爲す。第三の句に譬如火界燒一切薪無有厭足如是一切智智燒一切無智薪無厭足といふは、譬へば火種の假使薪を積んで世界に充滿せること皆須彌山王の如くして次第に之を焚けども怯弱あることなく是の念を作さず、我れ當に爾所の薪を燒き爾所の薪を燒かざるべしと、熾然息まず勝進して厭ふこと無し、要ず焚く所盡き已んぬれば、然して後に隨つて滅するが如く、如來の智火も亦復かくの如し、一切の戲論煩惱の薪を燒き盡くし乃至緣待皆盡きぬれば卽ち此の慧光も亦所依なし、復次に世間の火は貴賤同じく用ふる所なり、能く暗夜に於いて照明を作して迷惑顚墜のものに咸く正路を得しめ、又ことごとく能く一切の諸物を成就するが如く、是くの如く一切智火の聖者異生に平等に之あり、無始の大夜の中に於いて諸の行人をして如實の道を見しめ、次第に一切の佛法を成就す、故に以つて

喩と爲す。第四の句に譬如風界除一切塵如是一切智智除去一切諸煩惱塵といふは、大風の起るとき烟雲塵霧一切消除して大虛澄廓にして三辰炳現し蔚烝熱惱の衆生皆清涼なることを得、能く卉木藂林をして開榮し增長せしめ亦能く一切の物類を摧壞するが如く、又風性の遍く所依なうして自在に旋轉し能く罣礙することなきが如く如來の慧風も亦復かくの如し、一切の障蓋煩惱の遊塵を滌除して涅槃清涼の法性を證せしめ、又復能く一切世出世間の善法をして增長せしめ、無明の大樹を摧壞して其の根本を拔く而も此の無障礙力は都て所依なし、故に以つて喩と爲す。第五の句に譬如水界、一切衆生依之觀樂如是一切智智爲諸天世人利樂といふは、水大の高より下に赴いて饒益するところ多く、能く草木を潤して華菓を生じ、又復本性清潔にして垢も無く濁も無く悉く能く飢渴の衆生を滿足せしめ、諸の滓穢を洗ひ、熱惱を蠲除し澄深難入にして測量すべからず、坑埳の處に於いて性皆平等なるが如く、如來の智水も亦復かくの如し、眞法界より世間に流趣して諸の等持を潤し助道の法を生じて大果實を成じ群生を利益す、體、煩惱なきが故に清潔なり、能く諸惑を離るるが故に無垢なり、一相にして異にあらざるが故に無濁な

り、諸そ之を得ることあれば思願ことゞく息み、清涼の定を獲て塵勞を洗除し湛寂にして難思なり平等の性を證す、故に以つて喩と爲すなり。復次に金剛手この五喩を說くことは卽ち是れ下の文の五字の義を發起す、𑖨阿字門を地と爲し、𑖩嚩字門を水と爲し、𑖪羅字門を火と爲し、𑖫訶字門を風と爲し、𑖬佉字門を空と爲す、又世間の地水火風を緣と爲し虛空礙へずして然して後に生ずることを得隨つて一緣も闕すれば終に增長せざるが如く、一切智性の如來の種子も亦復かくの如し、卽ち一切智門の五義を用つて自ら衆緣となして能く菩提常住の妙果に至る、所謂不可思議不生不滅の因緣なり、金剛手、如來の獨一法界加持の相を觀知して心に惟忖するところ必ず將に是くの如くの法門を說かんとすと知るが故に、先づ其の功德を喩として大會生解の機を發起し然して後に佛に問ひたてまつる、是くの如くの智慧は何を以つてか因とし、云何が根とし、云何が究竟とするやと此れより已後は如來智印を以つて卽ち其の心を定め、廣く分別して說きたまふ、例せば彌勒菩薩の佛の神通の瑞を覩て、卽時に憤憤悱悱として心に疑ふところあり、是の道場所得の法を說かんとや爲る、菩提記を授けんとや爲ると、文殊、名體を發揮して指して妙法蓮華といふ、然して後に如來印するに實相を以つてし機に乘じて演說して動執の徒をして疑網を離るゝことを得しむるが如く、譬へば、春陽の始に萠種甲坼け、雷風鼓動し、時雨潤灑すれば孚殼を離ることを得、苗よく出生するが如し、若し無機の人は、則ら際會に遇ふと雖も深益を發起することを能はざるなり。

大毗盧遮那成佛經疏卷第一　終

大毗盧遮那成佛經疏卷第一

沙門　一行阿闍梨記

入眞言門住心品第一の餘

毗盧遮那佛卽告持金剛秘密主言善哉善哉執金剛善哉金剛手汝問吾如是義汝當諦聽極善作意吾今說之乃至諸法無相謂虛空相とは執金剛手秘密主豫め如來加持の深意を測り、又能く時の衆を發起して生解の因緣を作すを以て仰いで聖心を測り機會を失せざるが故に重ねて善哉善哉と言たまふ。我れ一切の天人沙門婆羅門乃至淺行の諸の菩薩を觀るに能く世尊の前に於いてかくのごとくの問ひを發すもの無し、所以いかんとなれば此の三句の義の中にことゞ〳〵く一切の佛法秘密神力甚深の事を攝するを以ての故に、復歎じて善哉金剛手汝能く吾れに是くのごとくの義を問ふと言たまふなり、如來の善哉の言音に加持せらるゝを以ての故に其の時に金剛手無量の功德倍增す、復所受の法に於て終に漏失なきことを明して次に卽ち誡めて汝當諦聽極善作意吾今說之と言たまふ、亦未來の弟子の爲に此の囑へを明す耳深心をもて法を受くるの儀式なり、故に釋論に云く若し人心善直信ならば

この人は法を聽くべし、若しこの相ならば則ち解すること能はじ偈を說いて云ふが如し、聽者端身にして渴飲の如くし一心に語義の中に入り踊躍して法を聞き心に悲喜せん、かくの如くの人には爲に說くべしと、及び無盡意經には用心聽法に廾の功德あり當に廣く之を說くべし。

經に佛告金剛手菩提心爲因大悲爲根方便爲究竟といふは猶し世間の種子の四大衆緣に籍るが故に根を生ずることを得、是くの如く次第に乃至果實成熟するを名けて究竟と爲るが如きは然も中智を以てこれを觀ずるに畢竟して不生不滅なり、この故に因果の義成ず、若し法然らずんば生滅斷常の相あつて則ち戲論に墮し皆ことゞく破すべし因果の義成せず、今行者心の實相を觀ずることも亦復かくのごとし、一切の戲論を出過して淨虛空の如し內證の所行に於いて深信の力を得薩婆若の心堅固にして動せず業受の生を離れて眞性の生を成就す、萬行の功德これより增長す、故に菩提心爲因と曰ふ、此の菩提心は後の二句の因たり、若し生死の中の所殖の善根に望むれば則ち名けて果とす、佛法の前相を觀るを以ての故に、譬へば人あつて善知識の言を聞くに汝が今の宅中に自ら無盡寶藏あり、自ら方便を勤修して而もこれを開發せば一國に周給すとも常に匱乏なかるべしと云

ふごとし、彼の人聞き已て卽ち諦信を生じて說の如く行じ乃至功を施すこと已まず、漸く前相を見る、其の時に寶藏の功德に於いて疑惑の心を離れて殊勝の加行を發起するに堪能なるが故に、菩提心は卽ちこれ白淨信心の義なり、釋論に亦いはく佛法の大海には信を能入とす、梵天王の轉法輪を請せし時、佛偈を說いて言たまふがごとし、我れ今甘露味門を開かん、若し信を生ずるものあらば歡喜を得んと、此の偈の中には施戒多聞忍進禪慧の人能く歡喜を得とは言はず、獨り信慧の人をのみ說けり、佛意かくの如し、我が第一甚深の法は微妙にして無量無數不可思議なり、不動不倚不着にして無所得の法なり、一切智人にあらずば則ち解することは能はじ、故に信力を以て初めとす、慧等に由つて能く初めて佛法に入るには あらずと、かくの如くの淨信心をして堅牢增長ならしめんが爲に、經の中に次に大悲爲根と說く、根はこれ能執持の義なり猶し樹根の莖葉花菓を執持して傾拔せざらしむるが如し、梵音には悲しみを謂つて迦盧拏とす、迦はこれ苦の義なり、盧拏はこれ剪除の義なり、慈は廣く嘉苗を植うるが如く、悲は草穢を芟ひ除くが如し故にこの中に悲といふは卽ち兼ねて大慈を明すなり、且く行者供養を修するときの如きは、若しは一花或は塗香等をたてまつるに卽ち遍一切處の淨菩提心を以て

供養雲を興し普く佛事を作して悲願を發起し群生に廻向して一切の苦を拔き無量の樂を施す、自の善根と及與如來の加持と法界力とに由るが故に所爲の妙業皆成就することを得、卽ちこれ普く一切智地と乃至無餘の有情界とに於いて皆ことごとく根を生ずるなり、行者無住の心を以て修するところの萬行に隨つて卽ち大悲の地界に執持せらるゝに由るが故、大悲の火界に溫育せらるゝが故、大悲の水界に滋潤せらるゝが故、大悲の風界に開發せられて生ずるが故、大悲の虛空障礙せざるが故に、其の時に無量の度門任運に開發すること由し牙莖枝葉の次第に莊嚴するが如し、卽ちこれ一切の心法に於いて因緣を具足するの義なり、方便爲究竟とは謂く萬行圓極して復增すべきことなく、果三密の源なり、又淨菩提心とは猶し眞金の本性明潔にしてもろ〳〵の過患を離れたるが如し、大悲は工巧を習學して諸の藥物を以て種々に鍊冶し乃至鏡徹柔輭にして屈申自在なるがごとし、方便は巧藝成就して造作するところあれば意に隨つて皆成ず、規製權に中つて衆伎に出過せり、故にその得意の妙は以て人に授くべきこと難きが如し。摩訶般若に明すところの六度十八空三昧道品惣持門等のごときは皆大悲の句の中に入る卽ち彼の萬行所成の一切智智の果を說い

て方便と名く、内に方便を具するに由るが故に、方便の業は卽ちこれ利他なり。これを以て梵音に鄔波娜といふは亦發起と名く、種子より果を生じ果還て種となるが如し、故に以て名となす。經に祕密主云何菩提謂如實知自心といふ、卽ちこれ如來の功德寶所を開示するなり、人の寶藏を聞いて意を發して勤求すといへども、若し其の所在を知らざれば進趣するに由なきが如し、故に復指して如上に明すところの第一甚深微妙の法は、乃至一切智人にあらざれば則ち解すること能はじとは、この法は何のところよりか得るや、卽ち是れ行者の自心なりと言たまふ耳、若し能く實の如く觀察して了了に證知するこれを成菩提と名く、それ實に他に由て悟らず他に從つて得ず。問うて曰く若し卽心これ道ならば何が故ぞ衆生生死に輪迴して成佛することを得ざるや。答へて曰く實の如く知らざるを以ての故に所謂愚童凡夫若しこの法を聞けば少しき能く信ずることあり、識性の二乘は自ら觀察すといへども未だ實の如く知らず、若し實の如く自ら知るは卽ちこれ初發心の時に便ち正覺を成ず、譬へば長者の家の窮子のごとし、若し自ら父を識る時に豈にまた是れ客作の賤人ならんや。その時に行者正しく心の實相を知るが故に一切の法はことごとく皆甚深微妙にして無量無數不可思議なり不動不倚不著にして都べて所得なし畢竟じて菩提の相の如しと見る故に、經に復た秘密主是阿耨多羅三藐三菩提乃至彼法小分無有可得といふ、無上正遍知の義は前に已にこれを說くこの中に小分と言ふは、梵には阿耨といふ卽ちこれ七微合成なり、從緣生の色に於いて最も微小なりとす、故に以て喩とす、彼法と言ふは此の無相の菩提心を離れて外に更に一法も無きなり、經の中に次に因緣を說いて何以故虛空相是菩提無知解者亦無開曉何以故菩提無相故といふは、譬へば虛空の一切處に遍じて畢竟淨なるが故に一切の相を離れて動も無く、分別もなく變易すべからず、破壞すべからざるがごとし、かくの如く等の小分相似を以ての故に、以て無相の菩提心に喩ふ、然もこの中に復無量無邊の秘密甚深の事あり實には世間の虛空の能く遍喩するところにあらず、冀くはもろ〳〵の學者意を得て筌を忘れよ耳、又虛空の戲論分別を遠離するが故に知解の相も無く開曉の相もなきが如く諸佛自證の三菩提も當に知るべし亦爾なり唯しこれ心自ら心を證し、心自ら心を覺る、この中には知解の法もなく、知解のものもなし、始めて開曉すべきにあらず、亦開曉のものもなし、若し小分の能所を分別して猶し微塵の如くも卽ち法と非法との相を取らば我人衆生壽命を離れず、豈に名けて金剛の慧となすことを得んや。復次に

經の中に自ら轉釋して何以故菩提無相故と言たまふ釋論にいふが如し、佛の知慧は清淨なるが故に諸觀の上に出で、諸法の常相無常相有邊相無邊相有去相無去相有相無相有漏相無漏相有爲相無爲相生滅相不生滅相空相不空相を觀せず、常に清淨にして無量なること虛空の如し、この故に佛智は無礙なり、若し生滅を觀ずるものは不生滅を觀ずることを得ず、不生滅を觀ずるものは生滅を觀ずることを得ず若し生滅實ならば不生滅は不實なり、若し不生滅實ならば生滅は不實なり、かくのごとく等の諸觀皆爾なりや、是くの如くの淨菩提心は諸觀を出過して衆相を離れたるを以ての故に一切の法に於いて罣礙なきことを得たり、譬へば虛空の相は亦無相なるが故に萬像皆悉く空に依れども空は所依なきが如く、是くの如く萬法皆淨心に依れども淨心は適に所依なし卽ちこの諸法も亦復菩提の相のごとし所謂淨虛空の相なり故に經に復祕密主諸法無相謂虛空相と云たまふなり。爾時金剛手復白佛言世尊誰尋求一切智誰爲菩提成正覺者誰發起彼一切智智佛言祕密主自心尋求菩提及一切智何以故本性淨故乃至無量功德皆悉成就といふは、時に執金剛、佛の所說の義の薩婆若の慧は唯しこれ自心なり乃至小法として此の心を出でたるものあることなしと聞いて未來の衆生に疑惑を斷ぜしめんが爲の故に

而も佛に問うて言さく菩提心をば名けて一向志求一切智智とす、若し一切智智卽ちこれ菩提心ならば此の中に誰をか能求とし、誰をか所求とし、誰をか可覺とし、誰をか覺者とせん、又復心を離れて外に都べて一法なくば誰れか能く此の心を發起して妙果に至らしむるものぞ、若し法因緣あること無うして而も成ずることを得といはば一切衆生亦方便を假らずして自然に成佛すべし、故に佛答へて祕密主自心尋求菩提及一切智何以故本性淨故と言たまふ、衆生の自心の實相は卽ち是れ菩提なり有佛無佛常に自ら嚴淨なりといへども然も實の如く自ら知らざるが故に、卽ち無明なり無明顚倒して相を取るが故に愛等のもろ〳〵の煩惱を生ず煩惱に因るが故に種種の業を起して種種の道に入り種種の身を獲、種種の苦樂を受くること蠶の絲を出すに所因なけれども自ら己れより出して而して自ら纏裹して燒煮の苦を受くるがごとし、譬へば人間の淨水を天鬼の心に隨つて或は以て寶とし或は以て火として自心自ら苦樂を見るがごとし、之れに由て當に知るべし、心を離れて外に一法あることなし、若し瑜伽行人正しく三法の實相を觀ずるとき卽ちこれ心の實相を見るなり、心の實相とは卽ちこれ無相の菩提なり、亦一切智智と名く、復もろ〳〵の因緣を離れたりと雖も亦因なうして而も成就を得るにあら

す、復次に世尊衆生をして實の如く自心を知らしめんと欲ふが故に更に方便を以て分別し演說したまふ、然る所以は若し但し自心は不生不滅なりと言ふは所因なきを以ての故に、義則ち解しがたし、故に先づ其の著處を示す、經に心不在內不在外及兩中間心不可得といふは、摩訶般若の如きは、無量の門を以て諸法の實相に入る、今その宗要を擧げんと欲して但し內外の十二處を觀ずるに卽ち一切の法を攝す、行者の心無始より來た多く內法に於て心相に取着するが故に先づ內の六處に於いて卽離相等の方便を以て一一に諦觀するに心不可得なり、無生無相處所あることなし、而もこの念を作す、この心或は外にありや、復外の六處に於いて實のごとく之を觀ずるに心亦生相無うして處所あること無し、猶し錯誤せんことを恐れて更に合して之を觀ずるに兩中間に於いても亦不可得なり、卽ちこの心の實性は本より無生無滅なりと悟りぬれば畢竟常淨にして戲論雲披る、譬へば珠力の故に水淸し水淸きが故に珠現ず定めて餘處より來らざるが如し。

經に秘密主如來應正等覺非靑非黃非赤非白非紅紫非水精色非長非短非圓非方非明非暗非男非女非不男女と云ふは前には一切の法に約して心の實相を明し已んぬ、今復眞我に約して心の實相を明す、此の宗に辯ずる義は卽ち心を以て如來應正等覺とす、所謂內心の大我なり、有る一類の外道の如きは自心を了せざるが故に而もこの言を作す、我れ眞我を觀るに其の色正しく靑し餘人は見ること能はざる所なりと、或るが言く正しく黃なり正しく赤なり、或が言く鮮白なり、或るが言く臙脂の色の如し、今義をもて紅紫といふ、或るが言く我れ眞我を見るに其の相極めて長く極めて短く乃至男子の相等の如し、唯し此れのみ是れ實なりと餘は皆妄語なり、然れども此れ等の衆相はことごとく緣より生じて自性あることなし、云何が眞實の我と名くることを得んや。是くの如くの種種の執に對するが故に佛如來應正等覺は靑色等にあらずと說きたまふ、所以何となれば、是の靑相は畢竟じて不生なるが故に則ち非靑とす、靑の實相は不壞なるが故に而も亦非靑にあらず當に知るべし、如來應正等覺は一定の相として說くべきこと無く亦是くの如くの諸相をも離れず、有る外道阿闍梨の如きは黑月の夜に於いてもろ〳〵の弟子を引いて大象の前に至つて之に告げて言く我れ今に於いて汝に眞我を示さんと、時に彼の衆人或は目を以て觀、或は身を以て觸る、其れ形を視るものは則ち言く我れ今已に眞我を識んぬ、その色甚だ白し杭然として高大なりと、それ牙に觸るゝものは則ち言く眞我は戈のごとしと、耳に觸るゝものは則ち言く箕の如しと、足

に觸るゝものは則ち言く柱のごとし、尾に觸るゝものは則ち言く索のごとし、各遇ふところに隨つて情計不同なり、復更相に是非すといへども終に其の眞體を識ること能はず、若し瑜伽行者、心明道を開發するとき心王の如來を照見することを大明の中に目に衆色を觀るが如くして則ちかくの如くの諍論を生せざるなり。次に祕密主心非欲界同性非色界同性非無色界同性非天龍夜叉乃至人非人趣同性といふは、亦これもろ〳〵の妄執に對して自心の變易なきことを顯示するなり、故に說いて此の心は三界と同性にあらずと言ふ、有る諸の外道の計すらく我性は則ち欲界に同なり、或は色無色界に同なり、乃至非想處は卽ちこれ涅槃なりと謂ひ、或は梵王毗紐天等、一切の法を生ずといふ、然もこの三界は皆ことゝく衆緣より生ず其の自性を求むるに都べて不可得なり、況んや心性をして彼の性に同ぜしめんや、次に廣く無量のもろ〳〵の衆生趣を分別して一一にこれを言ふに皆彼れと同性にあらず、譬へば虛空の中より八功德水を雨すに一味淳淨なれども所受の器に隨つて種種に差別なるが故に、或は辛く或は酸く或は溫に或は濁れり、然も八功德の性は彼れと同せず、溫解け濁息むときには淸凉なること故の如くして未だ曾つて變異せざるが如し、又眞陁摩尼の自定相なうして物に遇へば卽ち其の色を同すれども然も其の寶性は彼れと同せず、若し彼れと同性ならば是の色緣に隨つて生滅するとき寶性も亦生滅すべきが如し。復次に世尊將に大悲胎藏生漫荼羅を開示せんと欲ふが故に、先づ正しく心の實相門を開示す、何を以ての故に行者の本尊三昧の中に顯形男女等の相及び普門示現の六趣の身ありと說くが如きは、恐らくは諸の行人、心の因緣生を了せざるが故に寶王の眞性に於いて戲論を生ぜん、故に佛說いて如來は靑にあらず、黃にあらず、乃至この心は三界六趣と同性にあらずと言ふ、もし能くかくのごとく觀察するときは則ち菩提心を障へざるなり。

經に又祕密主心不住眼界不住耳鼻舌身意界非見非顯現といふは前に三處にあらずと說くに已に一切の法を攝すれども未悟のもの〻爲に復一一に法に歷て分別す、若し心諸趣と同性にあらずんば眼界等に住すとやせん、乃至意界に住するか、若し心眼界に住すといはば眼は衆緣より生ずるが故に性相自ら空なり、住處あることなし、況んや復心の實相は眼の中に住在せんや眼界の如きは乃至陰入の諸法も皆廣く說くべし、復次に前に已に種々の外道を破す、今諸法に住せずと說くことは邊見の聲聞を破せんが爲の故なり、犢子阿毗曇の中に說くがごとし、譬へば

四大和合して眼法あるがごとく、是くのごとく五衆和合して人法あり、この人法は不可説藏の中にありと、説一切有道人の言く神人は一切の法門の中に求むるに不可得なり、兎角龜毛の常に無なるがごとし、而して陰界入は實に自性ありと是くの如くの戯論の法を以ての故に其の心を識らず、若し能く心は諸法に住せずと觀ずるときは則ち心行處なうして戯論皆盡くるなり、非見非顯現とは、有る人の言ふが如し、一切衆生は本より佛知見の性あり、但し無明の翳膜除くとき自ら能く理を見ると、或は有る人の言く是くの如くの常理は造作すべきにあらず、但し纏蓋を除いて雲霧除くとき日輪自ら現ずと皆世諦を以てこれを言ふのみ、若し淨菩提心これ可見可現の法ならば卽ち有相とす、凡そ有相のものは皆これ虛妄なり、云何が能く無上菩提を見む、又經の中に自ら因緣を說けり、何を以ての故に虛空相の心はもろ〳〵の妄執を離れ亦分別なしといふは猶し虛空の畢竟淨なるが故に一切の色像の能く之を染汙するもの無きがごとく心性も亦爾なり、一切の分別の能く之を染汙するもの無し、若し分別なきは卽ちこれ一切の相を離るゝなり。

經に所以者何性同虛空卽同於心性同於心卽同菩提如是祕密主心虛空界菩提三種無二此等悲爲根本方便波羅蜜滿足といふは如上の種種の入淸淨門は皆自心に菩提を求むる義を發明せんが爲めなり、今また結して虛空無垢は卽ちこれ心なり、心は卽ちこれ菩提なり本より同一相にして三名ありと言たまふ耳、卽ち此の一法界心は因緣畢竟して不生なりと雖も、而も因緣の實相を壞せず、不生を以ての故に則ち能所の異なし、不壞を以ての故に亦悲を根本となして方便波羅蜜滿足することを得、卽ちこれ究竟不思議の中道の義なり、經に祕密主我說諸法如是令彼諸菩薩衆菩提心淸淨知識其心といふは、佛已に淨菩提心を開示したまふに略して三句の大宗を明し竟んぬ、卽ち一部の始終を統論するに無量の方便、皆もろ〳〵の菩薩をして菩提心淸淨にし其の心を知識せしめんが爲なり、此の經にいふがごときは當に知るべし一切の修多羅の意皆同く此にあり、釋迦如來所說の法のごときは當に知るべし、十方三世の一切如來の種種の因緣をもて宜しきに隨つて演說したまふ、法も此の三句の法門のためにあらざること無し、究竟同歸して本より異轍なし故に我說諸法如是乃至知識其心といふなり。

經に祕密主云何知自心謂若分段或顯色或形色或境界若色若受想行識若我若我所若能執若所執若淸淨若界若處乃至一切分段中求不可得といふは、世尊前

に已に廣く淨菩提心の如實の相を說きたまふに衆生未だ意を得て懸に悟ること能はざるを以て復方便を作して此の頓覺成佛の入心實相門を說きたまふ、亦十方三世の一切の佛法を決了せんが爲の故なり、一切の經の中に或は諸蘊和合の中に我不可得を說き、或は諸法は緣より生じて都べて自性無しと說くが如きは、皆これ漸次に實相門を開く、彼れに諸法の實相と言ふは卽ち是れこの經の心の實相なり心の實相とは卽ちこれ菩提なり、更に別の理なし、但し薄福の衆生の自ら作佛を信ずること能はざるが爲なり、自ら作佛を信ずるものは甚だ得難しとす、故に世尊且く諸の垢障を淨めしめ其の心を將護して要ず時義をして契合せしめ然して後に爲に卽心の印を說く、今の經は則ち是くの如くにはあらず、直に諸法に約して其の心を識らしむ、所以に秘要の藏とす。

初の句に謂若分段といふは是れ總じて從緣生の法を擧ぐるなり、法の因緣を待つて成ずるは必ず差別の相あるを以ての故に行者當に知つて是くのごとく觀察すべし、今この分段の中には何ものか是れ心なるや、乃至分析し推求するに都べて不可得なり卽ち知んぬ、此の心は衆相を出過して諸の因緣を離れたり、心性は常に是くのごとしと知るを以ての故に、爾の時に一切の諸法自然に心に異ならざるなり、顯色は謂く青黃等なり形色は謂く方圓等なり、境界は謂く六情の所對卽ち六塵なり、人をして解し易からしめんが爲の故に復法に歷て觀察す、今この顯形衆色の中にも何ものか是れ心なるや、色は本より非情なり覺知の相なし、況んや是の中に於いて心として得べきことあらんや、顯形をいふが如きは、當に知るべし一切の色塵も亦是くのごとし、色塵の如きは乃至聲香味觸法も亦是くの如し、行者外塵の中に於いて心不可得なり復內身の五蘊を觀ずるに亦聚沫泡炎芭蕉幻化のごとし、自ら性實を求むるに尙し所有なし、況んや其の中に於いて心あることを得んや、是くの如く麁より細に至り廣を去け略に就くに乃至現在一念の識も亦住時なし、又復衆緣より生ずるが故に卽空卽假卽中なり一切の戲論を遠離して本不生際に至る、本不生際とは卽ちこれ自性淸淨心なり、自性淸淨心といふは卽ち是れ阿字門なり、心阿字門に入るを以ての故に當に知るべし一切の法ことごとく阿字門に入るなり、已に諸法の實相を觀ることを說きつ、次に我想を觀ずることを明す、故に若我若我所若能執若所執若淸淨といふ、如上には諸陰の中に於いて種種の方便をもて心を觀ずるに而も不可得なり、何に況んや我人壽者等の法をや本より以來但し假名のみあり而も其の中に於いて心として得べきことあらん

や、清淨とは卽ち外道の所計なり最極清淨の處を涅槃と以爲へり、長爪梵志の一切の法を受けずして而して是の見をのみ受しが如く今も亦是くのごとし觀空の智慧に取著して是の清淨の想を生ず、卽ち是くの如くの想の中に於いて正く自心を觀ずるに生處あることなきをもて眞淨の菩提心に入ることを得、以上は廣く五陰に對す、次に復十八界十二處乃至一切分段の中に求むるに不可得なりと說きたまふ、陰界入の義は阿毗曇の中に廣く明せり此の三法は已に一切の法を攝すれども復乃至一切分段の中に求むるに不可得なりといふは、卽ちこれ摩訶般若等の中に法に歷て廣く明すものこれなり、陰界入に於いて分析して心を求むるに心不可得なるが如く、當に知るべし六度萬行乃至一切の惣持三昧門の中に種々に心を求むるに亦不可得なり、心不可得なるを以ての故に是の心の常樂我淨非常樂我淨等の相も亦復かくのごとく不可得なり、復次の聲聞の人の初めて陰界入を觀ずるとき陰に卽して我を求め陰に離して我を求むるに皆不可得なり、相在も亦不可得なりその時に八直道の中に於いて遠塵離垢して正法眼生ずるがごとく、眞言門の菩薩も亦是くのごとし、初めて陰界入に於いて心を求め陰に離して心を求むるに皆不可得なり相在も亦不可得なり、故に卽時に懸かに自心の本不生際を悟る、如來知見の大菩提道の中に於いて遠塵離垢して法眼淨を得、若し是くの如くの方便を作し先づ著處より之を觀ぜずして而も但し是の心は遍一切處にして畢竟無相なりと言はば、則ち一切衆生悟入するに由なし、當に知るべし此の觀を最も秘要の法門とす、餘の方便を遠離するもろ〳〵の菩薩のごときは漸次に戒定智慧を修習して無量劫に於いて種々の門を以て人法二空を觀ずれども猶し未だ心の影像を遠離すること能はず、今眞言行者は初發心の時に於いて直に自心實相を觀じて本不生を了知するが故に卽時に人法戲論淨なること虛空の若し、自然覺を成じて他に由つて悟らず、當に知るべし此の觀を復頓悟の法門と名く。

經に秘密主此菩薩淨菩提心門名初法明道菩薩住此修學不久勤苦便得除一切蓋障三昧といふは佛の智慧に入るに無量の方便門あり、今此の宗は直に淨菩提心を以て門とす、若し此の門に入るものは卽ちこれ初めて一切如來の境界に入る、譬へば彌勒、樓閣の門を開いて善財童子を內れこの中に具に無量の不思議の事を見しめんが如し、言を以て宣べがたし、但し入るもののみ自ら知るのみ、法明とは心の本不生際を覺るを以て其の心淨住にして大慧の光明を生じ普く無量の法性を照らして諸佛所行の道を見る、故に法明道といふなり、菩薩この道に住するとき妄想

の因緣に從つて有らゆる煩惱業苦皆こと〴〵く清淨に除滅す、譬へば人あつて暗の中に利寶の爲に傷けられて謂うて蚘毒とす、毒想を作すを以ての故にその心執着して便ち毒氣を成じ肢體に遍入す、命終せんと欲するときに垂れて良醫あつて之を診て其の本末を曉して卽時に引いて傷處に至り明燈を以て之を照らして猶し所傷の寶を見るに血塗の相あり、其の人毒にあらずと了知して毒氣亦除き玩好の具なりと分別して喜樂を生ずるが如く、行者も亦復かくの如く、淨菩提心に因つて諸法を照明するが故に少しき功力を用つて便ち除蓋障三昧を得、八萬四千の煩惱の實想を見るに八萬四千寶聚門と成る、故に經の次に菩薩住此修學不久勤苦便得除一切蓋障三昧若得此者則與諸佛菩薩同等住といふ、この中の障に五種あり、一には煩惱障謂く根本の煩惱乃至八萬四千の上中下品の障、淨心を蓋ひ及び宿世の偏習に由るが故に道機を妨礙して佛法に入らず。二には業障謂く過去及び現在世に諸の重罪を造り、乃至方等經を謗するなり、この人は得道の因緣ありと雖も先の業障未だ除かざるを以ての故に種種の留難ありて佛法に入らず。三には生障謂く是の人若し勝上無難の生處を得ば必ず當に道を悟るべし、然れども前業に乘じて更に無暇の身を受く卽ち報生を障とするを以て佛法に入らず。四には法障謂く此の人已に無障の生處を得、又悟道の機あれども先世に曾つて障法等の緣あるを以ての故に善友に逢はず、正法を聽聞することを得ず。五には所知障謂くこの人乃至善知識に遇うて正法を聞くことを得、然れども種種の因緣あつて兩不和合にして般若波羅蜜を修することを妨ぐ大品の魔事品の中に廣く明すがごとし亦これ先世に或は曾つて他の道機を差へしが故に憙んで此の障を生ず。行者已に淨除五障三昧をえつれば、爾の時に自心の中に於いて常に十方一切の諸佛の妙相湛然なるを見ること明鏡を觀るが如し、乃至もろもろの威儀去來睡寤に於いて皆かくのごとくの佛會の因緣を離れず時にもろ〴〵の聖者常に勝妙の方便を以て其の心を啓悟し梵音をもて慰喩して爲に疑網を決したまふ、行者、聞に隨つて隨喜し悟り已つて網障隨つて除き久しからずして一切の佛法を成就す　故に若得此三昧者卽與諸佛菩薩同等住といふ、當に知るべし行人は則ちこれ位、大覺に同なりそれ自ら心を覺るを以ての故に便ち佛の名を得、然れども究竟妙覺大牟尼の位にあらず、猶し淨月の體に增減なしと雖も然も亦明漸漸に增して乃至第十五日に方に能く大海の潮を動するがごとし、又行者、如來と共に同等にして住するに猶つて卽ち能く方便力を以て五神通を起し本心を動せずして諸佛の刹に遊び種種の身語意を現じ

て種種の供養雲を興し無盡の大願を以て廣く諸度を修す、復意根淨に由るが故次に無量の語言音を解する諸陀羅尼を得、且く一世間の中の卅六俱胝趣の彼の上中下の性の種類若干の方俗の言辭各各の差別に隨つて皆その旨趣を曉り應ずるに隨類の音を以てす、一世界をいふが如きは一切の世界も亦かくの如し、梵本に噜多といふは是れ大聲なり囉尾多といふは是れ小聲なり涅瞿衫とは是れ長聲また多の聲を兼ねたり、具足して之を言ふ所以は、總持の境界は了せざるところ無きことを顯さんと欲ふなり、此の方の文字に對して以て具に翻じ難し、陀羅尼を得るを以ての故に能く一切衆生の心行を知る、謂く是くの如くの衆生は瞋行は偏多にして貪の性は薄し、或は是くの如くの衆生は貪行は偏多にして瞋の性は薄し乃至通塞の相無量の差別あり釋論の道種智の中に廣く明すが如し、是の菩薩は但し意根のみ能く知ることを得るにあらず、乃至視聽臭觸も亦皆互用無礙なり、又能く彼の根緣を觀て蓋障を除かんが爲に種種の方便を以て衆生を成就し佛刹を莊嚴し如來の事を行ず、當に知るべし、眞言門の行者は乃至一生に成辨することを得べし。復次に如上に說く所の諸の功德は一切衆上に皆ことごとく其の本性の如く等しく共に之れあり、但し無明の障蓋ありて自ら了知せざるを以て未だ是くのごとくの

秘密神通の力を發起すること能はず、今この眞言門修行の諸の菩薩は法明道を見るを以ての故に卽生に除一切蓋障三昧を獲、この三昧を得るが故に卽ち能く諸佛菩薩と同じく住して五神通を發す、五神通を以ての故に一切衆生の語言陀羅尼を獲、この陀羅尼を獲るが故に能く一切衆生の心行を知つて而も佛事を作す、能く廣く佛事を作して如來の種を斷せざるを以ての故に、則ち一切時一切處に於いて常に十方の諸佛の爲に護持せらるゝこと猶し嬰童の始めて生ずるに父母の愛心偏重にして常に捨離せざるが如し、當に知るべし是くのごとくの諸句は皆ことごとく次第相釋するなり。復次に行者內には如上の功德を具し外には諸佛のために護持せらるゝを以て、この故に生死に處すれども染着なきこと猶し蓮華の水を出でゝ淤泥の爲に染汚せられざるがごとし、常に四攝の方便を以て苦の衆生を拔き乃至無量無邊阿僧祇劫常に無間獄の中にあれども身心の精進熾然にして息まず退沒あることなく、勞倦を辭せず何を以ての故に淨菩提心は其の性法爾にして金剛のごとくなるが故に是くのごとくの極堅固の性は卽ちこれ師に從て得ず無爲戒に住す、無垢無濁にして破傷すべからず、戒とは梵には尸羅といふ、これ清冷の義なり、譬へば水性の常に冷にして薪火の因緣に遇うて則ち能く諸物を灼爛すと雖

も然も其の自性は終に遷るべからず、薪を除き火を息むるときは自然に清冷なること本のごとくなるが若し、眞言行者も亦かくのごとし、除蓋障三昧を獲ると きは心の本性卽ちこれ尸羅なり造作の法にあらず、他に由つて得ず、故に住無爲戒といふなり、聲聞の淨戒のごときは要ず白四羯磨衆緣具足に由つて方に始めて生ずることを得、又方便を須ひて守護すること利刺を防ぐがごとし、一期の壽盡くれば戒も亦隨つて亡す、この戒は則ち是くの如くにあらず、世世の生處に恒に與俱に生じて受持を假らず、常に失犯なし又斯の戒に住するに由るが故に實智增明にして不思議の中道甚深の緣起を逮見し八顚を制止し二邊を遠離す、故に經の次に遠離邪見通達正見といふ、迦葉亦これより以前は我等を皆邪見の人と名くとのたまふ、是の中の慧は不正の故に說いて邪見と名く凡夫二乘は決擇して正しく自心の實相を知ること能はざるに由つて諦實の理に於いて乃至空を不空と謂ひ不空を空と謂つて古佛所行の大菩提の路を見ず、今この菩薩は心明道を照見するを以ての故に卽時に無礙智生ず、一切の法に於いて皆ことごとく現前に通達して錯謬あることなし、猶し明目のものの日光の中に於いて種種の諸色を覩見するがごとし、無量の天魔皆ことごとく佛身を化作し各相似の波羅蜜を說くと雖も終に其の小分疑網の心を動ずること能はず、故に經の次に復次秘密主住此除一切蓋障菩薩信解力故不久勤修滿足一切佛法といふ、是くのごとくの正見は猶し金剛の若くなるを以てなり、卽ちこれ最上の堅信解力なり、これに依つて如實の巧度を進修するが故に諸佛の力無所畏解脫三昧を得及び餘の無量の佛法皆ことごとく成就するなり、龍樹の以爲く冶人のごときは種々の方便を以つて鑛石を消融して然して後に金と成す、若し神通のものは能く土木の類をして卽ち金體と成さしむ、故に不久勤修便得滿足といふ、この菩薩は初發心のときに卽ち佛と名くるを以ての故に、眞實の功德度量すべからず、假使如來無量無邊阿僧祇劫に於いて分別し演說したまふとも、猶し盡すこと能はじ、故に佛の言はく要を取つて之を言はゞ是の善男子善女人は無量の功德皆成就するなり。

爾時執金剛秘密主復以偈問佛乃至不知諸空非彼能知涅槃是故應了知空離於斷常とは如上に佛經の大旨を說きたまふに心の實相門略して已に周備せり、時に金剛手、未來の衆生をして方便を具足し復餘の疑ひなからしめんが爲の故に偈を以つて佛に問して世尊廣く其の義を演べたまへと請ず、この中に略して九句あり。

云何世尊說此心菩提生とは卽ち是れ菩提心の生なり華嚴諸經のごときは廣く發菩提心の功德を歎ず、今この中に

は直に心の密印を問ふ、云何が此の心に菩提の種子發生することを了知する、若し已に發生する其の性云何ん、第二の句に復以云何相知發菩提心といふは相は謂く性内に成ずれば必ず相外に彰るゝことあり、般若の中に廣く阿毗拔致の相貌を明すが如し。今この中に亦菩提心、生ずるときに何なる相貌かあると問ふ。經に願識心心勝自然智生説といふはこれ實のごとく佛の功德を歎じて前の二句義を敷演したまへと請するなり、初に識心といふは、これ心自覺の智なり、次に又心といふは卽ちこれ心の實相なり、意は境智倶に妙にして無二無別なることを明す、故に重ねて之をいふ、自然智といふは是れ卽ち如來の常智なり、唯しこれ心自ら心を證す、他に從つて悟らず、言は佛は既に識心の人の中に於いて最も第一たり、必ず能く此の菩提の發生と及び其の微相とを知りたまふべし、唯し願はくは之れを説きたまへとなり。第三の句に大勤勇幾何次第心續生といふは大勤勇は卽ちこれ佛の異名なり、德を歎じて而して復た問ひを發す、幾くの心の次第あつてか而も是の心を得ると。第四第五の句に心諸相與時願佛廣開演といふは、此のもろ〳〵の心差別の相と及び相續して勝進するに凡そ幾くの時を經てか而も究竟の淨菩提心を得と問ふ。第六の句に功德聚亦然といふは言くこの心の微妙の功德亦願くは世尊廣く之を開演したまへと、故に亦然といふなり。第七の句に及彼行修行といふは次に當に何の行を以て云何が修行して而も能く無上の悉地を獲得すべきと問ふなり。亦分けて二句とすべし。第八第九の句に心心有殊異唯大牟尼説といふは謂く衆生の異熟の識心と瑜伽行者の殊異の心と亦願はくは世尊分別して廣く説きたまへとなり、牟尼とはこれ寂默の義なり、言く佛の身語心は皆究竟寂滅にして語言の地を過ぎたり、二乘の小寂に對して譬とすべからざるを以ての故に大牟尼といふなり、阿闍梨の言たまはく是くのごとくの九句或は分ちて十句とすべし、これより以後經の終に至る迄皆これ如來、九問の意を酬いて廣く分別して説きたまふ、然も佛其時の衆會を觀じて務いで意を得宗を求めしめんとして或は後の問を先に答へて文に定准なし、或は轉疑問を生じて以て支流を盡くす、下の文の入大悲藏漫荼羅等のごとき、卽ちこれ修行の句を答し、百字果等は卽ちこれ殊異の心及功德の句を答したまふ其餘は相應の處あるに隨つて皆類を以て之を觀じて義知んぬべし、次に如來金剛手に答したまふ偈の中に善哉佛眞子廣大心利益とは如來の種性より生じ佛の身語心より生ずるを以ての故に眞子といふ、前に大日世尊の廣大加持の境界を現じたまふがごとく今秘密主も亦普く是くのごとく、無量の應度の

衆生の爲に速に大行を成じ大疑網を裂き同く三平等句の無盡莊嚴を獲しめんと欲ふが故に、佛歎じて善哉佛子汝今能く廣大の心を以て無量の衆生を利益せんが爲の故に是くのごとくの問を發すと言たまふなり、次に勝上大乘句心續生之相諸佛大秘密外道不能識といふは略して七義あり故に大乘と名く、一には法大を以ての故に、謂く諸佛の廣大甚深秘密の義は毗盧遮那遍一切處大人の所乘なり。二には發心大の故に謂く一向に平等の大慧を志求して無盡の悲願を起し當に普く法界の衆生に授けんと誓ふなり。三には信解大の故に謂く初て心明道を見るとき無量の功德を具足し能く遍く恒沙の佛刹に至り大事の因緣を以て衆生を成就す。四には性大を以ての故に謂く自性清淨心の金剛寶藏は缺減あることなく、一切衆生に等しく共に之あり、五には依止大の故に謂くかくの如くの妙乘は卽ち法界衆生の大依止處なり、猶し百川の海に趣き卉木の地に依つて生ずるがごとし。六には時大を以ての故に謂く壽量長遠にして三時を出過し師子奮迅秘密神通の用未だ曾つて休息せず。七には智大を以ての故に謂く諸法無邊の故に等虛空の心自然の妙慧も亦復無邊なり、實相の原底を窮むること譬へば函蓋相稱せるがごとし、是くの如くの七の因緣を以ての故にもろ〳〵の大乘の法門に於いて猶し醍醐の淳味第一なるがごとし、故に最勝大乘といふなり、乘をば進趣に名づけ、句をば止息の處に名づく、故に大乘句といふなり。心續生の相とは此の心は畢竟常淨にして猶し虛空の一切の相を離れたるが如くなりと雖も、而も亦因緣より起して心相生ずることあり、猶し大海の波浪のこれ常有にもあらず亦常無にもあらざるが如くなり、若し常有ならば風飈止息するとき澄然として靜なるべからず、若し常無ならば風飈纔に起するとき鼓怒相續すべからず、當に知るべし是の心は緣より起するが故に卽ちこれ不生にして生じ、生にして不生なり、無相の相は相常に無相なり甚深微妙にして了知すべきこと難し、諸佛秘密の印なり妄に宣示せず、是の故に凡夫二乘兩種の外道は但し無生滅の心を識らざるのみにあらず、亦復生滅の心をも識らず、故に諸佛大秘密外道不能識我今悉開示一心應諦聽といふなり。次の偈に越百六十心生廣大功德其性常堅固知彼菩提生といふは是れは略して初の問の云何んが卽ち菩提心の生を知るといふを答するなり、今佛告げて言たまはく、百六十の相續の心を越ゆるは卽ちこれ淨菩提心なりと、如し人あつて云何か此の乳の中より醍醐生ずることを知ると問はば答へて言たまふべし乳酪生熟蘇麁濁變異の相ことゞく已に融妙にして復滓穢なきがごとし、當に知るべし卽ちこれ醍

醐の生なり、行者最初に金剛寶藏を開發するとき、是の心性は淨虛空のごとく諸の數量を超えたりと見る、爾の時に因業生を離れて佛樹の牙生ず此の牙生ずる時に已に法界に遍ず、何に況んや枝葉花果をや故に生廣大功德といふ、心行戯論を過ぎたるを以ての故に破すべからず、轉ずべからざると猶し閻浮檀金の能くその過惡を說くことなきが若し、故に其の性常堅固といふ、若し自心に是くの如くの印ありと知るは當に知るべし是れ菩提生なり。　次に一偈半あり略して菩提心の相貌を答す、世間に更に法として以て淨菩提心の相を表示すべきものあることなし、唯し太虛空の喩への小分相似を除くを以ての故に無量如虛空といふ、譬へば虛空の烟雲塵霧のために染汙せられず、其の性常住にして諸の因緣を離れたり、假使八方の大風、世界を吹き盡くすとも亦それをして動せしむること能はざる本初より以來常に自ら寂滅無相なり、今適めたるにあらざるが如く心相も亦爾なり、無始より以來本より不生なり、本不生を以ての故に一法として能く染汙し動搖せしむることあること無し、常住不變にして永寂無相なり、故に不染汙常住諸法不能動本來寂無相といふ、爾の時に行人此の寂光のために照らされて無量の知見自然に開發すること蓮華の敷たるが如し故に無量智成就といふ、此の智成就は

即ちこれ毗盧遮那の心佛現前するなり、故に正等覺顯現といふ、梵本には三藐三佛陀現といふなり、佛已に略して是くの如くの心の實相印を說きたまふ。若し行者これと相應するときは當に知るべし、已に堅固の信力を具せりと、然も此の信力は本眞言門の供養儀軌行法によつて說の如く修行して淨菩提心に至ることを得故に供養行修行從是初發心といふは此の中の供養に二種あり、一には外の供養、二には內の供養なり下の文に當に廣く說くべし耳、或が說いて言く但し心性は無相無爲なりと觀じて種種に紛動して菩薩の道を行ずべからずと、此の說は非なり、四種の不生を以て鑛の中の金性を觀ずるに復因にあるにも果にあるにも常に自ら滅なく增なしといへども、若し方便を以て滓穢を消融せざれば則ちこの不生の金得べきに由なきが如く行人も亦復是くの如し、若し三種の秘密方便の供養行門を以て百六十心の鑛石の垢を消融せずんば何を以てか此の淨菩提心を得ん、龍樹阿闍梨の中道正觀は正しく從緣起を以ての故に無生の義成ず、而も汝龜毛兎角を謂つて無生とす、この故に失處に墮在す、又世人の眞金の百錬すれども移らざるを覩て妙性窮極すと以爲へり、若し五通の仙人は諸の藥物を以て種種に錬冶し能く土石の類を化して盡く金寶とす、それ之を服食するものあれば住壽長遠にして

神變無方なり、當に知るべし眞金の性の中に自ら是くの如くの力用ありといふことを、但し世人は秘密方便なきが故に得ること能はざるがごとき耳、淨菩提心も亦復是くのごとし、若し大悲萬行を以つて種種に鍊冶すれば神變加持不思議の業を成ずることを得、故に未得を得と謂ひ、初心を保ちて極果と爲すべからず。

經に秘密主無始生死愚童凡夫執著我名我有分別無量我分秘密主若彼不觀我之自性則我我所生といふは以下は心相續の義を答す、淨心最初の生起の由しを明さんと欲ふが故に先づ愚童凡夫の違理の心を說く、無始生死とは智度に云く世間の若しは衆生、若しは法皆始めあることなし、經の中に佛の言たまはく無明に覆はれ、愛に繫がれて生死に往來して始め不可得なり、乃至菩薩は無始も亦空なりと觀じて有始見の中に墮せず、愚童の義は前に說くが如し、凡夫とは正譯には異生といふべし、謂く無明に由るが故に業に隨つて報を受けて自在を得ず、種種の趣の中に墮して色心像類各各差別なり、故に異生といふなり、その所計の我は但し語言のみあつて而も實事なし、故に執着我名といふ、我有といふは卽ちこれ我所なり、是くの如くの我我所執は十六知見等の事に隨つて差別無量にして不同なるが如し故に名けて分と爲す、次に虛妄分別の所由を釋す、故に秘密主若彼不觀我之自性則我我所生といふなり、若し彼れ諸蘊は皆悉く衆緣より生ずと觀ず、この中に何ものか是れ我ならん我は何れの所にか住する蘊に卽し蘊に異し相在すとせんや若し能く是くのごとく諦求せば當に正眼を得べし、然るを彼れ自ら觀察せず但し展轉相承して久遠より以來この見を祖とし習つて我は身中にあつて能く所作及び長養あり諸根を成就す、唯しこれのみ是れ究竟の道なり餘は皆妄語なりと謂へり

これを以ての故に名けて愚童と爲すなり、經に復計有時といふは謂く一切の天地の好醜は皆時を以て因とすと計す、彼の偈にいふが如し、時來れば衆生熟す、時至れば催促す、時能く人を覺悟せしむ、是の故に時を因とす、更に有人の言く一切の人物は時の所作にあらずといへども然も時はこれ不變の因なり、是れ實有の法なり、細の故に見るべからず、花實等の果を以ての故に時ありと知るべし、何を以ての故に果を見て因ありと知るが故に此の時法は不壞なるが故に常なり、亦時の自性を觀せざるを以ての故に是くのごとくの妄計を生ずるなり。

經に地等變化といふは謂く地水火風虛空なり、各各に執して眞實とするものあり或るが言く地は萬物の因たり、一切衆生萬物は地に依つて生ずることを得るを以ての故に地の自性は但し衆緣和合によつて有なりと觀せざるを以ての故に、而も

是の見を生じて地を供養するものは當に解脫を得べしと以爲へり、次にあるが計すらく水は能く萬物を生ず、火風も亦爾なり、或が計すらく萬物は空より生ず、謂く空はこれ眞の解脫の因なり、宜しく供養し承事すべしと、皆廣く說くべし、經に瑜伽我といふは謂く定を學するもの此の內心相應の理を計して眞我と以爲へり、常住不動にして眞性湛然なり唯しこれのみ是れ究竟の道なり因果を離れたり心の自性を觀せざるが故に是くの如くの見を生じて眞我と以爲へり但し此の理に住するを卽ち解脫と名く。

經に建立淨不建立無淨といふは、是の中に二種の計あり、前の句は謂く一切の法を建立するものあり、これに依つて修行する之を謂つて淨とす、次の句は謂く此の建立は究竟の法にあらず、若し建立なきは所謂無爲なり、乃ち眞我と名く亦前の句の所修の淨を離る、故に無淨といふ、我の自性を觀せざるに由つて、是くのごとくの見、生ずることあり、廣く說くこと上のごとし、經に若自在天若流出及時といふは謂く一類の外道の計すらく自在天はこれ常なり、この自在者能く萬物を生ずと十二門の中に難じていふが如し、若し衆生これ自在の子ならば唯し樂を以て苦を遮すべし苦を與ふべからず、亦但し自在を供養せば則ち苦を滅して樂を得べし、而も實には爾らず但し自ら苦樂の因緣を行じて而も自ら報を受く、自在天の作にはあらず、又若し自在、衆生を作すといはゞ誰か復此の自在を作す、若し自在自ら作すといはば然らず物の自作にあらざるがごとし、若し更に作者ありといはば則ち自在と名けじ彼の論に廣く說くがごとし、計流出とは建立と大に同なり、建立は心より一切の法を出すがごとし、此の中の流出は手の功に從つて一切の法を出すがごとし、譬へば陶師子の挺埴無間にして種種の差別の形相を生ずるがごとし、次に時といふは前の時外道の宗計と小しき異なり皆自在天の種類なり。

大毗盧遮那成佛經疏卷第一　終

大毗盧遮那成佛經疏卷第二一本

沙門一行阿闍梨記

入眞言門住心品第一の餘。

經に尊貴といふは、これは是れ那羅延天なり、外道の計すらく此の天は湛然常住にして不動なり、而も輔相あつて萬物を造成す、譬へば人主の無爲にして而も治するに有司命を受けて之を行ずるがごとし、能造の主は更に尊貴するところのものあること無きを以ての故に尊貴といふ。又此の宗の計すらく、尊貴とは一切の地水火風空處に遍せり、昔論師ありき、彼の宗計を伏せんと欲ふが故に天祠に往詣して彼の天像の身上に於いて坐して而も飲食す、西方には飲食の殘を極不淨とするを以て皆共に忿怒す、論師の言さく所宗の如くならば豈に一切處の地水火風空界に遍ずる相にあらずや。答へて言さく是くの如し、論師の言さく彼れ卽ち地水火風ならば我れも亦是くのごとし、之を以て相入するに何の不可なるところあつてか而も忿怒するや、彼の衆默然として報を加ふること能はず亦我の自性を觀せざるに由るが故に是くのごとくの妄計を生ず。

經に自然といふは謂く一類の外道の計すらく一切の法は皆自然にして而も有なり造作のもの無し、蓮華の生じて色の鮮潔なるがごときは誰か染むるところぞ、棘刺の利き端誰か削り成せる所ぞ故に知んぬ諸法は皆自爾なり、有る師難じて云く今目に世人を觀るに舟船室宅の類を造作するは皆衆緣によつて而も有なり、自然成にはあらず、云何か自爾ならんや、若し有なりと雖も而も未だ明了ならざるが故に人功を須つて之を發はすと謂はば是れ亦然らず既に人功を須つて之を發はさば卽ち是れ緣に從る自然有にはあらず。

經に內我といふは、有るが計すらく身中に心を離れて外に別に我性あり、能く此の身を運動して諸の事業を作す。難者の云く若し是くの如くならば我は卽ち無常なり、何を以ての故に若し法の是れ因なると及び因より生ずるとは皆無常なるが故に若し我無常なりといはば則ち罪福果報皆悉く斷滅すべし、是くの如く等の種種の論義は挍量の中に至つて廣く明すべし。

經に人量といふは謂く神我の量は人身に等し、身小なれば亦小なり、身大なれば亦大なりと計す。智度に云く、有るが計すらく神の大小は人身に隨ふ死壞するときに神亦前に出づと、卽ちこれと同なり、然るを彼の宗は我を以つて常住自在の

法とす、今既に身の大小に隨ふといはゞ卽ちこれ無常なり、故に知んぬ然らざるなり。

經に遍嚴といふは、謂くこの神我は能く諸法を造す、然も世間に尊勝遍嚴なるの事は、これ我の所爲なりと計す。自在天の計と小しき異なり論の中に自在を破して云ふが如し、自在天何が故にか盡く樂人を作し盡く苦人を作さずして而も苦者樂者ある、當に知るべし愛憎より生ず故に自在にあらずと、今遍嚴とは既に能く諸の福樂を造すといはば而も樂を以つて苦を遮することを能はず、何ぞ遍常自在と名けんや。

經に若壽者といふは、謂く有る外道の計すらく一切の法乃至四大草木等皆壽命あり、草木の伐り已つて續生するが如きは當に知るべし命あり又彼れ夜は則ち卷合す當に知るべし亦情識あり睡眠するを以ての故に、難者の云く若斬伐せられて還つて生ずるを見て以て命ありとせば則ち人の一支を斷つに復た增長せず豈に命なからんや。合昏木の眠あるがごとくならば則ち水の流れて晝夜に息まざる豈に是れ常に覺たらんや、皆我の自性を觀せざるに由るが故に種種の妄見を生ずるなり。

經に補特伽羅といふは謂く彼の宗計に數取趣者ありといふは皆これ一我なり但し事に隨つて名を異んずるのみ。若し今世より後世に趣くことあらば是れ則ち識神、常なりとやせん、識神若し常ならば云何か生死あらん、死をば此の處に滅すと名け、生をば彼の處に出づと名く、故に神常なりと言ふことを得ざれ、若し無常ならば則ち我あること無し。佛法の中の犢子道人及び說一切有者の如きは此の兩部は三世の法ありと計す。若し定めて過去未來現在あらば則ち數取趣者あるに同じて佛の三種の法印を失す、西方の諸の菩薩種種の量を作つて彼の宗計を破す。

經に若識といふは、謂く有る一類の執すらく此の識は一切處に遍せり乃至地水火風虛空界にも識皆その中に遍滿せりと、此れ亦然らず若し識神遍常ならば、獨り能く見聞覺知すべし、而も今要ず根塵和合するに由つて方に識生ずることあり、則ち汝が識神は所用無しとす、又若し識神、五道の中に遍せば云何か復死生あるや、故に知んぬ爾らざるなり。

經に阿賴耶といふは是れ執持含藏の義なり。亦これ室の義なり、此の宗の說かく阿賴耶あり能く此の身を持せり造作する所あつて萬像を含藏す、之を攝すれば則ち所有なし、之を舒ぶれば則ち世界に滿つ佛法の中の第八識の義に同ならず、然も世尊密意をもて如來藏を說いて阿賴耶となしたまふ、若し佛法の中の人自心の

實相を觀せずして分別し執着すれば、亦我見に同す。

經に知者見者といふは、謂く有る外道の計すらく身中に知者あり能く苦樂等の事を知ると、復有るが計すらく能見者卽ちこれ眞我なりと。智度に云く目に色を視るを名けて見者とし、五識を以て知るを名けて知者とす、皆これ我計なり事に隨つて名を異んず、難者の云く汝能見これ我なりといはば而も彼の能聞能觸知者も是れ我なりとやせん、不や、若し皆是ならば六根の境界互に相知らず、一は六を作すべからず、六は一を作すべからず、若し我にあらざるものありといはば、これ亦疑に同す、故に知んぬ根塵和合して知見する所あり別の我無し。

經に能執所執といはば、謂く有る外道の言さく身中に識心を離れて別に能執者あり、卽ちこれ眞我なり、能く身口意を運動して諸の事業を作すと、或は有るが說いて言く能執者は但し是れ識心なり、其の所執の境界を乃ち眞我と名く、この我は一切處に遍せりと然も內外の身受心法の性は皆緣より生じて自性あることなし

この中の所執能執すら尙し不可得なり、何に況んや我をや亦我の自性を觀せざるに由るが故に是の說を作す。

經に內知外知といふは亦これ知者の別名なり、分つて二計とす、有るが計すらく內知を我とす、謂く身中に別に內證のものあり卽ちこれ眞我なり、或は外知を以て我とす、謂く能く外塵の境界を知るものの卽ち是れ眞我なり。

經に祉怛梵といふは、謂く知者外道の宗計と大に同なり、但し部黨別異なるが故に特に之を出すのみ。

經に若摩奴闍といふは、智度には翻じて人と爲す卽ち是れ人執なり、具に譯せば當に人生といふべし、此れは是れ自在天外道の部類なり、人は卽ち人より生ずと計するが故に以て名と爲す、唐の三藏の意生といふは非なり、末那はこれ意なり今は末奴といふ聲轉じて義別なり誤れるのみ。

經に摩納婆といふは是れ毗紐天外道の部類なり、正翻には勝我といふべし、言く我は身心の中に於いて最も勝妙なりとす。彼れ常に心中に於いて我は一寸ばかりなるべしと觀す。智度に亦云く有るが計すらく神は心中にあり微細なること芥子の如し清淨なるを名けて淨色とす。或は豆麥のごとし及び其の身を成ずるは像の已に壯れるが如し唐の三藏翻じて儒童とするは非なり。儒童梵には摩拏婆といふ、此の中には納といふ義別なり誤れるのみ。(この二名はこれ菩提闍梨の解なり)

經に常定生といふは、彼の外道の計すらく我は是れ常住なり破壞すべからず自然に常に生じて更に生ずること有ること無し故に以て名となす。

經に聲非聲といふは、聲は卽ち是れ聲論外道なり若し聲顯者の計すらく聲の體は本有なり緣を待ち之を顯はす體性常住なり若し聲生者の計すらく聲は本生なり緣を待つて之を生ず、生れ已つて常住なり彼の中に復自ら異計を分つ餘處に廣く釋するが如し。非聲とは前の計と異あり彼れは聲はこれ遍常なりと計す。此の宗は悉く撥して無となして無善惡の法に墮在す亦聲字なき處これを以つて實とす。

經に秘密主如是等我分自昔如來分別相應希求順理解脫といふは、經の中には略して卅の事を擧ぐ、若し類に隨つて差別せば則ち無量無邊あり、人の坐して四禪を得るが如きは卽ち此の法を計して眞實の常理とす、或は是の念を生す我れはこれ禪を得たるものなりと、是くの如く等は皆これ我分と相應す例して知んぬべし。皆我の實相を觀ぜざるに由るが故に、但し久遠より以來た相承して此の見を祖とし習へり、各各に自ら大師薄伽梵あり一切知見者なり善く瑜伽を修するを以ての故に現に此の法を覺つて而も世間の爲に之を說く、唯し此れのみ是れ究竟の道なり更に餘の道なしと謂へり。劫初の時のごときは獨一りの天あり、先づ梵界に生じて而も是の念を作す。若し更に衆生あつて來つて我れと共住せんに豈善からざらんやと。時に上界の天あつて命終して此の中に來生す、先に生ずるもの卽ち之れに謂つて言く我が念力に由るが故に汝ここに生ずることを得、汝は卽ち我が所生なりと。彼れ亦この念を作す彼の尊能く我等を生せり便ち相隨順して計して最初に我者ありとす、これより以來た是の梵天王能く世間を造すと謂へり、是くの如くの展轉して異見を生ずること勝て記すべからず、希求順理解脫とは、順理は梵音に瑜祇なり卽ちこれ古昔に瑜伽を修せし行者なり、彼れ眞の解脫を得ることれ萬物の宗なりと謂へり、今彼の行に順して解脫を希求するが故に然いふなり、已上は皆これ內外の因果を破壞する違理の心なり、次に最初順理の心を明す、順は卽ちこれ世間の八心なり。

經に秘密主愚童凡夫類猶如脂羊或時有一法想生所謂持齋彼思惟此少分發起歡喜數數修習秘密主是初種子善業發生といふは脂羊はこれ畜生の中に性最も下劣なり但し水草及び婬欲の事を念じて餘は知るところ無し、故に西方の語法に順じて以て善惡の因果を知らざる愚童凡夫に喩ふるなり、世間に久遠より來た展轉相承して

善法の名あり、然も違理の心を以つて種種に推求すれども得ること能はず、後の時歎然として自ら念生ずることあり。我今節食持齋せんと、卽ちこれ善法なり然れども猶し未だ是れ佛法の中の八關戒にはあらず、彼れ節食し自戒するに由るが故に卽ち緣務減少にして我をして飲食足り易く馳求の勞苦を生ぜざらしむと覺るその時に卽ち少分不着の心を生ず、其の心歡喜して而も安穩なることを得、この利益を見るに由るが故に數數に之を修習することあり、卽ちこれ最初に微しき善惡の因果を識るが故に種子心と名く。

經に復以此爲因於六齋日施與父母男女親戚是第二牙種といふは此の六齋日は卽ち是れ智度の中に上代の五通の仙人勸めて此の日をして斷食せしむ、既に善法に順し又鬼神の災横を免かる彼れに廣く說くが如し、貪求を止息するに內に利樂を獲と見るに由るが故に此の法を修習して增長することを得しめんと欲ふが故に持齋の日に於いて己の財物を捨てゝ以つて六親に與ふ、自ら我れ守護の憂なし而も他人をして愛敬せしめ孝義の譽れを獲と念ず、この因果を見るを以ての故に轉歡喜を生ず、歡喜を生ずるが故に善心稍く增す由し種子より牙を生ずるがごとし。

經に復以此施授與非親識者是第三疱種といふは、謂く此の守齋の善法を成ぜんと欲して無貪慧捨の心を修習す數習ふに由るが故に善心漸く增長して復能く非親識の人に施與す、この平等の施心の功德利益を見るが故に爾の時に善萠倍復增廣なり猶し牙莖の滋く盛にして未だ葉を生ぜざる時のごとし、故に疱種と名く。

經に復以此施與器量高德者是第四葉種といふは、謂く已に能く慧捨を習行す、これを因とするに藉て漸く能く所施の境を甄擇す、此くの如くの人は德行高勝なり、我れ今宜しく親近して之を供養すべしと、卽ち是れ慧性漸く開けて善知識に遇ふ由漸なり。

經に復以此施歡喜授與伎樂人等及獻尊宿是第五敷華といふは、謂く慧性漸く開け復所施の境を甄別して其の利他の益を見るに伎樂の人能く大衆を化して其れをして歡喜せしむるを以ての故に其の功を賞するなり、凡そ此くの如くの類衆多なり、これを以つて等といふなり、尊宿といふは耆舊にして見聞するところ多く、及び學行高く尙うして世の師範とするところなり、其れ遵利するところ多きを以ての故に誠を推して歡喜して之を施與す亦我が施の時の心をして倍歡喜せしむるが故に卽ちこれ花種なり。

經に復以此施發親愛心而供養之是第六成果といふは、謂く所習醇熟して直に歡

喜するのみにあらず、復能く親愛の心を以て尊行の人に施與す、又前の施の因緣に由つて法利を聞くことを得て彼れ内に勝德を懷くと知り、能く欲等を出離せりと謂つて狎習親附して之を供養す初の種子に望むれば卽ち是れ成果の心なり。

復次秘密主彼護戒生天是第七受用種子とは、謂く已に能く齋施を造り其の利益を見て卽ち知んぬ三業の不善は皆これ衰惱の因緣なり我れ當に之を捨てて戒を護つて住すべし、戒を護るに由るが故に現世には諸の善利を獲、大名聞あつて身心安樂なり倍復增廣にして賢善なり命終して天に生ずることを得、譬へば種果已に成じて其の實を受用するが如し故に受用種子といふ。又云く一の種子より百千の果實を成ず、是の一一の果實復若干を生ず展轉滋育すること勝て數ふべからず、今此の受用果の心復つて後心の種子と成ることも亦復かくの如し、故に受用種子と曰ふ。

經に秘密主以此心生死流轉於善友所聞如是言此是天大天與一切樂者若虔誠供養一切所願皆滿所謂自在天等乃至彼聞如是心懷慶悅慇重恭敬隨順修行秘密主是名愚童異生生死流轉無畏依第八嬰童心といふは、已に尊行の人宜しく親近し供養すべしと知り、又持戒にして能く善利を生ずるを見る、卽ち是れ漸く因果を識る、今復善知識の此の大天あり能く一切の樂を與ふ若し虔誠に供養すれば所願皆滿つと言ふを聞いて卽ち能く歸依の心を起す、未だ佛法を聞かずと雖も然も此の諸天は善行を修するに因つて此の善報を得と知り、又漸く勝田を信解し甄別す、復佛法の殊妙を聞かば必ず能く歸依し信受すべし。故に世間の最上心とす。問うて曰く前に自在天等は皆これ邪計なりと說く、今復これ等に歸依するは是れ世間の勝心なりといふ、前と何の異かある。答へて曰く前は是れ因果を識らざるの心なり、但し諸法は是れ自在天等の所造なりと計す、今は善根熟するに由るが故に生死流轉の中に於いて無畏依を求め彼の行因を效つて冀つて勝果を成ぜんと欲ふが故に前の計には同ならず、商羯羅といふは是れ摩醯首羅の別名なり、黑天といふは梵音には嚕捺羅といふ是れ自在天の眷屬なり、龍尊といふは是れ諸大龍なり俱吠囉等は皆世の宗奉する所の大天なり、梵天后といふは是れ世間の奉尊する所の神なり然も佛法の中には梵王は離欲にして后妃あること無し、波頭摩より以下は所謂得叉迦龍和修吉龍商佉龍羯句擿劔龍大蓮華龍俱里劔龍摩訶泮尼龍阿地提婆龍薩陀龍難陀等の龍は皆これ世間の奉尊する所の神なり、天仙といふは謂く諸の五通の神仙なり其の數無量なり故に名を列ねず圍陀は是れ梵王所演の四種の明論なり、大

圍陀論師といふは是れ彼の經を受持する能敎授の者なり、能く出欲の行を開示するを以ての故に歸依すべし、彼の部類の中に於いて梵王は猶し佛の如し四圍陀典は猶し十二部經の如し、此の法を傳ふるものは猶し和合僧のごとし、時に彼れ是くの如く等の世間の三寶を聞いて歡喜し歸依し隨順し修行す、これ第八の生死凡夫の無畏依なり。

經に秘密主復次殊勝行隨彼所說中殊勝住求解脫慧生等といふは謂く卽ち此の第八の無畏依の中に復殊勝の心あるなり、既に如上所說の世間の諸の薄伽梵に宜しく供養し歸依すべしと聞いて後に遂に心を生ず、この諸の三寶には何者か勝れたりとする我れ當に其の善者を擇んで隨順し修行すべし、前の善根力に由るが故に彼の所說の法の中に隨つて殊勝に住することを得、解脫を求むる智生ずることあり然れども未だ緣起の法を知らざるを以ての故に所有の觀空の智慧、斷常を離れず故に常無常空と曰ふ、但し是くの如くの說に隨順して勤めて修學す、此の中に復二種あり若し解脫を求むる智生ずるをば殊勝心と名け、已に空法に於いて作證するをば決定心と名く、若し離分して之を說かば前に幷して凡そ十心あるなり、世尊出世間觀空の智慧に對明せんと欲ふが故に次に說いて言はく秘密主彼れ空と非空との義を知解し斷常を了知するにあらず、非有非無平等の觀を作し諸の戲論を絕すと雖も然も亦雙べて是の見を離るゝこと能はず。彼れ未だ正因緣を解せざるに由るが故に然も佛法の中には因緣の有を知るを以ての故に、則ち無の見を離る、自性空を觀ずるを以ての故に有の見を生ぜず、若し有無の見を離れぬれば卽ち斷常に墮せず若し是くの如くの空の義に達せざれば復有無に着せず言を離れ相を絕すと雖も終にこれ分別の想を以つて此の無分別の心を作す猶し長爪梵志が諸法の實相を觀ずるに一切の法を受けずして是の見をのみ受けしが如し。夫れ眞空は分別を離れたり云何が空を分別せんや、若し空の義を解せざれば復一心に精進して勤めて解脫を求むと雖も彼れ能く涅槃を知るにあらず、是の故に佛の言はく汝涅槃を求めんと欲はば緣起の空を了知して斷常を離るべしと、彼の初めの種子心少分の貪垢を減損するに由つて卽ち少分の淨心に順す、これより以後齋施漸く增す卽ち是れ淨心の勢力漸く萌動することを得るなり、この熏習に由つて則ち能く所歸依の處を甄擇し解脫を求むる慧生ずることあり若し善緣に遇はざれば還つて斷常空より邪見に退入す、然も其の八心の種子終に敗亡せず若し佛法を聞けば但し斷常空に於いて緣起の空を觀じて卽ち正道に入れしむ、若し是れ未だ種子を

生ぜざる無機の人は種種に爲に說くと雖も終に信解すること能はず、又如し行者第八の心に於いて生死の無畏依を求むる時若し善知識の爲に三寶の眞の歸依處を說くに遇へば彼れ漸く現世の因果を識るに由るが故に卽ち能く信受す復た是の事を置く彼れ齋を修する時の如きは是の人若し善知識に遇ふに告げて言く汝何の利を觀るが故にか此の齋施を爲す。彼れ卽ち答へて言く我れ貪求保護の因緣は種々の憂苦あり少欲にして施を行ずれば歡喜安樂の住を得と觀るが故にと。時に善知識告げて言はく善哉善男子、佛の所說の如し衆生は慳貪を以ての故に現世には種種の憂苦あり、命終しては此の因緣を以て惡趣の中に墮す、心に慳貪の垢を離るるを以ての故に、現世には安樂にして大名稱あり命終しては天に生じ後には涅槃を得、この故に汝今更に勝上の心を以て、八齋の法を受くべし、彼れ聞き已つて卽便ち信受して說の如く修行す、若し無機の人は但し世間の苦樂は皆これ自在天の造なり、或は地等の變化なり時を以つて因とすと說いて則ち是くの如くの八齋の少分の安淨を聞けども尙し信ずること能はず、何に況んや餘の深事をや。問うて曰く是くの如くの八心最初の種子は復何を以てか因とする。答へて曰く世間に久遠より以來た善惡の名あるに由つて種子これより生ずるなり、劫初の衆生の地肥を貪食するが如きは、爾の時に卽ち多食のものを以ては不善とし小食のものを善とす、或人あり多食の因緣もろ〳〵の過患を起すを見て便ち是の念を作す我れ今少しき此の味を食し常に自ら誡節せんに亦善からざらんや、然も此の衆生亦未だ因果後世の報を識らず、但し展轉相承して仁義慚愧等を謂つて以つて善法とす、能く是くの如く行ずるものあれば世間共に之を稱譽す、又小劫終竟の時の如きは衆生忽爾に發心す、世間の惡法は過患なりと知つて更相に勸導し共に善事を行す、爾の時に亦善知識の勸導の然らしむるなし當に知るべし皆これ自心の實相の熏習する因緣力なり、最初の種子微塵計りの心垢を離るゝ時卽ち微塵計りの如くなる淨心の勢力を顯はすが如きは、善の種子生ずといふと雖も其れ實には卽ち是れ不生の生なり是れ堅固の性なるを以ての故に衆生の識心に在つて終に敗亡せず未だ自心の實際大金剛輪に至らざる中間には更に住處無うして果復つて種と成り展轉滋長すと雖も然も亦阿字門を出でず、故に最上大乘句心續生之相諸佛大秘密外道不能知といふ、法華の藥草喩品亦意此に在り、復次に行者三寶に歸依し如來の律儀に隨順して一日の中に於いて八齋の法を受く聖戒に防護せらるゝに由るが故に寂靜安樂なり安樂を以ての故に則ち賢聖の所行を信じて數數に修習

す、是れを初めの種子と名く、此の善をして増長せしめんが爲に而も諸善を修す、乃至戒醇淨なるに由つて決定して天に生じ後には涅槃に至る是れを受用種子と名く、復善知識に親近するに由るが故に正法の利を聞いて異の歸依心を起さず是れ生死流轉の凡夫の第八の眞實の無畏依なり、又此の中に於いて殊勝に住して解脫を求むる慧生ずることあり思惟し觀察して決定の想を生ず此れより卽ち聲聞の菩提の初の種子心を發す皆前の文に准例して廣く分別して說くべし、乃至三乘の一一の地に皆十心を具す第十地に迄るまで亦種子牙疱葉花果等を具し佛地を求むる智生じて畢竟空を觀じ金剛際に至ることを得ることあり。

爾時金剛手復請佛言唯願世尊說彼心如是說已佛告金剛手秘密主言秘密主諦聽心相謂貪心無貪心瞋心慈心癡心智心乃至云何受生心謂諸有修習行業彼生心如是同性といふは、此れ前の問のなかの諸心相の句を答するなり、初には六十心の名を列ね次には其の相を釋す、秘密主彼云何貪心謂隨順染法とは、謂く前の境に染著す卽ちこれ淨心を染汙するなり、若し此の法に隨順し修行するを有貪心と名く心法は微細にして識り難きを以つて但し彼の所爲の事業を觀ずるに必ず相外に彰るゝことあり、譬へば烟の牀貌を鑒て則ち火性を以つて比知すべきが如し、故に諸句多く順修を以つて義を明す以つて例すべきこと然なり、此れ等は皆これ未だ出世の心を得ざるより以來善と種々に雜起するの心なり、若し行者善く眞僞を識て猶し農夫の務めて穢草を除き以つて嘉苗を輔くるが如くすれば則ち淨心の勢力漸漸に增長す、これ因緣の事相なりと謂うて至言を輕忽し心をして其の中に沒して自ら覺知せざらしむることなかれ。

第二に云何無貪心謂隨順無染法とは、謂く前の心と相違せり乃至進求すべき所の善處にも亦復願樂を生ぜず是の故に善法に染せず俱に善萠を障ふ、無染汙の心と名同うして事異なり最も須らく觀察すべし、是の故に行者但し貪心の實相を觀ずるに自然に貪して心を染せず、是くの如くの無慧不貪の行を起すべかべからず。

第三に云何瞋心謂隨順怒法とは、怒は謂く瞋心發動して事外に彰はる、心の法は識り難きを以ての故に怒法に順修するを以つて之を釋す、若し數かくの如くの不寂靜の相を起すは卽ち知んぬ、是れ瞋心の相なり、但し是の衆緣の中に於いて觀察するに瞋心自ら所住無うして則ち此の障生せず。

第四に云何慈心謂隨順修行慈法とは、此の慈は亦これ瞋と相違せり、愛見心垢の慈なり、善種所生にはあらず、上の慈の字は內心に據り下の慈の字は是れ外相所

爲の事業なり既に覺知し已んぬれば、但し妨道の失を治す轉轉して慈無量心を修する卽ち是れ對治なり。

第五に云何癡心謂順修不觀法とは謂く前の言の善惡是非を觀せず遇へば便ち信受す凡そ所爲の事業先づ慧心を以つて甄別して是非を籌量すること能はず、是くの如く等は諸の誤失多し皆これ痴心の相なり。

第六に云何智心謂順修殊勝增上法とは謂く是の人種種の所說の中に於いて皆智を以つて此れは勝たり此れは劣なり此れは受くべし此れは受くべからずと簡擇して其の勝上の者を取つて而して後に之を行ずるは卽ち是れ無癡の相なり、然も道人の法は智力の籌量の能く及ぶ所にあらず、唯し信ずるもののみ能く入るのみ、この故に世智辯聰の難を觀察する是れ彼の對治なり。

第七に云何決定心謂尊敎命如說奉行。

第八に云何疑心謂常收持不定等事とは今先づ疑心を釋することは決定心の相をして解し易く明了ならしめんが故なり、謂く此の人聞く所あるに隨つて便ち不決定の心を生ず、我れ今定めて戒を得し爲し得せざるべしや、或は師を疑ひ法を疑ふ諸事例して爾なり、人の道を行くに疑惑を以ての故に前進むこと能はざるが如し、智度の偈に云く乃至譬へば岐路を觀て好利の者の逐ふべきが如し、これ彼の對治なり、又決定心とは謂く善友等の如法の敎命を聞くに隨つて便卽ち疑慮を生せず心を至して奉行す然も亦當に慧を以つて觀察して正決定の心を生ずべきなり。

第九に云何闇心謂於無疑慮法生疑慮解とは謂く四諦不淨無常等の如きは世間の智者疑ひを生ずべからず、然も彼れ之を聞いて心に猶豫を懷くこと夜株杌を見て種々の憶度の心を生ずるが如し若し見に是くの如くの相あらば當に知るべし暗心の然らしむるなり。

第十に云何明心謂於不疑慮法無疑慮修行とは謂く決定の法印の疑慮すべきにあらざるの法に於いて彼れ聽聞する所に隨つて卽ち能く懸かに信ず當に知るべし是れ明心なり、然も是の中に若しは過ぎ若しは及ばざる、卽ちこれ道を障ふるの心なり更に中慧に處する是れ彼の對治なり。

第十一に云何積聚心謂無量爲一爲性とは謂く此の人一事に隨つて信解を生じ已つて更に種々の殊異の法を聞いて皆合集して一とす、人の一三昧を學得し已つて餘の經敎無量の法門差別の勝事を見て皆此の定心を說く、此れを離れて外に更に餘

法なしと謂ふが如し、故に積聚心と名く。

第十二に云何鬪心謂互相是非爲性とは謂く他の所說の言敎を聞いて常に好んで是非を辯論す、謂くこの義は爾るべし、この事は然らず假使言ふところ理に合へども亦種々の方便を以つて其の長短を伺求し失處に墮在せしめんと欲ふ、設ひ他來つて問ふときにも亦復その長短を求めて此の問は乖僻せり我れ答ふべからずと言ふ、是くの如くの相現ずることあるは當に知るべし是れ鬪心なり。

第十三に云何諍心謂於自己而生是非とは謂く內に是非の心を懷く自ら一義を思惟し竟つて輙ち復自ら異端を設けて其の失を推求し善心をもて人に諮受して既に領受し已ると雖も還つて自ら得失を推求し此の事は爾るべし此れは爾るべからずと謂ふが如し、多く是くの如くの相現ずることあるは當に知るべし是れ諍心なり。

第十四に云何無諍心謂是非俱捨とは梵本の轉聲に准せば云く六十心の下に於いて皆爲性の字ある合し例して知るべし、謂く其の心向背を懷かず先に宗習する所に是くの如くの見解を作すと雖も更に異言の違を以つて理に合するを聞いて卽ち之を受行し或は先には以つて是とすれども他の以つて不善とするを聞いて卽ち能く之を改む情に所執無うして是非俱に捨つ是くの如くの相あるが如きは當に知るべし是れ無諍心なり。無記無諍の心を覺知して諸法の實相無諍の心を修する是れ彼の對治なり。

第十五に云何天心謂心思隨念成就とは諸天の先世の果報を以ての故に若し所須あれば功力を加へざれども心に隨つて生ずるが如し數是くの如くの願樂を起すは當に知るべし是れ天心なり亦曾し上界に生ぜしに由るが故に此の習あり、若し眞言行人遠大の果を期せずして但し自心の爲に牽かるれば能く淨菩提心を障ふ、當に自ら覺知して世間の悉地を貪することなかるべし、これ彼の對治なり。

第十六に云何阿修羅心謂樂處生死とは阿をば名けて非とし修羅をば天と名く、其の果報、天に似たれども而も行業住處不同なるを以つての故に以つて名とす、此れ解脫の利ありと知れども但し深く生死の果報快樂を樂つて進趣すること能はず若し行人この相貌あらば當に知るべし修羅心と名づく、亦先世に曾し此の趣に生せしに由るが故に此の習あり無常苦等を觀察するに是れ彼の對治なり。

第十七に云何龍心謂思念廣大資財とは謂く數この念を作す、我れ當に何れの方便を以てか是くの如くの廣大の資財勝妙の珍寶を獲べき、此の多貪無厭の想あるはこれ龍趣の心なり、亦本龍趣の中より來るが故に此の習を生ず、熹んで行人をして

世間の悉地を願求せしめて出世の淨心を障ふ、少欲知足無常等を思惟する是れ彼の對治なり。

第十八に云何人心謂思念他利とは謂く好んで追求し思念すらく其甲は我に於いて恩あり、我れ當に是くの如くの方便を以つて大利を得しむべし、某甲は曾し我がところに於いて不饒益あり、今當に之を報ずべし及ひ種々に人を理り物を利する の計皆これ人心なり、當に自ら心行を觀じて早く法利を求め紛紜として他緣を思慮すべからずと念ずべし是れ彼の對治なり。

第十九に云何女心謂隨順欲法とは亦これ人趣の心なり但し多欲を以つて異とすまくのみ、經に說いて言ふが如し女人は多欲なること男子に百倍せり、常に所經の樂事を念じ或は他の容色姿態等を想ふ能く行者をして淨心を障蔽せしむ亦これ多生に曾し女人と作りしをもて猶し本習あり、是の中には不淨念處等を以つて身の實相を觀ずる是れ彼の對治なり。

第二十に云何自在心謂思惟欲我一切如意とは自在は卽ち外道の事ふる所の天神なり彼の宗の計すらく自在天は能く念に隨つて諸の衆生及び苦樂等の事を造すと此の法を修するもの亦常に念を係けて其の本尊の如くなることを得せんと願ふ、若し眞言行人數是くの如くの悉地を念じ我れ念に隨つて成就せんと念ずるは當に知るべし是れ自在心なり亦先習の然らしむるなり、當に諸法は皆悉く衆因緣に屬せり自在あることなしと觀ずべし、これ所對治なり。

第二十一に云何商人心謂順修初收聚後分析法とは世の商人の先づ務めて貨物を儲聚して然して後に之れを思惟し分析して此の物をば某の處の用に當て彼の物をば某の處の用に當てゝ大利を得べしといふが如く、若し行人先づ內外の學問を務めて周備せしめ已つて方に復籌量すらく此れはこれ世典なり此くの如くの處の用に當つて此れは二乘の法なり用つて其の人を接すべし、此れは大乘の資粮なり、是れ其の緣の所要なりと此れを商人心と名く、亦先習に由つて然らしむるなり、捷疾の智を修するこれ彼の對治なり謂く何れの法を聞くに隨つても卽ち彼の因緣の事用を觀ずべし、豈に多聞の蓄聚を待つて方に用處を求めんや。

第二十二に云何農夫心謂隨順初廣聞而後求法とは、稼を學ぶ者の老農に詢問すらく何んか地の良美を知り云何か耕植し耘耨する、云何か時を候ち云何が穫り藏むる、是くの如く一一に知り已つて方に功力に就くが如く此の心も亦爾なり先づ務めて智者に諮承し廣く道品を聞いて然して後に之を行ず皆宿習の然らしむるな

り、利智を以つて所對治とす、諸蘊無常なりと聞くが如きは卽ち界入緣起等も其の相例して皆爾なりと知る、又毒箭體に入るが如きは豈に三農の月を俟つて廣く問うて而して後に之を拔くことを得んや。

第二十三に云何河心謂順修依因二邊法とは、此の心の性は雙べて二邊に依る或る時には常を修し或時には斷を修し或は復邪正兼信す、河水の雙べて兩岸に依り其の漂流する所の物亦定めて一邊に係らざるがごとし、此の中の對治は謂く行人心を一境に專にすれば則ち能く至到するところあり若し心定守せずして能く事業をして俱に辨せしむといはば此の理なし。

第二十四に云何陂池心謂隨順渴無厭足法とは譬へは陂池の若し衆水流入すれども終に厭足なきが如く此の心も亦爾なり若し名利眷屬等の事その身に來集すれども終に厭足なし、乃至所學の法に於いても亦爾なり、已に乳の麋を得て務めて速に食せずして更に復渴して餘味を望むが如し、この中には少欲知足を以つて對治とす。

第二十五に云何井心謂如是思惟深復甚深とは、謂く俯して井水を闚るに淺深の量知り難きが如く、此の心の性も亦是くの如し、凡そ思惟する所好んで尙し深遠なり所有の善不善の事皆人をして測量すること能はず共住同事にも亦その心行を識らざらしめんと欲ふ、當に知るべし是れ井心なり緣起の法門及び善人の相は皆顯了にして知り易し是れ彼の對治なり。

第二十六に云何守護心謂唯此心實餘心不實とは世人の己が身の財物等を護らんが爲の故に乃若墻を周し閣を重ね種種に防守して他の爲に傷られしめざるが如く、此の心も亦爾なり、常に身心を守護することを乃至龜の六を藏め外境をして傷られしめざるが如し、謂く唯し此の行のみ實と爲つて諸餘の有作の務め皆不實なりとす、聲聞を學するもの多く此の心を生ずるなり、兼ねて他人を護るを以つて所對治とす、又人あつて自ら所解を保つて他の種々の異論に傷られしめんと欲はず餘の見解は悉く皆不實なりと謂ふ亦是れ是れなり。

第二十七に云何慳心謂隨順爲己不與他法とは謂くこの人の諸有所作皆ことゞくく自身の爲の故なり、財物伎藝乃至善法皆好んで秘惜して以つて人に惠まず此の相あるものは知ぬこれ慳心なり、施及び無常等を念ずるを以つて所對治とす、當に念ずべし財物伎能無常に設ふ時には我に隨つて去るものあること無し、然も今この身念念に自ら保つべからず、云何が此れを惜まんやと。

第二十八に云何狸心謂順修徐進法とは猫狸の禽鳥を伺ひ捕るに息を屏して靜に住して務めて速に進まず、度内に望み至つて然して後に之を取るが如く此の人も亦爾なり、種種の法要を聞くに遇うて但し作心して領受し記持すれども而も進行せず良縁の會合を待つて則ち當に勇健に勵んで之を行ずべしと冀ふ、又猫狸の種々の慈育を蒙れども亦恩分を識らざるが如く若し人但し他の慈慧善言を受くれども而も報を念せざるは是れ狸心なり、時處を待たずして聞くが如く輙ち行じ常に恩德を念ずるを以つて所對治とす。

第二十九に云何狗心謂得少分以爲喜足とは狗は薄福の因縁を以つて所期下劣なり故に少分麁鄙の食を得るに遇うて便ち喜足を生ず、若稍く此れに過ぐれば則ち本所望にあらざるが如く此の心も亦爾なり少分の善法を聞いて便ち行ぜんに盡くべからずと以爲つて復更に勝事を求めず此れは聲聞の種習の所生なり、增上の意樂を以つて所對治とす、乃至心は大海の少けれども亦拒まず多けれども亦溢さざるがごとし。

第三十に云何迦樓羅心謂隨順朋黨羽翼法とは此の鳥は常に兩翅を恃み其の身を挾み輔けて所往意に隨つて以つて大勢を成す假ひ一羽も少けぬれば則ち能く爲すところ無し此の心も亦爾なり常に多く朋黨と輔翼と相資くることを得て事業を成ぜんと念ふ、又他の所作に因つて而して後に心を發して獨り進むこと能はず如し人の善を行ずるを見ては便ち彼れ尙し能く行ずれ何ぞ爲さゞらんと念ふ、當に念ずべし勇健の菩提心は師子王の如くして助伴に藉らざるを所對治とす。

第三十一に云何鼠心謂思惟斷諸繫縛とは鼠は他の箱篋繩係等を見て輙ち好んで非理に損壞す亦念を作さず此れを斷ずるに由るが故に我をして是くの如くの利を得しむと、但爾趣なうして之を爲すが如く此の心も亦爾なり所有の繫屬と及び成事とに好んで問てを爲して之を俎敗す。

第三十二に歌詠心梵本に文欽けて釋せず、阿闍梨の言はく此れは傳法の音に喩ふるなり世人の曲を他より度して善巧を得已つて復他人の爲に之を奏するに種種の美妙の音を出し聞くもの歡喜するが如く此の心も他に從つて正法を聽聞し我れ當に轉衆生の爲に種種の文句を以つて莊嚴し分別し演說して此の妙音をして處處に聞知せしめんと欲ふ、多くこれ聲聞の宿習なり亦能く淨心を障ふ、當に念ずべし我れ當に內證自然の慧を得て然して後に普現色身をもて而も之を演說すべしと是れ彼の對治なり。

第三十三に云何舞心謂修行如是法我當上昇種種神變とは世人の支分散動するを說いて名けて舞とするが如く神變も亦爾なり、種種の末曾有の事を現じて前の人をして心淨く眼を悅ばしむ、多く是れ五通の餘習なし若し偏に是くのごとくの悉地を尙び方便をもて願求する亦淨心を障ふ、當に除蓋障三昧をもて心に散動無く神通をもて滅定を起たずして加持神變を作さんと念じて世間の小驗を貪ることなかるべし、これ所對治なり。

第三十四に云何擊鼓心謂修順是法我當擊法鼓とは鼓は能く衆生を警誡して覺悟を得しむ若し行人かくのごとくの念を作す、衆生長夜に昏寢す、我れ當に種種の無礙辯才を習ひ大法鼓を擊つて而も之を警悟すべしと亦能く淨心を妨礙するなり、當に念ずべし早く無量の語言陀羅尼を證して天鼓の妙音を以つて普く一切衆に告げんと、世間の小利を以つて大事の因緣を妨ぐることなかれ、これ彼の對治なり。

第三十五に云何室宅心謂順修自護身法とは人の舍宅を造立して其の身を庇し衞り寒熱風雨盜賊惡蟲等の種種の不饒益の事を免るゝことを得るが如く、此の心も亦爾なり、我れ當に戒を持し善を修して自ら防護するを以つて今世後世をして惡道の衆苦を遠離せしむ、多くこれ聲聞の習なり、當に一切衆生を救護せんと念じて獨り一身にあらざるべし是れ所對治なり。

第三十六に云何師子心謂修行一切無怯弱法とは、師子の諸獸の中に於いて所至の處に隨つて皆勝れて怯弱あること無きがごとく此の心も亦爾なり一切の事の中に於いて皆一切の人に勝れ心怯弱ならざらしめんと欲ひ、自心に難事あることなく能く我と其の優劣を稱ぶるものなからしめんと謂へり、若し自ら覺知し已りなば當に釋迦師子の心を發すべし當に一切衆生をして遍く勝れて優劣あること無からしむべし、これ所對治なり。

第三十七に云何鴞鵂心謂常暗夜思念とは、この鳥は大明の中に於いては能く爲すところ無く夜は則ち六情爽利なり、若し行者晝日は所聞ありと雖も誦習するに昏憒にして其の善巧を得ず、暗夜に至んぬれば所爲の事を思憶し重ねて復籌量するに便ち明了なることを得、乃至禪觀等を修するに亦暗處を以つて勝れたりとす、若し覺知し已なば當に等しく明暗に於いて作意するところ晝夜の別なからしめんと念ずべし、これ所對治なり。

第三十八に云何烏心謂一切處驚怖思念とは烏鳥は若し人善心をもて附近し惠養し

或る時には其の便りを伺求するに俱に猜畏の心を生じ一切時に性常に是くの如くなるが如く、此の心も亦爾なり、善友の饒益を爲さんと欲ひ及び之を陷誤するものなりと雖も一概に猜阻して疑懼を懷き、乃至戒を持し善を修する時にも亦生死に於いて驚怖の心を懷く若し覺知し已りなば當に安定無畏の心を修すべし、是れ彼の對治なり。

第三十九に云何羅刹心謂於善中發起不善とは、如し人の善事をなすを見ては皆不善の意解を作す、佛もろ〳〵の塔廟を造るものは無量の福を得と說きたまふ、而るを彼れ反つて是の言を作す、これに由るが故に横に無量の小蟲を損し施主を煩擾す將に何の益する所かある、當に苦報を受くべしと、發起といふは、謂く是くの如く等の不善の心を生起するなり、この中には但し功德利益を觀て彼の短を念せざるを以つて所對治とす。

第四十に云何刺心謂一切處惡作爲性とは猶し棘棗は一切處に於いて損妨する所多く、近くものをして不安ならしむるが如く、此の人の心も亦爾なり、若し善事を行ずるに大施等の如きは既に作し已つて便ち追悔の心を生ず、若し惡事を作し竟つて復つて自ら思惟して亦慚懼を抱く、この故に常に惡作を懷いて動慮不安なり

此の中の對治の法は若し犯あらば速に務いで懺除して悼悔を生ずることなかれ、所爲の善事をば自ら思惟して慶幸の心を生ずべし。

第四十一に云何窟心謂順修爲入窟法とは謂く諸龍阿修羅等は皆地下の或は海底深窟の中に在り、多く神仙の諸藥あつて能く長壽自在を得、行者或は彼の中に多く美女あり端正にして諸天に同じ夭逝の憂なく五欲自恣なるべしと念ひ、或は彼の中に留住して劫壽を得未來の諸佛を見たてまつるべしと念ずる皆これ窟心なり當に念ずべし法の如く修行して此の生に於いて法明道を見乃至成佛す可し、枉路に稽留して此の世仙の法を念ずべからずと、是れ彼の對治なり。

第四十二に云何風心謂遍一切處發起爲性とは風性は散亂なり不住に由るが故に此の人の心も亦爾なり一切處に於いて遍く善根を種う、謂く世間の外道種種の天尊及び三乘の諸行の中に於いて皆分あらしむ、而も是の念を作す、多くの種子をもて一切處に於いて之を遍すれば會ず成ずるものあるが如しと、當に知るべし是れ風心なり、當に念ずべし石田は不毛なり虛く種子を費す當に良美の福田膏腴の處を求めて專意耕耨すれば所獲必ず多かるべしと、是れ彼の對治なり。

第四十三に云何水心謂順修洗濯一切不善法とは、水性の清潔にして暫く諸垢の爲

に汙さると雖も之を澄ませば則ち淨く又能く垢穢を洗除するが如く、此の人の心も亦爾なり、常に垢惡を發露し三業の衆罪を懺洗せんと欲ふ。此れ垢これ淨なり我れ是くの如く行ずべしと見るを以つて則ち能く淨心を障礙す但し當に心の實相を觀じて本より來た垢法不生なりと了し自ら能く一切の蓋障を除くべし、これ彼の治行なり。

第四十四に云何火心謂熾盛炎熱爲性とは火性の赫奕として躁疾なるが如く此の人の心も亦爾なり、若し善を造る時には須臾の間に於いて能く無量の功德を成じ、惡を造るにも亦少時に極重の業を成ず此の中の治行は猛暴の心は敗傷するところ多し柔和慈善の水を以つて方便をもて滅せしめ而も熾然の善事を務めて恒に久しからしめんと思惟すべし、これ彼の對治なり。

第四十五に泥心梵本に文缺けて釋せず阿闍梨の言はく此れはこれ一向無明の心なり、乃至目の前の近き事も亦分別し記憶すること能はず、故に律に猶し泥團の如しといふ、又泥濘の淖弱なるが故に越度を事とし難きを以つて要ず由藉するところあらしむ、謂く橋梁等を假りて方に能く之を越ゆるが如し、若し此の方便ありと覺んぬれば必ず須らく善友に歸憑して方便をもて開發して乃ち能く漸く無知を去け還つて慧性を生ぜしむべし。

第四十六に云何顯色心謂類彼爲性とは譬へば青黃赤白等の染色に若し素絲之を入るゝ時には便ち與に色を同するが如く、此の人の心も亦かくのごとし、善法を見聞しては亦依隨し修學す、乃至無記も亦爾なり種々の境界に對して事に隨つて而も遷る行人自ら覺知し已りなば當に念ずべし自證の法を專求するには他に由つて悟らず、他緣の爲に轉せられずと、是れ彼の對治なり。

第四十七に云何板心謂順修隨量法捨棄餘善故とは、板の水中に在るに其の分量に隨つて諸物を受け限に過ぐるときには則ち勝ふること能はず、終に亦傾けて之を棄つるが如く、此の人の心も亦爾なり善法を簡擇して己が力分に隨つて一事を行じ已つて便ち是の語を作す、我れ承上以來唯しこの法をのみ行じて其の他を知らず、乃至八齋を習行しても卽ち捨離せず更に餘善を行せんと慕はず以つて廣大の心を發し菩提の行を學する是れ所對治なり。

第四十八に云何迷心謂所執異所思異とは、人の迷の故に意には東に向ふと欲つて而も更に西に向ふが如く此人の心も亦是くのごとし、意には不淨觀を學すと欲へ

ども而も反つて淨相を取つて自ら我れ今不淨觀を修すと謂へり、若し無常無我を修するときも反つて常我倒の中に行じて我れ今無常無我を修すと謂へり、心散亂するに由るが故に然らしむるなり、當に念ずべし其の心を專一にし審諦安詳にして無倒に觀察せんと是れ彼の對治なり。

第四十九に云何毒藥心謂順修無生分法とは毒は謂く龍蛇藥草もろ〳〵の惡毒なり、人の毒に中つて悶絶し轉死地に趣いて生分あることなきが如く、此の人の心も亦爾なり、善心をも生ぜず、乃至一切の心をも生起することを能はず、但し任運に行じて漸く無因無果の中に入る故に無生分の法と名く、行人自ら覺知し已りなば大悲の衆善を發起して斷滅の空を離るべし、即ち是れ所治の甘露の妙藥なり。

第五十に云何羂索心謂一切處住於我縛爲性とは人の羂索の爲に縛せられて乃至手足支節動轉すること得ざるが如く此の心も是くの如し斷見我縛の中に墮す、この見は能く行者の心を縛す乃至一切處に於いて常に爲に拘へられて自ら出づることを能はず最も是れ重障なり既に覺知し已りなば速に緣起正慧の刀を以つて障蓋を決除すべし、是れ所對治なり。

第五十一に云何械心謂二足止住爲性とは手に在るを杻といひ、足に在るを械といふ、人の械の爲に持らへらるゝが故に二足停住して前進むことを得ざるが如く、此の心も亦爾なり常に端坐を好み寂然に住立して而も定心を修し及び法義を觀察して此れが爲に拘へらるゝが故に名けて械心とす、この中の治行は當に一切時處に於いて思惟し修習して靜亂無間ならしむべしと、これ所對治なり。

第五十二に云何雲心謂常作降雨思念とは西方の夏三月の中の如きは霖雨特に甚しうして常に滯淫昏墊なるを以ての故に時俗憂樂思慮の心蔚翳滋く多し故に降雨の時の思念を作すといふ、覺知し已りなば則ち當に捨心を行じて世間の憂喜を離れ法喜に隨順すべし、これ所對治なり。

第五十三に云何田心謂常如是修事自身とは人の良美の田あるに常に修治し耕墾して荒穢を芸除し種種の方便をもて清淨なることを得しむるがごとく此の人も亦爾なり常に好んで其の身に事ふることを修するに香花滋味等を以つて灌塗し奉養し務めて光潔嚴好ならしむ、覺知し已りなば常に念ずべし此の功力の其の心に事ふることを修するを廻して是くの如くの諸の供養の具を以つて福田に播植して勝果を資成せんと、これ彼の對治なり。

第五十四に云何鹽心謂所思念彼復增加思念とは、鹽性の鹹らくして凡そ所入の處あるに皆鹽味を增すが如く此の人の心も亦是くの如し所思の事に於いて復思念を加す、慾色を憶想するのときの如きは適に此の意を生じて還つて復自ら推求すらく是の心は誰れに由つてか而も生ずる、何の相貌をか作す、これを觀ずる心未だ決せざるに復此の推求の慮は何の因緣かあると念ず、是くの如く則ち窮盡無し、既に覺知し已りなば當に一向に心を諦理に安して務めて穿徹ならしむべし、又心性は念を離れて憶度の能く知るにあらず、分別の上に於いて更に心數を增せざれ。第五十五に云何剃刀心謂唯如是依止剃除法とは鬚髮を剃除するは是れ離俗出家の相なり、謂く此の人心に但し是の念を作す、我れ已に俗相を剃除して惡法をして復た滋きことを得ざらしむ、更に何の求むるところかあらんと、當に知るべし、此の心は最惡なり自ら分限を作すを以つての故に能く所有の善根を剃除して生ずることを得ざらしむ、當に念ずべし一切賢聖の斷ずべき所のものは、謂はゆる無明住地三毒の根なり若し能く此れを剃つて妄想をして生ぜざらしむるを乃ち眞の出家と名く。

第五十六に云何彌盧等心謂常思惟心高擧爲性とは須彌山の高くして衆峯に絕え能く其の上に出づるもの無きが如く、此の人の心も亦爾なり常に高擧を以つて性とす乃至師僧父母等の尊敬すべき所の處にも皆意を下すこと能はず、猶し高幢の屈撓すべからず若し之を撓はめんと欲すれば要必ず當に折れぬべきが如くして終に其の常操を改めず、忍辱謙卑を以つて一切衆生に於いて大師の想を作すを所對治とす。

第五十七に云何海等心謂常如是受用自身而住とは譬へば大海の百川之に歸すれども呑納して限り無きが如く、この心も亦爾なり一切の勝事に於いて皆之を己れに歸せしむ、餘人を嫌うて比するものあること無からしめんと謂へり、常に自ら是くの如くの衆多の所長を恃んで自ら此れを受用して而も住す、前の心は務め高し此の心は務め廣し故に海と等同なりと云ふ、行者覺知し已りなば當に念ずべし三賢十聖等の無量の大功德海は展轉して深廣なり自ら心行を尅するに曾つて未だ其の塵滯を得ず、大慢の心を起すべからずと。

第五十八に云何穴等心謂先決定彼後復變改爲性とは、譬へば完堅の器の後に若し緣に遇うて穿穴するときには堪任するところ無きが如く此の心も亦爾なり、初時には受持する所多く後に稍穿漏す、或は初め發心受戒せしときには具足して缺け

たること無く久しからずして漸く漏法を生ず、已敗の器に同じて法水停まらず凡そ此くの如くの例皆穴心と名く、故に行者當に所爲の事をして皆終始あらしむべし、又性多く變改するは最も能く堅固の菩提心を障礙すと知るを彼の對治とす。

第五十九に云何受生心謂諸有修習行業彼生心如是同性とは人の白黑の業に由つて善惡の報を受け所作種種に雜するに由るが故に彼彼の無量差別の身を受くるが如く、此の心も亦爾なり所修の諸行皆受生に廻向せんと欲ふ、當に知るべし、得果にも亦善惡を兼ぬ、故に行者當に念ずべし善惡を甄擇して不善を除去し純ら白法を修し此の善の中に就いて又復慧を以つて更に麁鑛を去つて是くの如く次第に乃至純一清淨の醍醐の妙果を成ずることを得んとこれ所對治なり。

第六十心は梵本に文缺けたり、阿闍梨の云はく一の猨猴心少けたり、猨猴の性は身心散亂して常に暫くも住せず行人も亦爾なり、その性躁動して不安なるが故に攀緣するところ多し猶し猨猴の一を放ちて一を捉るが如し、大略これを言はば衆生は盡く然なり、今偏盛なるに就いて而も言ふ、此の中には動散の想に隨はずして緣を一境に繫くるを以つて是れ所對治なり、猶し猨猴の若し之を柱に繫けぬれば則ち復情を肆にして跳擲騰躍せざるが如し、これ所治なり、然も此の六十心は或る時には行者の本性偏多なり或は道を行ずる用心に由つて先習を發動す、或は一時に雜起し或は次第に而も生ず當に一切時に於いて心を留めて覺察すれば自然に淨菩提心に順ずることを得べし、若し阿闍梨、弟子の爲に心地を平治せん時亦當に一一に簡去すべし。

大毗盧遮那成佛經疏卷第二終

大毗盧遮那成佛經疏卷第二　末

沙門一行阿闍梨記

入眞言門住心品第一の餘

經に秘密主一二三四五再數凡百六十心越世間三妄執出世間心生乃至四分之一度於信解といふは、亦これ諸心相及び心殊異を荅す、無明あるに由るが故に五根本の煩惱の心を生ず、謂く貪瞋癡慢疑なり、五見を說かざる所以は屬見の煩惱多く六十心の中に在るを以てなり、此の五根本の煩惱初に再數すれば十と爲り、第二に再數すれば二十と成り第三に再數すれば四十と成り第四に再數すれば八十と成り第五に再數すれば一百六十心と成る、故に一二三四五再數成百六十心といふ、衆生の煩惱の心は常に二法に依つて中道を得ざるを以ての故に事に隨つて名を異んず、輙ち分つて二とす此の二が中に就いて復更に展轉して細しく之を分つ、其の名相は具に十萬の偈の中に說くが如し、若し更に上中下九品等に約すれば乃至八萬の塵勞と成る、廣すれば則ち無量なり譬へば一種子より五根本を生じ、一の根本に於ては皆破して二枝とす、第五の破に至つて則ち百六十の小枝と成る、此れより復た更に離分すれば則ち條葉勝計すべからざるが如し、又劫初の時の如きは人皆化生にして念を以つて食とし身光自然にして安樂無礙なり、然れども心の實相を知らざるを以つての故に稍く地肥を貪著す食味の多小に由つて色貌隨つて異なり是非勝負の心此れに猶つて生ず憍慢の心あるを以ての故に福利衰滅して地肥隱沒し乃至地膚林藤亦復現せず次に自然の粳米を食するに始めて男女の類あつて婬盜殺妄等の種種の非法次第に而も起こる是の事は阿含の中に廣く明せり、是より以來た種種の族性種種の方俗あつて種種の業煩惱の結を起し種種の衆生趣を成じ種種の五陰の身を造す、一切智人にあらざるよりは則ち其條末を究むること能はじ諸の阿闍梨此の喩を爲す所以は一無明の心事に隨つて離分すれば卽ち阿僧祇の妄執と成ることを表せんと欲ふなり。

越世間三妄執出世間心生とは若し淨菩提心を以つて出世間の心とせば卽ち是れ三劫を超越する瑜祇の行なり、梵に劫跛といふに二義あり、一には時分、二には妄執若し常途の解釋に依らば三阿僧祇劫を度して正覺を成ずることを得、若し秘密の釋ならば一劫を超ゆる瑜祇の行といふは卽ち是れ百六十心等の一重の麁妄執を度するを一阿僧祇劫と名く、二劫を超ゆる瑜祇の行といふは又百六十心等の一重

の細妄執を度するを二阿僧祇劫と名く、眞言門の行者復た一劫を越ゆといふは、更に百六十心等の一重の極細妄執を度して佛慧の初心に至ることを得、故に三阿僧祇劫成佛と云ふ、若し一生に此の三妄執を度すれば卽ち一生に成佛す何ぞ時分を論せんや、然も第一重の內に就いて最初に唯蘊無我を解了する時を卽ち出世間心生と名く、世間の六十心を度して我倒所生の三毒の根本を離るゝを越三妄執と名く、復次に三妄執あり、所謂根境界淹留修行なり、根は六根、境は謂く六塵、界は謂く六識界なり、內外の十二界の如きは卽ち是れ根境なり故に合して之を言ふ、これは是れ三果の學人の所留滯の處なり、故に淹留修行といふ、復次に三妄執あり所謂業煩惱の株杌と及び無明の種子となり卽ち是れ無學聖人の所斷最難斷處なり、凡そ三種の三妄執あり。

學摩訶衍の人初めて出世の初心を得るは小乘の見道と適に齊し然れども聲聞の正位に墮せず、爾る所以は彼れ初發心より卽ち心性は但し我倒の爲に覆はれて未だ現前することを得ずと知るに由つて、爾の時に諦に陰界入等は悉く緣より生じて無常變異なり、是の中に何者か是れ神ならんやと觀ず、是くの如くの推求を作すとき卽ち神の本不生を了し無量の見網を度して淨菩提心少分增明す菩提心の勢力を得るに由つて所以に二乘地に墮せず、然も彼の行者法執あつて心に當つて若し禪定道品種種の諸度を修するとき中に於いて諸の我倒を起さずと雖も而も心、禪慧等の法に住して稽留淹滯して速に菩提に至ること能はず、如實の巧度にあらざるを以ての故に淹留修行と名く、然も亦稍く下地の三執を離れて能く業煩惱の根本無明の種子十二因緣を生ずるを拔く、是くの如くの甚深の法は有佛無佛性相常爾なりと知る、前きの所說の如く、建立の淨不建立の無淨等の種種の宗計皆相應せず、乃至長爪梵尼諸大論師等自心の智慧利根にして諸法の實相を推求すれども皆亦圖度すること能はず、此の十二因緣の義は稻芊等の經に廣く明すが如し、湛寂といふは寂は是れ不生の義、謂く五根本の煩惱及び百六十の隨煩惱等皆畢竟不生なるが故に名けて寂とす、湛といふは是れ甚深の義、譬へば淸潭萬仞にして澄恬鏡徹せるを之を臨み視るもの淺深を測らざるが如し、故に說いて三獸河を渡るに各足迹の所至の處に隨ふ獨り大香馬王のみあつて能く漸次に深く入つて其の源底に到ると云ふのみ、此の中に三乘の人あつて同く無言說の道を以つて諸法の實相を得、然も聲聞は法性に入ることを最も淺し故に生死を厭怖して自ら已に涅槃を得と謂つて滅度の想を生ず、辟支佛は所入差深し故に生死に於いて甚だ怨遽

せず然も方便力を以つて大悲を發起すること能はず、菩薩は是くの如くの法を悟る時卽ち是の心垢漸く除く所以に淨心漸く現ずと知る。爾の時に便ち菩提心の勢力を得て能く不住の道を以つて種種の度門を學す、故に同共一法の中にして而も昇沈異なることあり。

經に一切外道所不能知といふは此の宗の中に兩種の外道ありと說く、外の外道は猶し淸潭を覩見して逆め怖畏を生じ敢へて習近せざるが如し、內の外道は能く其の中に游泳して熱を適め垢を除いて淸涼の樂を得と雖も、然も是の中に無量の寶王ありいふことを覺らず、一は則ち入らずして識らず、二は則ち入つて而も識らず、故に一切外道不能知といふ、先佛宣說離一切過とは言く十方三世の諸佛は唯し此の一門のみあつて群迷を誘進し火宅を出したまふ、この處は復障礙無く戲論生ぜず、故に種種の因量の諸師能く其の過を出すもの無し然も未だ法障を度せざれば未だ眞淨の菩提心と名けず、蓮華の已に濁泥を離れたれども尙し未だ水を出でざるが如し、故に經に彼出世間心住蘊中といふ、行者瑜伽の中に於いて湛寂の心已に明顯なりと雖も然も事に涉るとき根塵識等猶尙し心に當るを以つて有爲を厭怖するに由るが故に無爲の法に著す、然れども菩提心の勢力を以つて自然に他教に由らず、是くの如くの慧隨つて生ずることあり、能く蘊等に於いて其の心を發起して離著の方便を修するに五種の譬喩に於いて無性空を觀察す初の句に聚沫を觀察すとは水上の浮沫は目覩つべく種種の形ありと雖も性實を推求するに了に不可得なるが如く色陰も亦爾なり、若しは龕、若しは細、衆緣より生ぜざることなし、緣生の生は無性なり卽ちこれ色の本不生なり、次の句に浮泡とは夏時の暴雨には水上に浮泡あり亦但し衆緣に屬す、四句をもて之を觀ずるに都べて起滅なきが如く受陰も亦爾なり諸の苦樂等は皆情塵和合に從つて生ず、從緣は無性なり卽ちこれ受の本不生なり、次の句に陽炎とは春月の地氣日光之に望むに水の如し迷渴のもの企求の心を生じて奔趣す徒に勤めて去り之くに彌遠きが如く、衆生も亦爾なり、緣起の性空を知らずして有法の想を生ず若し實相を悟るは卽ち想の本不生なり、次に芭蕉とは人芭蕉の中の堅實を求めて乃至分分に之を披析し隣虛に至るに亦不可得なるが如く行陰も亦爾なり、一微動境に涉るに衆緣より生ぜざると無し、緣生は無性なり、卽ちこれ行の本不生なり、次に幻事とは世間の呪術藥力の人の心を蔽惑して種種未曾有の事を現ずるが如く識陰も亦爾なり、一念の無明より幻心初めて三界に出づ、其の源本を究むるに都べて生滅去來なし、當に知

るべし衆縁より生ずるは自性なきが故に亦復本不生なり、聲聞經の中には此の五喩を說くと雖も而も意は無我を明せり、今この中の五喩は意諸蘊の性空を明す、五蘊を觀ずるが如きは、當に知るべし十二入十八界六入十二緣等皆廣く分別して說くべし大般若の中の說の如し。

行者かくの如く觀察するとき無性門より諸法の卽空に達し一重の法倒を離れて心性を了知することを得、是くの如く蘊界處能執所執の爲に動搖せられず、故に證寂然界と名づく、此の寂然界を證するとき漸く二乘の境界を過ぐ蓮華の未だ開敷せずと雖も而も稍く淸流の上に出づるが如く行者も亦爾なり、復心蘊の中に沒せず故に出世間心と名づく、若し正譯に據らば當に上世間心といふべし。

秘密主彼離違順八心相續業煩惱網とは前の所說の如く種子根疱等及び三寶に歸依し人天乘の爲に齋施の善法を行ずるを皆順世の八心と名く若し三乘の初發道意より業煩惱の根本無明の種子の十二因緣を生するを拔くに迄至を違世の八心と名づく、或は見道修道等の諸位に就いて之を分つに各自ら八心あるべし、大乘の行者諸蘊の性空を了達するが故に一切法の中に於いて都べて所取もなく、亦所捨もなし、雙べて違順の八心と我蘊兩倒二種の業煩惱の網とを離るゝを是を一劫を超越する瑜祇の行と名く、瑜伽といふは譯して相應とす、若し女聲を以つて之を呼ばば則ち瑜祇といふ、所謂相應とは卽ちこれ觀行應理の人なり、常途の解釋に依らぼ是の菩薩發心より以來た一大阿僧祇劫を經て方に是くのごとくの寂然界を證す、今秘密宗には但し此の一重の妄執を度する卽ちこれ一阿僧祇劫を超ゆるなり、行者未だ此の劫を過ぎずして辟支佛の位と齊しきときを名づけて極無言說處とす、爾の時に心無爲の法相に滯る、若し方便を失すれば多く二乘地に墮し小涅槃を證す、然も菩提心の勢力を以つて還つて能く悲願を發起す、此れより以後三乘の經路始めて分る、然も所觀の人法俱空、成實諸宗と未だ甚だ懸に絕えず猶し偏眞の理に約して此の平等の觀を作すのみ、故に三乘の上中下の出世間の心を以つて一僧祇劫に合論す、第二僧祇に至つて乃ち二乘と異なり。

經に復次秘密主大乘行發無緣乘心法無我性何以故如彼往昔如是修行者觀察蘊阿賴耶知自性如幻陽焰影響旋火輪乾闥婆城といふは、卽ちこれ第二重に法無我性を觀ずることを明す、梵音に莽鉢羅といふは是れ無の義なり亦これ他の義なり、所謂他緣乘とは謂く平等の大誓を發して法界衆生の爲に菩薩の道を行ず乃至もろ〳〵の一闡提及び二乘の未入正位のもの亦當に種種の方便を以つて折伏攝受して普く

同くこの乘に入れしむべし、此の無緣の大悲に約するが故に他緣乘と名つく、又無緣乘とは此の僧祇に至つて始めて能く阿陀那深細の識を觀察し、三界は唯心なり心の外に更に一法として而も得べきもの無しと解了す、此の無緣の心に乘じて而も大菩提の道を行ず、故に無緣乘と名づく、此の無緣乘の心は卽ち是れ法無我性なり、行者初劫に觀行を修せしとき心蘊の中に沒するを以ての故に五種の無性空門を以つて法無我を觀ず、然も緣生の中道に望むるは猶し對治悉檀に屬す、若し般若の方便を失すれば卽ち斷滅に墮して惡取空のもの濫方廣道人と名づく、今大乘不可得空の相は空相も亦不可得なり、諸法は所有なしと觀ずと雖も然も亦諸法に於いて所空なし、故に離有離無の道を須つて法無我性を觀ず、智障を淨除せんと欲ふが爲の故に古昔の諸の菩薩の修學に隨順して蘊の阿賴耶を觀ず卽ち楞伽解深密等の經の八識三性三無性皆これ此の意なり。

經に知自性といふは、卽ちこれ三界唯心を知るなり幻陽焰影響旋火輪乾闥婆城の六喩の如きは皆これ雙べて有無を辯じて蘊の阿賴耶の別ち緣起の義を明すなり。前劫の上の五喩に無性空を觀ずる意と復殊なることあり。阿賴耶といふは義には含藏といひ、正翻には室とす、謂く諸蘊この中に於いて生じ、この中に於いて滅す卽ちこれ諸蘊の巢窟なり故に以つて名とす、然も阿賴耶に三種の義あり、一には分別の義、二には因緣の義、三には眞實の義なり、大乘莊嚴論の求眞實の偈の中にいふがごとし、離二と及び迷依と無說無戲論とを以つての故に、知るべし三性俱に眞實なり、云ふ所の離二とは謂く分別性の眞實なり能取所取畢竟じて無なるに由るが故に迷依とは謂く依他性の眞實なり、此れに由つて諸の分別を起すが故に、無說無戲論とは謂く眞實性の眞實なり、自性無戲論に由るが故に、次に求眞實の譬喩を說く、偈に云く彼の幻を起す師の如く譬をもて虛分別を說く彼の諸の幻事の如く譬をもて二種の迷を說く、釋して曰く幻師の呪術力に依つて木石等を變じて以つて迷因とするがごとく、是くの如く虛分別の依他性も亦爾なり、種種の分別を起して顚倒の因とす、又幻像の金等の種種の相貌顯現するが如く、是くの如く所起の分別性も亦爾なり、能取所取の故に二迷恆時に顯現す、次の偈に云く彼れ無體のごとくなるが故に第一義に入ることを得、彼れ可得のごとくなるが故に世諦の實を通達す、此の中の意の言く彼の幻者と幻事との實體あること無きが如きは此れ依他分別の二相の亦實體なきに譬ふ、この道理に由つて卽ち第一義諦に通達することを得、又幻者と幻事との體亦得べきが如きは此をもて虛妄分

別に譬ふること亦爾なり、此の道理に由つて卽ち世諦の實を通達することを得、又偈に云く彼の事無體の故に卽ち眞實の境を得、是くの如く轉依の故に卽ち眞實の義を得、釋して云く若し人彼の幻事無體なりと了すれば卽ち木等の實境を得、若し諸の菩薩彼の二迷無體なりと了して轉依を得る時に卽ち眞實性の義を得るなり、又偈に云くこの事彼の處に有なり彼の有體亦無なり有體有なること無きが故に、この故に是れ幻と說く此の偈は幻事有にして而も非有なることを明す、何を以つての故に有といふは謂く幻像の事彼の處に顯現するが故に非有といふは謂く彼の實體不可得なるが故に是くの如く有體と無體と無二なり此の義に由るが故に彼れ是れ幻と說く、又偈に云く無體、無體にあらず、無體にあらざるは卽ち體なり、無體と體と無二なり、是の故にこれ幻と說く、此の偈は幻事非有にして而も有なることを明す、何を以ての故に非有といふは謂く彼の幻事無體なり、實體なきに由るが故に而有といふは謂く幻事、無體にあらず、像顯現するに由るが故に是くの如く無體と有體と無二なり、この義に由るが故に彼れ是れ幻と說く此の幻は卽ち諸蘊に譬ふ、この故に當に知るべし虛妄分別は有にして而も非有なり、何を以つての故に彼の二影顯現すれども而も實體不可得の故に、故に色等の有體卽ちこれ無體なりと說く、復次に虛妄分別は非有にして而も有なり、何を以ての故に彼れ二つながら都べて實體なけれども然も影顯現することあるが故に、故に色等の無體と有體と無二なりと說く、この有と無と不二なるに由つて能く建立と誹謗と及び小乘の寂滅に趣くとを遮す、然る所以は無體に由つて無體を知るが故に安立すべからず、有體に由つて世諦を知るが故に誹謗すべからず、又彼の二つ別なきを以つての故に體を厭ひ小涅槃に入るべからず、彼の偈に又云く幻像と及び取幻とは迷の故に二ありと說く、是くの如く彼の二つ無けれども而も二あると得つべく、骨像と及び取骨と觀の故に亦二と說く、無二なれども而も一と說く、得つべきこと亦是くのごとし、前の偈の意の云く迷人は幻像と及び取幻とに於いて迷を以ての故に能取所取の二事ありと說く、彼の二つ無しと雖も而も二を得つべし、迷に由つて顯現するが故に後の偈の意の云く、觀行人も亦爾なり骨像と及び取骨とに於いて觀に由るが故に能觀所觀の二事ありと說く、彼の二つ無しと雖も而も二つ亦得つべし觀に由つて顯現するが故に。

問うて曰く、是くの如く觀じ已つては何れの法をか所治とする、故に彼れに復二偈を說いて云く知るべし所治の體は謂く彼の法の迷相なり、是くの如くの體無體

にして有と非有と如幻なり、知るべし能治の體は念處等の諸法なり是くの如くの體無相なり如幻なること亦是くの如し、前の偈の意の云く何なるが所治の體卽ちこれ迷法の相なり、迷法の相とは謂く是くの如く是くの如くの體の故に然も是くの如くの體は說いて有とすべし、虛妄分別に由るが故に亦非有と說く、能取所取の二體と非體と別なきに由るが故に是くの如く有も亦如幻なり無も亦如幻なり、故にこの相如幻なりと說く、後の偈の意の云く能治の體は卽ちこれ諸法なり謂く佛所說の念處等も是くの如く是くの如くの體の故に彼の體も亦皆如幻なり、何を以ての故に諸の凡夫の所取の如きは是くの如く是くの如く有體の故に、諸佛の所說の如きは是くの如く是くの如く無體の故に、是くの如くの體は無相なれども而も佛世尊、入胎出生踰城出家成等正覺を示現したまふ、是くの如く無相なれども而も影顯現す、この故に如幻なり、問うて曰く若し諸法同く如幻ならば何の義を以ての故にか一をば能治とし、一をば所治とする、彼の偈に答へて言く、譬へば强幻王の餘の幻王をして退かしむるが如く是くの如く清淨の法は能く染法をして盡さしむ、此の義に由るが故に菩薩は衆行を修すと雖も而も無所得なり、彼の論に蘊の阿賴耶を觀察して自性如幻なりと了知することを明す、最も此の經と符會せり故に具に之を出だす、當に知るべし陽焰影響旋火輪乾闥婆城も亦かくの如く廣く說くべし、前劫の五喩に泡沫芭蕉あり、此の中に論ぜざる所以は、此の三事猶し析法を帶して無性空を明せり、然も此の中の幻焰等の喩の意は唯識無境體法難解の空を明す卽ちこれ麁相轉融するが故に論ぜざるなり、行者諸蘊唯心と解するときは卽ちこれ法の自性を知る、未だ是くの如くの自性を了せざるときには有所得に墮せんことを畏るゝが故に理を盡くして有を觀ずること能はず、斷滅に墮せんことを畏るゝが故に理を盡くして空を觀ずること能はず、但し有を見ることの明ならざるのみにあらず亦復空を見ることも未だ盡くさず、今如幻等の門を以つて有空不二を照らして而も人法二空の相亦心に當らず乃ち眞に法空に入ると名づく唯識の性を悟るが故に。

經に秘密主彼如是捨無我心主自在覺自心本不生といふは、心主は卽ち心王なり、有無に滯らざるを以つて心に罣礙なく所爲の妙業意に隨つて能く成ず故に心主自在といふ、心主自在といふは卽ちこれ淨菩提心の更に一轉の開明を作して前劫に倍勝せるを明すなり、心王は猶し池水の性の本より清淨なるが如し心數は淨除すること猶し客塵の清淨なるが如し、是の故にこの性淨を證するとき卽ち能く自ら

心の本不生を覺る、何を以ての故に心は前後際俱に不可得なるを以ての故に、譬へば大海の波浪の緣より起するを以ての故に卽ち是れ先にも無く後にも無し而も水性は爾らず波浪の緣より起するときに水性は是れ先に無きにもあらず、波浪の因緣盡くるときに水性はこれ後に無きにもあらざるが如く心王も亦復是くのごとし前後際なし、前後際斷するを以ての故に復境界の風に遇うて緣に從つて起滅すと雖も而も心性は常に生滅なし此の心の本不生を覺るは卽ち是れ漸く阿字門に入る、爾の時に復百六十心等の塵沙の上煩惱の一重の微細妄執を離るるを第二阿僧祇劫と名づく、故に經に知自心性是超越二劫瑜祇行といふなり、此の中の無爲生死の緣因生壞等の義は勝鬘寶性佛性論の中に廣く明すが如し、今且く宗義を明すが故に詳に說かず、然れども上來は始を原ね終りを要むるに一毫の善を發すより以た人法有無の二障を超度するに至るまで宗極炳著にして轉妙轉深なりと雖も猶し是れ心外の垢を對治して尙し未だ此の心中秘密種種不思議の事を開かず此れより以後方に乃ち之を說くべし若し此くの如くの對辯を作さずんば則ち常情各先習を翫んで其の微妙を覺ること能はじ。

經に復次秘密主眞言門修行菩薩行諸菩薩無量無數百千俱胝那庾多劫積集無量功德智慧具修諸行無量智慧方便皆悉成就といふは、卽ちこれ第三劫を超ゆるの心を明さんと欲して見聞者をして信樂し尊重せしめんと欲ふが故に先づ其の功德を歎ずまくのみ、知るべし餘敎の中の菩薩の如きは方便對治の道を行じて次第に漸く心垢を除き無量阿僧祇劫を經て或は菩提に至ることを得るあり、或は至らざるものあり、今この敎のもろ〳〵の菩薩は則ち是くの如くにはあらず、直に眞言を以つて乘として淨菩提心門に超入す、若し此の心明道を見るときには諸の菩薩の無數劫の中に修する所の福慧自然に具足す、譬へば人あつて舟車を以つて跋涉し險難惡道を經て五百由旬に達することを得、更に一人あつて直に神通に乘じて空を飛んで度す、その經過するところ及び至到のところ則ち異なしと雖も而も所乘の法に殊あるが如く、又世尊先に廣く如上の諸〳〵の心相を說きたまふ所以は眞言門の諸の觀行人をして若し是くの如くの境界に行至せんとき則ち須らく明に識つて未到を到と謂うて中路に於いて稽留することを得ざらしめんが爲なり。復次に輪王太子の如きは初めて誕育するとき衆相備足して缺減するところ無し、未だ能く遍く衆藝を習ひ四洲を統御せずと雖も然も已に能く七寶を任持し聖王の家業を成就す、何を以つての故に、卽ちこれ輪王の具體なるを以つての故に眞言行者の初

めて淨菩提心に入ることも亦復是くのごとし、未だ無數阿僧祇劫に於いて具に普賢の衆行を修し大悲方便を滿足せずと雖も然も此れ等の如來の功德皆已に成就す、何を以つての故に卽ち是れ毗盧遮那の具體法身なるが故にこれを以つて經に無量無數劫乃至智慧方便皆悉成就といふなり、又王子の始めて生ずるとき又已に龍神兆庶の宗歸するところなるが如く初發淨菩提心も亦復かくのごとし、已に天人世間の正道を迷失せるものの爲に大歸依と作る、若し常途の諸論に明す所はこの心を證するときを卽ち名づけて佛とす、この故に舍利弗等の一切の聲聞緣覺その智力を盡くせども測量すること能はざれば、經に所謂出過一切聲聞辟支佛地といふなり、以に行者この心を得るとき卽ち釋迦牟尼の淨土毀せずと知り、佛の壽量長遠本地の身、上行等の從地涌出のもろ〳〵の菩薩と一處に同會すと見る、對治道を修するものは迹補處に隣ると雖も然も一人をも識らず是の故に此の事を名づけて秘密とす、又この菩薩能く畢竟淨心の中に於いて普く十方法界の諸佛菩薩を集會せしめ亦自ら能く普く十方に詣して諸の善知識を供養し正法を詢求す唯し獨り自ら明了にして諸天世人は能く知ること莫し此の因緣に由つて復秘密と名づく、前二劫の中に二乘地を度すといふと雖も須菩提等猶し能く佛の威神を承けて人法俱空を衍說すと雖も、而も此の秘密一乘に於いては心に驚疑を生じ所趣を知らざれば乃ち直に聲聞辟支佛地を過ぐと名く、時に大威德の諸天菩薩の心の所依處を見ざれども咸く敬信を生ず、故に釋提桓因かくの如くの願を作して言さく今この上人久しからずして成佛すべし若し彼れ成佛の時には我れ當に吉祥草を奉るべし、四天王亦この念を生じて言さく若し此の菩薩成佛のときには我れ當に鉢を献ずべしと、梵天王亦この念を生ず、若し此の菩薩成佛のときには我れ當に轉法輪を請すべしと、故に親近敬禮といふなり、已に入眞言門の功德を歎じ竟んぬ、然も行者復何れの法を以つてか此の門に入るや故に經の次に所謂空性といふ、空性といふは卽ちこれ自心等虛空の性なり上の文に無量如虛空乃至正等覺顯現といふ、卽ちこの心を喩せり、前劫には萬法唯心にして心の外に法なしと悟る、今はこの心卽ち是れ如來の自然智なり亦これ毗盧遮那の遍一切身なりと觀ず、心かくの如くなるを以つての故に諸法も亦かくの如し、根塵皆阿字門に入る、故に離於根境と曰ふ影像常寂滅光を出でず故に無相といふ、心の實相智を以つて心の實相を覺る、境智皆これ般若波羅蜜なり、故に無境界と曰ふ、此の中の十喩を前の十喩に望むるに復戲論と成るを以つての故に越諸戲論と曰ふ、第三重の微細の百

六十心の煩惱業壽の種を除いて復佛樹の牙生ずることあり、故に等虛空無邊一切佛法依此相續生といふ、既に因緣を壞せずして卽ち法界に入る亦法界を動せずして卽ちこれ緣起す、當に知るべし因緣の生滅は卽ちこれ法界の生滅なり法界の不生滅は卽ちこれ因緣の不生滅なり故に離有爲無爲界といふ、若しは如來の出世にも若しは不出世にも諸法法爾にして是くのごとく住す、故に離諸造作といふ、般若の中にいふが如し一切の法、眼に趣きぬれば是の趣に過ぎず猶し百川の海に赴きぬれば更に去處なきが如し、この故に當に知るべし眼卽ち是れ第一實際なり第一實際の中には眼すら尙し不可得なり、何に況んや趣不趣をや、耳鼻舌身意も亦是くのごとし、故に離眼耳鼻舌身意といふ。行者是くの如くの微細の慧を得る時一切の染淨の諸法を觀ずるに乃至少分猶し隣虛の如きも緣より生ぜざるもの無し、若し緣より生ずるは卽ち自性なり若し自性なきは卽ちこれ本不生なり本不生は卽ちこれ心の實際なり、心の實際も亦復不可得なり、故に極無自性心生といふなり、この心を前二劫に望むれば猶し蓮華の盛に敷きたるがごとし、若し後二心に望むれば卽ちこれ果復つて種と成る、故に如是初心佛說成佛因故於業煩惱解脫而業煩惱具依と曰ふ、この中に佛說といふは世尊、十方三世の佛を以つて證としたまへり言く此の一事の因緣を以つて衆生の爲に淨知見を開きたまふ、其の道玄に同なり、行者一切の業煩惱を解脫するとき卽ち一切の業煩惱は佛事にあらざること無しと知る、本より縛あること無し、誰をして解脫せしめんや、良醫の毒を變じて藥と爲して用て衆病を除くがごとし、又虛空の衆相を出過すれども而も萬像の具依たるがごとし、若し此の不思議解脫に住する時は卽ち是れ眞の阿羅漢なり有爲無爲に著せず一切世間に廣大の供養を受くべし、故に經に世間宗奉常應供養といふなり。復次に阿闍梨この應供の義を明さんと欲ふが故に三劫の始終を統論するに寶珠の譬喩を作す、猶し如意寶あつて石礦の中に在り、世人識らざるを以つての故に衢路の間に棄て在いて瓦礫と異なること無し、然るを寶を別くるものは、微相あつて纔に影の外に彰はるゝを見て卽ち之を識つて先づ利鐵を用つて鈍石を鐫り去く既に寶玉に近づきぬれば其の石漸く耎なり、復諸藥を以つて之に食うて礦穢をして消化せしむ而も復その質を傷らず、その時に麁垢已に除いて尙し細垢あり既に洗ふに灰水を以つてし磨くに淨疊を以つてし種々の方便をもて之を瑩發す、既に光顯なることを得つれば之を高幢に置いて能く一切の所求に隨つて普く衆物を雨す、その時に世人奇特の想ひを生じてこの寶を尊重すること猶し

大天のごとし、能く希願を充滿するを以つての故に然も此の寶は一時の間に於いて普く衆心に應ひ其の所得に隨つて各各差別なり然も此の衆物は寶の中に於いて先よりありとせんや、先より無しや、若し先より有りといはば卽ちこの小珠に何ぞ能く頓に衆物を藏めん、若し先より無しといはば又何ぞ能く頓に衆物を雨さんといはんか、卽ち此の世間の寶性すら已に不可思議なり、何に況んや衆生の菩提心の寶をや、この故に諸の善知識纔に衆生の世間の八心の適めて萠動するを見るとき卽便ち是れ眞寶なりと識り鑒るべきの理ありと知ること彼の相者の曾つて多く名寶を識るを以つて、この以に遇へば便ち之を識るがごとし、諸佛菩薩も亦爾なり、久しく已に親り一毫の善より自ら大菩提の道に致ることを證知したまへり、この故に彼の情機を鑑みて卽ち大に歡喜して方便をもて誘進して三歸を受けしむ、前に已に分別して說くがごとし、譬へば彼の頑石を收めて家中に置在くが如し、次に三種の三心を以つて業煩惱の根無明の種子を拔くは利鐵をもて開き鑿つて其の麁鑛を去るが如し、次に無緣乘の法無我性を觀ずるは漸く奠處に至り藥物を以つて消化して之れを傷らざるがごとし、次に極無自性心を生ずるは灰水を以つて瑩拭して極光淨ならしむるがごとし、爾の時に佛家に生ずるをは高幢に置在して種々の寶を雨すと名づく、この因緣を以つての故に世間廣大の供養を受くるに堪へたり、若し行者直に眞言門に從つて心寶を見ることを得るは仙人の咒術に善くして神力を以つて之を取るが如し巧拙難易不同なりと雖も寶を獲ること終に異路なし故に此の經に淺より深に至るまで廣く心相を明すことは皆菩提心の本末の因緣を開示せんが爲なり、若し但し常途の法相に依らば則ち諸佛大秘密我今悉開衍といふことを得じ。

經に秘密主信解行地觀察三心無量波羅蜜多慧觀四攝法信解地無對無量不思議建立十心無邊智生といふは、此の經宗は淨菩提心より以上の十住地は皆これ信解の中の行なり、唯し如來をのみ究竟一切智地と名づく、華嚴の中にいふが如し、初地の菩薩は能く如來本行の所入を信じ諸波羅蜜を成就することを信じ諸の勝地に入ることを信じ、力を成就することを信じ、無所畏を具足することを信じ、不可壞の不具の佛法を生長することを信じ、不思議の佛法を信じ、無中邊の佛の境界を出生することを信じ、隨つて如來の無量の境界に入ることを信じ、果を成就することを信ずと、是くの如くの諸事に於いて其の心畢竟じて破壞すべからずと復他緣に隨つて轉せざるが故に信解行地と名づけ、亦は到於修行地と名づく。觀察三

心といふは卽ち是れ因根究竟の心なり、若し信解地を通論せば則ち是れ初地の菩薩は此の虛空無垢菩提心を得るとき、自然に十無盡界に於いて十大願を生じ乃至百萬阿僧祇の大願を滿足す、此れを以つて卽ちこれ菩提心を因とす、二地より以去は大悲萬行を增修す、卽ち是れ無盡の大願、十法界に於いて根を生ずるなり乃至漸次に增長して第八地に至るより以去を皆方便地と名く、佛性論に云く、八地以上は境界皆同なり、但し方便に約して階降を爲すまくのみ。若し一一の地を觀ずれば亦自ら三心あり衆多の十因緣を以つて初地に入ることを得るが如きを名けて因緣とす、既に安住し已つて種種の大悲萬行を以て是の地を淨治するを名けて根とす、淨治地の果相と及び方便の業とを說いて究竟と名く、餘は皆此れに准せよ。此の經の無量波羅蜜多四攝法といふは卽ち是れ治地なり、行者これより待對あること無く心量を出過せる不思議地なり、華嚴に云く十大願を發し已つて則ち利益心柔耎心隨順心寂靜心調伏心寂滅心謙下心潤澤心不動心不濁心を得、次に又十種の淨諸地の法を成就す、所謂信と悲と慈と捨と疲厭あること無きと諸の經論を知ると善く世法を解すると慙愧と及び堅固力と諸佛を供養し敎に依つて修行するとなり、復次に是の地に住し已つて善く諸地の障を知り、善く地の成壞を知り、善く地の相果を知り、善く地の得修を知り、善く地の法淸淨を知り、善く地の轉行を知り、善く地地の處非處を知り、善く地地の殊勝智を知り、善く地地の不退轉を知り、善く一切の菩薩地を淨治し乃至如來地に轉入することを知る、是くの如く等の衆多の十心あり若し廣く分別すれば卽ち百萬阿僧祇の度門あり、故に無邊智生といふ。更に前の三心に約して十心を作して之を說くべし、信解地を通論せば則ち初地を種子とし、二地を芽とし、三地を疱とし、四地を葉とし、五地を花とし、六地を果とし、七地を受用種子とし、八地を無畏依とす、所謂果中の果なり、九地をば進んで佛地を求むる慧生ずることありとす、これ最勝心なり、十地には此の心決定せり、此の三心は別の境界なし、還つて是れ第八心の中に於いて方便に約して轉じて之を開出すまくのみ。若し一一の地の中に亦自ら此の十心を具す、且く初地に住するとき諸地を淨治する法を成就すると及び諸地の相を知るとの如きは、卽ちこれ先づ一地を解すること竟んぬ、これに藉つて因として智慧增長す、更に二地を解すること十心を以つて類例して之を推して知んぬべし。華嚴に衆多の十法門あり亦當にこれに准じて次第に廣く分別して說くべし、然も此の經宗は初地よ

り卽ち金剛寶藏に入ることを得るが故に、華嚴の十地經の一一の名言、阿闍梨の所傳に依らば皆須く二種の釋を作すべし、一には淺略の釋、二には深秘の釋なり、若し是くの如くの密號を達せずして但し文に依つて之を說かば則ち因緣の事相、十住品に往き涉る、若し金剛頂の十六大菩薩生を解せば自ら當に證知すべし。經に我一切諸有所說皆依此而得といふは、如上の一切知地の無盡莊嚴の境界と及び餘の無量の修多羅に佛の稱歎したまふ所の一切の行果とは此れに因つて之を得ずといふこと無し、この故に餘經には是くの如く廣く沙羅樹王の莖葉花果を歎ず。今この經の中には唯し此の樹王の種子及び生育の因緣を明せり、若し此の因緣を離れて能く彼の果を成ずといはば是の處あること無し、大日經王と稱する所以は此れが爲にあらずや。經に復益を擧げて勸修して是故智者當思惟此一切智信解地復越一劫昇住此地といふは、卽ちこれ初めて此の信解地に入るなり、これ復百六十心の一重の細惑を越ゆるを三大阿僧祇劫を度すと名づく、行者初めて空性を觀ずるとき、一切の法皆心の實際に入ると覺る、下衆生として度すべきを見ず、上諸佛として求むべきを見ず、爾の時に萬行休息して究竟をなすと謂へり、若し此れに住するときは卽ち退いて二乘地に墮せず、進んで菩薩地に上ることを得じ名けて法愛生とし亦無記心と名く、然も菩提心の勢力と及び如來の加持力とを以つて復能く悲願を發起す、爾の時に十方の諸佛同時に現前して之を勸喩したまふ、佛の敎授を蒙るを以つての故に轉じて極無自性心を生ず、乃至心の實際も亦不可得なり、一切の業煩惱を解脫すと雖も而も業煩惱具に存せり、此の不思議地に至るを乃ち眞に二乘地を離ると名く、前の三句の義の中に就いて更に佛地を開きて上上方便心とす、此の第四の心に至る時を究竟一切智地と名づく、故に此の四分の一に信解を度すと曰ふなり。

大毗盧遮那成佛經疏卷第二終

大毗盧遮那成佛經疏卷第三

沙門一行阿闍梨記

入眞言門住心品第一の餘

經に爾時執金剛秘密主白佛言世尊願救世者演說心相菩薩有幾種得無畏處乃至當得一切法自性平等無畏と云ふは、猶し是れ前の心相の句を答す、金剛手既に此の敎のもろ〳〵の菩薩は直に眞言門に乘じて菩薩地に上ると聞くを以ての故に、世尊此の菩薩、道を行ずる時には幾く種の無畏處を得ることあると問ひたてまつる、佛還つて復前の三劫に約して差降を作して對明したまふ、梵音の阿濕縛娑、正譯には當に蘇息處といふべし、人の强力の者の爲に喉を持扼せられて氣を閉ぢ將に悶絕せんとするに垂として忽に放捨を蒙つて還つて亦蘇ることを得るが如く衆生も亦復かくの如し、妄想業煩惱の爲に纏はされ緣に觸れて皆閉ぢらる、此の六處に至るは再び生ずることを得るが如し、故に蘇息處と名く、亦險惡道を度る時その心泰然として畏懼するところ無きが如し故に無畏處と名く。佛言秘密主彼愚童凡夫修諸善法害不善法當得善無畏とは善の義は淺深に通ず、いまこの中の意

は十善業道を明す、世人の如きは十不善道の因緣を以て惡趣に漂沈して窮已あることなし、後に順世の八心を得、也た漸く三歸戒を受け無量世に於いて人天の中に生じ後に涅槃に至る、三途の劇苦を免離するを以て最初の蘇息處と名く、若し眞言行者初めて三昧耶に入り三密の供養に依つて修行する位此れと齊等なり。

經に若如實知我當得身無畏といふは循身觀を修するときのごときは、此の身は卅六物の集成するところ五種の不淨惡露充滿すと見て、終に此れが爲に貪愛を生せず。次に復受心法を觀じて我性を觀ぜず四種の顚倒を離るゝことを得るときには身の諸〻の扼縛に於いて蘇息處を得、若し眞言行者本尊の三昧の衆相現前する時の位これと齊し。

經に若於取蘊所集我身捨自色像觀當得無我畏といふは、謂く唯蘊無我を觀ずるとき陰界入の中に於いて種種に分析し推求するに我不可得なり、此の自の色像を捨つとは、譬へば樹に因つて則ち樹の影現ずることあり若し樹なきときには影なに由てか生ぜんと云ふが如く、今五蘊すら尙し緣より生じて都べて自性なし、何に況んや此の積集の中に而も我あらんや、如上の所說に乃至湛寂の心を證して一切の過を離るといふは、是れ我の扼縛に於いて蘇息所を得るなり。若し眞言行者

瑜伽の境界一切分段の中に於いて能く心不可得なりと觀じて愛慢を生ぜざる位これと齊し。

經に若害蘊住法攀緣當得法無畏といふは、謂く行者の心蘊の中に住する時離著を發起せしめんと欲ふ、その時に幻燄等の喩をもて諸蘊の卽空を觀察して違順の八心を離れ寂然界を證することを得、然して蘊の扼縛を離れて法に於いて蘇息處を得、法は謂く十緣生句なり、若し眞言行者現に瑜伽の境界は皆鏡像水月の如く無性無生なりと覺るときの位これと齊し。

經に若害法住無緣當得法無我無畏と云ふは、卽ちこれ無緣乘の心をもて法無我性を觀察し心外有無の影像に於いて智都べて所得なし、心王自在にして本不生を覺り法の扼縛を離るゝことを得、法無我に於いて蘇息處を得、若し眞言行者瑜伽の道の中に於いて心に自在の用を得るときの位これと齊し。

經に若復一切蘊界處能執所執我壽命等及法無緣空自性無性此空智生當得一切法自性平等無畏といふは、謂く自心の畢竟空の性を觀ずるとき我と蘊と法と及び無緣と皆同一性なり、所謂自性無性なり、此の空智生ずれば卽ちこの時に極無自性心生ずるなり、業煩惱等に於いて都べて所縛なく亦所脫なし、故に得一切法自性平等といふ。爾の時に有爲無爲界の二種の扼縛に於いて蘇息處を得、卽ちこれ眞言行者の虛空無垢の菩提心なり、然も此の心は在纏出纏皆畢竟して無相なり如來の五眼を以て諦觀すとも尙し其の像貌を得ること能はず、況んや餘の生滅の中の人をや、今廣く三劫六無畏處の衆多の心相を明す所以は皆これ外迹に擬儀して以て修證の深淺を明すのみ、上に已に烟の相を見て以て火性を比知すべしと明す、但し知んぬ、心垢盡くる所に戲論行せざるは卽ちこれ第六の無畏依なり、更に如何か表示せんと欲せんや。

經に秘密主若眞言門修菩薩行諸菩薩深修觀察十緣生句當於眞言行通達作證乃至如實遍知一切心相といふは、是れ略して前の問ひの中の修行の句を答するなり、下の文の萬行の方便の中の如きは、此の十緣生句に藉つて心垢を淨除せざることなし、この故に當に知るべし、寂も旨要と爲す眞言行者特に宜しく意を留めて之を思ふべし、然も此の品の中の十緣生句を統論するに略して三種あり、一には心蘊の中に沒するを以つて實法を對治せんと欲ふが故に此の十緣生句を觀ず、前の所說の如く卽空の幻これなり、二には心法の中に沒するを以て境界の攀緣を對治せんと欲ふが故に此の十緣生句を觀ず、前の所說の如く蘊の阿賴耶の卽心の幻これ

なり、三には心、心の實際の中に沒するを以て有爲無爲界を離れんと欲ふが故に、此の十緣生句を觀ず、前の所說の如く一切の業煩惱を解脫すれども而も業煩惱の具依たり、卽ち不思議の幻なり、摩訶般若の中の十喩に亦具に三の意を含せり、今この中に深修觀察といふは、卽ちこれ意は第三重を明すなり、且く行者瑜伽の中に於いて自心を以て感と爲す、佛心を應と爲して感應の因緣卽時に毗盧遮那、所憙見の身を現じ所宜聞の法を說きたまふが如きは、然も我が心亦畢竟淨なり佛心亦畢竟淨なり、若し我心に望めては自と爲し佛心に卽しては他と爲す、今この境界は自より生ずとやせん、他より生ずるか、共より生ずるか、無因より生ずるか、中論に種々の門を以て之を觀ずるに生不可得なり、而も形聲宛然として卽ち是れ法界なり、幻と論ずれば卽ち幻なり、法界と論ずれば卽ち法界なり、遍一切處と論ずれば卽ち遍一切處なり、幻と論ずるが故に不可思議幻と名く。復次に深修と言ふは、謂く淨心を得るより已去大悲、根を生ずるより乃し方便究竟に至るまで其の間の一一の緣起皆當に十喩を以て之を觀ずべし、所證轉深きに由るが故に深觀察と言ふ。且く四諦の義の如きは直に娑訶世界に已に無量無邊の差別の名ありと示す、又況んや無盡法界の中の逗機の方便何ぞ窮盡すべき、今行者、

一念の淨心の中に於いて是くのごとくの塵沙の四諦を通達す。空といへば則ち畢竟不生なり、有といへば則ち其の性相を盡くす、中といへば則ち擧體皆常なり、三法は定相なきを以ての故に名けて不思議幻となす、四諦をいふが如きは餘の一切の法門も例すべしのみ。是の故に唯し如來のみいまして乃ち能く此の十喩を窮じて其の源底に達したまふ。此の經に無垢の菩提心に次いで卽ち十喩を明す所以は始終を包括し諸地を綜該するなり、既に緣に觸れて觀を成ず縷さに說くべからず、今且く釋論に依つて其の大歸を明すべしのみ。

經に云何爲十謂如幻陽燄夢影乾闥婆城響水月浮泡虛空花旋火輪乃至云何爲幻謂如呪術藥力能造所造種々色像惑自眼故見希有事展轉相生往來十方然彼非去非不去何以故本性淨故如是眞言幻持誦成就能生一切といふは、佛藥力の不思議を說きたまへり、人藥力を以ての故に空に昇り形を隱くし水を履み火を踏むが如きは、此の事もろ〳〵の論師等の能く因量を建立して其の所由を出すにあらず、亦疑を生じて定めて爾るべし或は爾るべからずと謂ふべきにあらず、是くの如くの籌度の境界を過ぎたり、唯し親り此の藥を行じて執持行用するもののみ、乃し證知するのみ。又藥術の因緣をもて能造所造の種種の色像を示現するが如きは、衆緣の